魚、その他

u_

魚

　道の真ん中の大きな水溜まりを跨げないで、そこで行き止まってどうにも出来ないでいると、急に眠気に襲われて倒れ込む。それは夢で、夢から醒めると、私は、ザラザラした冷たい岩の地面に倒れ込んでいて、目の前の窪みに水が溜まっていた。水の上の方は透き通っていたが、途中から黄色く濁って、底は見通せなかった。下半身は痺れているようで、私は、横になったまま窪みに身を乗り出して、水に触れようとした。思いの外、窪みは深くて、腕をいっぱいに伸ばしても、水面には届かない。

　その先のゴツゴツした岩場の斜面を、殆ど四つん這いの辿々しい足取りで、男が下りてくる。風があって、白い服は捲れ上がり、裸の胸が覗いた。私は、女だが男の恰好をしている。私の居る辺りは、風がなくて、まるで私が、その男の姿を眺めて、風を起こしているようでもある。男の右手に握られている白

い紙の束も、風にはためいた。紙に何か書かれてあるかも知れないと、それを私がじっと見詰めてしまったせいなのか、風は、男の居る辺りでだけ益々強くなるようで、遂に男は足を滑らせ、斜面を転げ落ちて見えなくなった。その見えなくなった辺りから、紙だけが、フワフワと舞い上がった。それを見て私は、下半身が痺れたままだったが、同じように、フワフワと立ち上がれた。

その立ち上がっている途中でだけ、紙は止まって見えて、易々とその数を数えられた。十枚の紙は、それより私に近付きも遠ざかりも、地面に落ちもせずに、そこに浮いていた。風が已んでいて、さっきの男とは反対の方向から、ゴムのように密着して全身を覆った黒い服の男達が何人か、紙目掛けて、走り寄ってくる。彼らは一斉に、握り締めているナイフで、紙に切り付けた。空いた手で紙を掴んでから切れば手っ取り早いのに、誰もそうしなかった。私がそのナイフと紙を強く見詰めると、そこで風が回って、紙は、切っ先を際どく擦り抜けるようだった。男達は、一人また一人と、そこで足を滑らせて姿を消していった。しかし、幾らゴツゴツした岩場でも、足を滑らせただけで、どうして直ぐさま消えてしまうのか。私の目は、紙やナイフより、何処かに転げ落ちようとする男達の足元に、惹き付けられていた。

そうして、男達がすっかり居なくなると、宙を舞っていた筈の紙は、窪みの水の上だった。ナイフを躱せたと見えていたのに、どれもズタズタにされてい

て、水が染みて沈み掛けている。私は、水に入ってでもそれを取り上げようと、急いで窪みに踏み込んだ。水は、直ぐそこではないのか。いや、私は、大きな窪みの底に溜まった水目掛けて、駆け下りていた。駆け下る程、水際までなかなか遠いのが見えて来る。そう見えると、水際は直ぐそこで、どちらを振り仰いでも、窪みのツルリとした凹面が延び上がり、ゴツゴツした岩場はその向こうに退いていた。窪みの一番底は、岩が瘤のように盛り上がっていて、その瘤の上が窪んでいて、そこに水が溜まっている。その直ぐ脇に居る私は、突っ立ったまま、掌で水に触れられたし、身を乗り出せば、十枚の紙全てに手が届いた。

　しかし、掴めない。逃げるように掌を擦り抜ける。私が水の外に居るからだ。私は、瘤の縁に這い上がり、水に入ろうとしたが、男の服を濡らす訳にはいかない。替えはないし、一度濡れてしまった服を着直しても、また男の恰好が出来るとは限らない。実際これは、男の服でも女の服でもなくて、私はただ、濡れていない服を着ているので、男のようでいられるだけかも知れない。男達は皆、乾いた風に吹き煽られて、乾き果てた服を着ていたではないか。私は、瘤の縁の水際で、危うくバランスを取りながら服を脱いで、それを出来るだけ水から離れた方へ投げた。

　一歩水に踏み込むと、いきなり深みで、温くて甘い味のする水に頭まで沈ん

だ。足はまだ水底に着いていないのに、真上に水面が見上げられた。腕を伸ばしても、もうそこの紙には届かない。ただ、水の中からだと、紙は大分違って見えた。闇雲に切り裂かれた訳ではなかったのだ。切れ目は規則正しくて、計算通りに捻られた紙は、それぞれ綺麗な立体を拵えている。その中に含まれる水が、それぞれの紙の裏側の色に染まるのか、別の色に見えた。どれも、プックリと脹らんで、脂の乗った魚の腹のようではないか。水底は、円錐形に急に窄まっていて、そこに腰が閊えて、それより沈まずに済んだ。そこから尚、狭い穴が下に延びて行くのだろう。そこへ、紙が、ゆっくりと縦一列に並んで、螺旋を描いて沈んで来た。大口を開けた魚の群れのようだ。いや、ギザギザの歯まではっきり見えて、それらは魚に違いなかった。紙は疾っくに、十尾の魚に一枚ずつ吞み込まれていたのだ。次の餌食は、ぼんやり奴らを見上げている私の顔か。きっと、青白くてのっぺりしていて、奴らには紙そっくりに見えるだろう。私に出来るのは、奴らより大きく、口を真上に向けて開けている事だけだった。

　魚は、次々に私の喉の奥へ滑り込み、それに連れて、私の体は、クネクネと水を掻いて水面に向かった。魚を全て吞んでからは、自分で体を動かして泳がなければならなかったが、それでも私は、手足を使わず、ただ腰を拗らせて水を捌いた。水から顔を出した途端、喉が詰まって息が苦しくなった。真上に向

けて口を開けたまま、喉を振り絞ると、クシャクシャの白い紙が、次々に吐き出された。それらは水の上を撥ねて、水の縁から転げ出て見えなくなった。
　私の耳では聞き取れなかったが、私は、突拍子もないような声を張り上げたのかも知れない。男か女か分からないが、一斉に何人かが、窪みの縁に見上げられた。私は、見付からないように、頭まで水に沈めた。水を通しても、窪みのツルリとした凹面を凄い勢いで滑り降りてくる彼らの姿は、見て取れた。彼らは皆、そっくり同じ服を着ていて、それが捲れ上がると、裸の胸が覗いた。それでも男か女か分からないが、その服にだけは見覚えがある。私が水に入る前に脱いだ服だ。彼らは、窪みの底まで下りると、私の吐いた紙を一枚ずつ拾い上げ、それを振り翳して、瘤の周りを歩き回った。私を探しているのだろうか。すっかり取り囲まれていて、ただ、水の中に身を潜めているだけでは、見付かるのも時間の問題か。
　水面に、紙が一枚だけ浮いている。水の中から見ても、それは、ズタズタに切り裂かれたままにしか見えない。私は、それに腕を伸ばした。すると、周りから一斉に、水の中へ腕が突っ込まれてきて、その私の腕を掴んだ。私は、水から引っ張り上げられた。彼らは、私に見向きもせず、それぞれが手にしている紙の皺を伸ばして重ねた。全部で九枚だったが、ナイフで切られた跡はなかった。

「どうして、女の恰好をしているのか。」と、私は尋ねた。
彼らは一斉に私の方を向いて、九枚重ねの紙を差し出した。私は、私のズタズタの紙を彼らに見せたくなくて、それを受け取らずにいた。私は、質問を言い間違えた気がして、言い直した。
「どうして、男の恰好をしているのか。」
「そうか、紙を呑み込めばいいのか。」と、彼らは口々に言って、私の服を脱いだ。その下は、裸ではなくて、ゴムのように密着した黒い服で全身を覆っていた。つまり彼らは皆、男だった。私だけが女で、しかも裸であるのに、今更気付いた。私は、ズタズタの紙一枚で、体を覆おうとした。
「どうして、女の恰好をしているのか。」と、彼らが聞いてきた。
「紙を呑み込むんじゃなかったのか。」と、私は尋ね返した。
「紙を呑むって？」と言って、また彼らは、手に持つ紙を重ねて、私に向けた。
私は、九枚を一掴みにして、水の方に放った。紙は、ハラハラと舞って、水に触れた途端、素速く水に潜った。男達は、それを追って我先に水に飛び込んだ。覗き込むと、紙は物凄い速さで、水底の黄色い穴の奥に消えた。男達は皆、私より痩せていて、その穴に腰が閊える事もなく、それに続いて、真っ直ぐ穴に消えた。

私は、男達の残していった私の服を、着ていった。九枚を着重ねるのは大変に思えたが、一枚一枚が透き通るように薄くて、全て重ねてやっと、白い服になった。水に映すと、私の姿は、全く女の恰好だった。ズタズタの紙を、何時までも手に持っているせいだろうか。それを水に放り投げたが、何も変わらない。紙は、水に潜る事も魚に呑まれる事もなく、ナイフで切り付けられた数え切れない裂け目ばかりを目立たせて、水に沈み掛けたまま動かない。目を背けたいが、周りに見えるのは、窪みのツルリとした凹面だけで、どうしても視線は押し戻されてしまう。ツルツルの凹面など登れる筈もない。この大きな窪み一杯に水が満ちて、私の体を浮き上がらせでもしない限り、ずっとここに居るしかないが、それよりも、紙から目を背けたくて頭は一杯だった。いっそ男達のように、紙を呑もうとすべきなのか。しかし、女の姿では、もう決して水に触れてはならないようだった。（二〇〇二年五月一日）

*　　*　　*

患者

医者に、「薬は？」と聞くと、窓硝子に色鉛筆で手早く絵を描いて、「これが

薬だ。」と言った。日が暮れ掛けていて、元々日当たりの悪い部屋は、窓際の他は殆ど真っ暗だったが、医者は、灯りを嫌ってただ窓からの光りを頼りに、手早く絵を仕上げた。それから、治療の方法の書かれた小さな紙を、窓際の脚の長い円卓に置き、その上に小さな硝子の箱を重し代わりに乗せて、満足そうな様子で帰っていった。男は、毛むくじゃらの犬を抱いて起き上がり、腰を屈めて、その窓硝子を覗き込んだ。絵の中では、馬面の人物が、胸の前に手鏡を翳し、そこに映っている自らの透けた心臓を、涼しい顔で眺めている。赤と黒と金の三色で描かれていた。

　部屋に、女が入って来て、医者を名乗った。男が、「医者に用はない。」と言うと、女は、窓の分厚い赤いカーテンを引いて、部屋を更に暗くしてから、「どうして灯りを点けないのか。」と聞いてきた。男は、一日中陽の当たらない窓に、なぜカーテンが必要なのかと思いながら、「医者は、灯りが嫌いだからだ。」と答えると、女は、カーテンを乱暴に払って窓を開け、「薬がなければやっていけないのは、音楽が聞こえて来ないからだ。」と言った。男は、窓硝子の鉛筆画が、色が剥げて、薄くなっているのを見て取った。無造作に開け閉めされたカーテンが、擦り付けられたのだ。

「あなたが、医者嫌いなのは分かる。」と、女が言った。

「いや、医者が、灯りが嫌いだと言ったんだ。」と、男が言うと、その意見

に賛成出来ないのか、犬が、男の腕を擦り抜けて、尻尾を振りながら女の方に行った。

「灯りは何処です？」

「医者に聞いてくれ。」

「医者は私だけど、知りませんよ。」と、女は言って、カーテンの脇の椅子に掛けた。剥き出しの組んだ脚だけに、窓からの光りが差した。顔も体も暗くて見えない。

男は、そろそろと窓を閉め、また硝子の鉛筆画を間近に見詰めた。馬面の人物の胸元は、はだけていた。それとも、カーテンに擦られて、そう見えてしまうのか。男の胸元も、犬の後ろ脚に蹴られて、はだけていた。覗き込むと、硝子のように透き通った自らの心臓が見えて、そこだけヒンヤリした。しかし、それは、心臓ではなくて、心臓を象ったような硝子瓶だった。音も立てずに、女が、体を擦り寄せていて、その瓶を持つ手を、男の胸の中に差し入れているのだ。女は、それを、男の肌にグイグイと押し付けた。男は、女のするに任せて、絵の描かれていない窓硝子越しに外を見た。

「何も見えないでしょう。」と、女が言った。なだらかに波打つ濡れた地面に、濡れた新聞紙が張り付いているのが、白っぽく滲んで見えた。それを見付けたせいか分からないが、硝子瓶の冷たさが急に耐え難く感じられて、男は、

女の手を払いながら後退った。それから、その胸の一番冷えた辺りに掌を当てようとすると、掌は金色に塗られて輝き、そこに自らの心臓が映った。しかし、それも心臓ではなくて、押し付けられていた硝子瓶の形に赤らんだ肌が、黒っぽく映っているのだった。掌も、金が塗られているのではなく、脂が浮いてテカっているだけか。

　女は、硝子瓶の小さな蓋を回していた。キュルキュルと、ゴムと硝子が擦れる音がする。男にはひどく耳障りで、胸と同じ冷たさが、真っ直ぐ耳に流れ込むようだった。犬も、項垂れて、女の足の匂いでも嗅ぐようだ。その犬と並ぶように、男は、しゃがみ込んだ。見上げると、一番高い窓硝子に額を押し付けて、こちらを覗き込んでいる顔が見えた。長い首の輪郭がゴツゴツしていた。男は力が抜けて、床に尻を付け、そのまま仰向けに倒れるのを両腕を突っ張って支えながら、

「それが、音楽なのか。」と、ややトゲのある調子で言った。男の方を振り返った女は、一瞬微笑んでから、蓋を取った硝子瓶を、男に向けて放った。胸に当たった硝子瓶を、慌てて片手で受けた。握ると、微かに縮むようで、硝子ではなさそうだ。自らの手で掴めば、それは少しも冷たくなかった。また見上げると、窓の顔が消えていた。力が戻った男は、素速く立ち上がって、円卓の紙を、もう片方の手に取った。弾みで硝子の小箱が床に転がって、鈴の音に似

た音を立てたが、構わなかった。ただ、その音で、耳の中の冷たさが収まっているのは分かって、何となく擽ったかった。紙の上の文字が、薄くぼやけていて読めない。窓越しの新聞紙の方が、余程はっきり読めそうだ。

　女が、窓を開けた。男は、窓を跨ごうとしたが、体が傾いたままになって、巧く行かない。女に硝子瓶を預けると、直ぐに跨げた。泥濘んだ地面を、足を滑らせないように、恐る恐る新聞紙に近付いた。新聞のその一面を隅々まで読んで、目を慣らしてからなら、医者の字も読めるのではないか。物音に振り返ると、窓を跨いで部屋に入ろうとする者が居る。ゴツゴツした項が、部屋の方に傾いて闇に消えた。男は、捻ったままの腰を元に戻せずに、足を滑らせた。踏み付けられた地面の新聞が、グチャグチャになった。医者の置いていった紙も、地面に付いた男の掌の下で、泥塗れだった。それを、馬面が、女と並んで窓から眺めている。男は、部屋に暫く戻らないと決めて、窓に背を向け、新聞を跨いで泥濘に踏み出した。

　そこから、波打つ泥濘だけが、ゆるゆると下ってゆく。それを見ただけで、男の足は竦んだ。男は、窓に背を向けたまま、女に聞こえるように、

「何処に、音楽が聞こえるんだ。」と、怒鳴った。返答の代わりに、犬が走り寄ってきて、男の周りを回った。その泥の撥ねが、男の両目に入った。瞼の裏の泥が、ザラザラと鳴った。「これが音楽か。」と呟くと、男は、口の中が、

舌も口蓋も歯茎もザラザラなのに気付いた。目だけでなく、口にも泥の撥ねが飛び込んだのか。唾を吐こうとしたが、モグモグさせた口が、泥の擦れる音を立てるだけだった。妙に突っ張る脚が段々と拡がって、股ぐらがヒンヤリする。目の中の泥を、涙がやっと押し出すと、両脚共、泥濘に埋まり込んでいる。咄嗟に、体を反らせて、後ろのグチャグチャの新聞を片手で掴んだ。他に掴むものもない。医者が置いていった紙は何処だろう。犬に踏み付けられて、すっかり泥の中だろうか。それを、もう片方の手の、泥塗れの掌に見付けた。小さくて薄っぺらなので、掌に張り付いたままなのだ。表面の泥を指で拭うと、その黒く細い線の文字だけが、先に泥を弾いて、泥の色の中に浮かび上がった。それを声に出して読もうとすると、口の中の泥が、歯に当たったり、舌の上を転がったりして、色々な音を立てた。

　後ろから胸を掴まれ、泥から引っこ抜かれた。馬面だった。ヤツもまた、口をモグモグさせて、よく似た泥の音色を響かせた。しかし、それは、ひどく耳障りで、耳の中は焼けるようだった。その熱が、目の中にまだ残っている泥に伝わるようで、また涙が溢れてくる。その音から逃れようと、滑らないように気を付けて、出来るだけ急いで窓に辿り着いた。それから、泥だらけの手で、女の胸ぐらに掴み掛かり、床に転がっている硝子の箱を取ってくれるよう、頼もうとした。しかし、掴んでいるのは、分厚い赤いカーテンだった。それで目

を擦って見ると、部屋の中に、女の姿はなかった。

　窓を跨ぎたいが、泥が重くて脚が上がらない。ただ、馬面の唱える泥の音楽は、少しずつ収まるようだった。振り返ると、馬面は、口をモグモグさせながら、泥の斜面を、波打ちながら滑り下りて行く。それが泥の中に消えて、音は已んだ。しかし、部屋に入れないのでは、窓枠にしがみ付いたまま、一晩明かすしかないのか。口は真一文字に結んで、動かさなかった。泥の音を聞き付けて、何時また馬面が戻ってくるか知れない。

　部屋の灯りが点いて目が眩んだが、その中に、並んで椅子に掛ける痩せこけた二人が、影のように現れた。灯りは真っ直ぐこちらに向けて照らされるようで、何時までも目は慣れなかったが、二人の顔には見覚えがある。二人共、私の患者に違いなかった。彼らを治しに遥々遣って来た私は、窓にしがみ付いたまま、二人の目を見て、口をモグモグさせた。泥の音色が、部屋中に響き渡った。更に私は、それに勇気付けられて、思い切って両腕を拡げ、上体を揺らして、その響きに変化を付けていった。床に落ちている硝子の小箱までが、ブルブルと跳ねるのが見えた。泥の響きの中に、鈴の音に似た音も混じっているのだろう。私の直ぐ後ろで、馬面が、私に合わせて泥を奏でているのが分かったが、耳は何ともなかった。私達は、夜を明かして音楽に浸った。

　空が白むと、体の泥は、殆ど振り落とされていた。身軽になって、窓を跨い

で部屋に入った。一人だった。そっと窓を閉めると、窓越しに、泥と新聞紙に塗れた犬が、仰向けのまま、萎びたように動かなくなっているのが見えた。閉じた目は、濡れた毛の中にすっかり埋まっていたが、その顔は、嬉しがっているままにも見える。床の硝子の小箱を拾って、それをまた床に放った。それが、暗い方に転がって見失われると、胸の上っ面の辺りが、硝子のような音を立てた。その硝子の心臓の震える姿を、どうしても見て取りたくて、男は、手鏡を探し回った。（二〇〇二年五月三日）

*　　*　　*

公園

見上げると、空が全て鏡だった。そうであるなら、地上からは見えない地上の様子が遙かに見晴らせそうだ。空の一番高い所に、そこを見上げる私の姿が、逆様に映っているのを見付けた。周りには誰も居ない。体をゆっくり一回りさせて、空を隅々まで見渡したが、私の他には誰の姿も映らない。何処までも人一人居ない地上の様子が、逆様になって、空の半球を埋め尽くしている。私独りが残されて、地上から人が全て蒸発してしまう事など、あり得ない。空が鏡

になったのを恐れて、疾っくに、申し合わせてあった避難場所に、逃げた後なのか。それとも、空の鏡は、それを見上げる者の姿だけを、映して見せるのか。それなら、独りだけの姿を見上げているのは、私だけではない。しかし、そうであるにしては、静か過ぎる。空が鏡なのを見て、大騒ぎになっていなければならない。空が鏡なのを見て取れるのは、私だけか。それとも、周りが静かなのは、私の耳のせいか。鏡になった空を見た私は、もう、その鏡の空の、冷たく張り詰めた静けさに、耳を澄ませるしかないのかも知れない。

目を地上に降ろした。そこには、ものの輪郭しかなくて、輪郭の中は全て鏡だった。覗き込むと、覗き込んだ所には全て、青い空だけが映った。ものの形は様々で、ざっと見渡せば、色んな方を向いた鏡が目に入って来るのに、私の姿も、地上にあるものの形も、一つも映らない。それに、その青い空だが、一体、何処から映り込むのか。空一面、逆様の地上が映っている筈だ。もちろん、そんな事を考えてみても、答えは出そうにない。このまま鏡に埋もれてしまいたくないなら、棒でも石でも拾って、手近なものの形のどれかに、打ち下ろしてみるべきだ。棒らしいものの形や石らしいものの形を見付けるのは、そう難しくなかった。しかし、それらはどれも、ものではなく、ものの形に過ぎない。ものの形なだけでは、手に取れない。頼りになるのは、生身だけだ。私は、拳を固めて、ものの形に打ち下ろした。しかし、拳はどれも、そこに映る大小様

々な青い空に向けて、繰り出されるだけだ。

　その生身の私はどうなのか。生身の私の輪郭の中には、青い空は映り込んでいないのか。それが、見えて来ない。その見えて来ないせいで、私は、生身の私とその他のものの形を区別出来て、自らを見失わずにいられるようでもある。いや、そうではない。私は疾っくに、生身の私など見失っている。それで良いに違いない。こんな所に、独り生身を晒す自らの姿を見るのは、却って耐え難い。ただそうであっても、このままで良い訳はない。そこが鏡か鏡でないかは分からないが、私は、私の胸の辺りを、固めた拳で突いた。

　確かに手加減はしなかったが、思い掛けず強い衝撃が、斜めから来た。見上げると、空の一番高い所に映る私の姿は、殆ど二つに割れていた。割れ目同士が巧く噛み合って立っていられるが、少し動いて、それがずれれば、私は崩れ落ちるのではないか。今度は少し手加減して、二発目の拳を打ち込んだ。空に映る私を見上げながらそうしたせいか、私の姿が崩れる代わりに、空の一番高い所にヒビが入り、それは、一瞬の内に広い空を縦に走って、地上との縁まで達した。ヒビは、ぴったり閉じたままだが、ヒビを境に、その左右に映る地上の位置が、少しだけ、ずれてしまっている。ヒビが空の奥深くまで達しているのを、見せ付けられるようだ。それよりも問題は、その左右の空に跨っている私ではないか。右半身と左半身はすっかりずれて、もう触れ合ってもいない。

三発目の拳を振り立てても、狙い定めた胸まではまるで届かない。

目をまた地上に降ろした。生身の私の在りようは、愈愈分かり難くなっている。しかし、ものの形は、さっきよりも細かな所まで、目が行き届くようだ。離れ離れの二つの目で見れば、それだけものの輪郭は、研ぎ澄まされるという事か。ただ、その中の鏡に映る青空は、焦点を巧く合わせられなくて、ひどく見難くなった。無理にも見て取ろうとすると、どの一枚の鏡の中にも二つの空が、窮屈そうに収まっている。その境目は、ヒビが入ったようには、はっきりと見て取れないが、鏡のほぼ真ん中を、縦に通っているのは確かなようだ。

また見上げると、そこに映る地上のものの形の一つ一つの中にも、二つの青空は、並んで映り込んでいる。その小さな無数の境目が、地上全体を、ギザギザであるように見せ掛けた。そして、ものの形に閉ざされていたその二つの青の映り込みが、あちらこちらで、ものの形を横断して繋がり合うと、ギザギザの山と谷も、段々と大振りになる。その険しい山と谷の真っ青な狭間に、私は、二つに割れた私の姿を探すしかないが、おいそれと見付かりそうにない。空に映る私の姿さえ紛失してしまっては、地上の生身の私など、もう影も形もないだろうか。鏡の空に映る二つの青空が、一繋がりに拡がって行くのも、私の二つの目が、どんどん離れ離れになっているせいかも知れない。鏡の空に映る地上の様子にしても、折れて連なる真っ青なる巨大な傾斜の中に、ものの形は殆ど

溶けて、地上らしい景観とは、およそ懸け離れてしまった。見ていて楽しくもないが、地上に目を降ろせば、もっと酷いものを見せられそうだ。空を見上げたままでいたいが、独りでに目は降りてくる。

何を見ているのか。ものの形はどれも溶け掛け、その中の鏡もどうにかなってしまったようでは、そこに映る二つの青空など、疾っくに何処かに飛び去った後だ。と言って、色も形もない世界が拡がっているのでもない。相変わらず雑多で、地上のようであるままだが、その中の何処にも、目が行かない。いや、そうでもない。私の目は、ちゃんと鏡の表面に届いているのではないか。

その鏡は、私の片割れに違いなかった。そして、もう一つの片割れが、それを映していた。二つに割れた私が、互いの中に映る割れた私の姿を、見詰め合っていた。他のものに目が行かないのも、無理はないか。

そんな私の中に映る私の姿など、決して見てはいけなかったが、もう遅い。空が、丸ごと崩れ落ちて来た。溶け掛けていたものの形が、吃驚して跳ね起きるように、地上の至る所で、その輪郭をギリギリまで鋭利に浮き出すと、それらは次の瞬間、落ちて来た空に吹き飛ばされて、粉々に砕け散った。二つに割れた鏡の中の、私だけが残った。

青い空に白い雲が流れ、地上には、人の動き回る騒音が、極当たり前に溢れている。日当たりのいい公園で、一組の男女が、一つずつ、割れた鏡を見付け

る。合わせてみると、ぴったり一つになった。二人で覗き込むと、二人とも、自分の拾った鏡の側に、相手の姿が映るのは、見て取れた。しかし、相手の拾った鏡の側に映る筈の自らの姿は、鏡の角度をどう変えても、見て取れない。二人して鏡の角度を色々に変えては見ても、その自らの姿の見えない事は、互いに、相手には伝えようともしない。二人は肩を寄せて、二人の手でぴったり一つにしたままの鏡を持ったまま、公園を出て、桜並木の先の橋を渡る。黙り込んだままでも意思は通じる。二人は、橋の下の水の涸れた川に、鏡を捨てた。

　硬い川底に落ちた二枚の鏡は、向き合って互いを映した。またそこに私は、私に映った私を見てしまうしかなかった。二枚の鏡は直ぐに、その跡形もなくなるまでに、粉々に砕けた。その無数に砕けた鏡の中の私の目で、橋を渡りきった男女の姿を追うと、二人である筈が一人にしか見えなくて、その後ろ姿は、そんな筈はないのに、私自身に思えて仕方なかった。（二〇〇二年五月五日）

*　*　*

寝息

正方形の黒い地面が現れ、その上に見慣れない光る点が三つ並んだりしてい

ては、道に迷ったのを認めるしかない。いや、まだその正方形の地面の縁に立っていて、何も見なかった事にして引き返せば、正しい道を見付けられるかも知れない。しかし、そうはしなかった。

　女は、川縁の道に出ようとしていて、水の流れる音はずっと聞こえていたので、その音のする方へ行くだけだった。それなのに、幾ら歩いても、水の音は近付いて来ない。方向を誤ったように思えると、その都度足を止め、水音の中の一番はっきりしている音を聞き分けて、一分の狂いもないように、そちらに向かった。そうして長い間、耳を澄ませたままでいたせいで、耳の奥から突き上がる鋭い痛みに、もう耐え切れなくなっていた。暫く水音から逃れたいが、どちらに向かえば逃れられるか、先ずはその水音を聞き分けるしかなく、その聞き分けられた方に向かっても、音が少しも遠ざからないのなら、音からは逃れようもない。耳を塞ぐと、耳の中の痛みは、遮られた水音を求めて、却って、耳を押さえる掌さえ突き抜けるように伸び上がった。

　そんな中、いきなり現れた正方形の地面の縁に立つだけで、水音は、遠く籠もるのだ。耳の奥からの痛みは、余り変わらないが、更にひどくはならないようだ。正方形の中でなら、恐らく水音は殆ど届かないに違いなく、耳を休められるだろう。ただ、なかなか踏み出せない。光る点が何なのか、見当だけでも付けたい。少しでも近くに寄って見ようと前屈みになると、三つの点の奥にま

た、光る点が三つ並び、その先に更に、三つの点が現れた。そして、その三列の九つの光る点は、地面は隅から隅までただ黒いだけで他に何もないと、女に見て取らせた。それなら、光る点が、いきなり伸び上がって襲い掛かって来ても、どちらにでも逃げられる。そう信じる事にして、いきなり真ん中は避け、手前側の左端の点に向かって、回り込むように踏み出した。

　水音は、遠く籠もって耳に届くままだ。それとも、水音は、ひょっとして光る点から漏れてくるのではないか。それを誤魔化すために、光って見せているだけか。点に近付き、その音を吹き払うように、そこに強く息を吐いた。すると、光りは、細い筋になって伸び上がり、その震える先だけが脹れて、ひょろ長い茎の上に実を付けたようになった。抓むと、小さな丸い光りを簡単に摘み取れて、また直ぐに、光りの先は丸く脹らんだ。手頃な大きさに思えて、女は、その丸い光りを、右の耳に詰めた。それは、雫のように耳の奥に流れ込み、遠い水音を、更に少しだけ遠ざけるようだった。また、光りの玉を摘んで、左の耳に詰めた。水音はまた少し遠ざかったが、それも耳の奥に流れ込んだ。耳に栓をして、音をすっかり遮るには、その流れ込む光りの玉で、耳の中を一杯にするしかなさそうだ。他にする事もないので、女は根気よく、光りを耳に押し込めていった。

　その手が初めて滑って、頭がくらりとすると、耳の奥で、激しい水音が響い

た。それは、瞬く内に、耳の中のしつこかった鋭い痛みを、洗い流した。水は、遠い何処かでなく、女の頭の中で唸った。これでもう、水音を頼りに道を探そうにも出来ない。ひょろ長い茎の先には、新しい実はならず、茎は萎れて、光りは失われた。女は、しゃがみ込んで、光る点のあった辺りの土を撫で回した。するとどうやら、耳の奥で鳴っているとばかり思えていた水音は、正方形の地面の先から、聞こえて来るようだった。女は、フラフラと立ち上がり、正方形の左側を、水に流されるように、よろめきながら奥に進んだ。しかし、正方形は直に終わる。そこで地面は断ち切られていて、その先には何もない。それなのに、足は止まらない。いっそ倒れ込みたいが、体は倒れてくれない。耳に詰め込んだ光りのせいか。それが、体を押し流してゆくのだ。首を激しく振った。それで、光りが、少しは耳から飛び出たかは分からないが、体は、断ち切られている地面の縁で、ギリギリ止まっていた。

　その先を覗き込むと、切り立つ断崖の真下に、白く泡立つ幅の広い急な流れが見下ろされた。流れに沿って道が通っていたが、対岸だった。この辺りに川は一本だけなら、その道は、探していた道だろう。しかし、遥か下の激流を、どうやって渡れるだろう。

「八つしかない。一つ足らないけど、知らないか。」と、直ぐ後ろで、野太い男の声がした。

「知らない。」
振り返ると、男が、半透明の太い筒を抱えていて、中に、光る点が幾つか入っている。正方形の地面から、光る点は、全て消えていた。そこに光る点が並んでいなければ、正方形の地面の中に何があるか分からない。つまり、男の脇を巧く擦り抜けたとしても、ヤツの仲間が、黒い土に紛れて、何十人も潜んでいないとも限らない。女は、観念して飛び降りる事にした。男が、「知らない筈ないだろう。」と言って、腕を伸ばしてきたが、もう届かなかった。

宙に舞った筈の体が、直ぐに止まった。女の体は、正方形の地面の直ぐ下だった。これこそ、耳に詰めた光のせいに違いない。磁力でも働いているように、光りは地面に惹き付けられるのだろう。見上げると、覗き込む男の顔が、直ぐそこに見えた。

「それみろ、さっさと上がってこい。」と、男は怒鳴り、それから、嘘つきだの泥棒だのと、女の悪口を、延延捲し立てた。女は、身動きが取れず、ただ眠くなるだけだった。

川を挟んだ道に、それを見上げる野次馬が集まってきた。私は、その中に居た。女の体は、大の字になって、崖の一番上の縁に張り付いたままで、その上で男が怒鳴れば怒鳴る程、光りが女の体内を巡るらしく、女の体は、星そっくりに輝いた。しかし、そこから進展がないので、野次馬はぽつぽつと減って、

とうとう私独りになった。そこで、私も道に迷っていたと気付いた。野次馬の誰かに道を尋ねるべきだったが、崖の上に気を取られていた。

激流は、下りの直ぐ先で急カーブを描いて、道は、そこで終わっていた。それなら、上って行くしかない。私は、川に沿った急な坂道を登った。道は度々二股に分かれたが、その都度、川沿いを選んだ。遡るに連れ、流れは、細く緩やかになり、草陰にすっかり隠れてしまった。そこからは道もなかったが、草の下に水音は聞き取れたので、迷う事はなかった。草が分かれ、また水の姿が目に入ると、その直ぐ先が、正方形の地面だった。

私は、ひどく疲れてもいたので、取り敢えず、目指す所に辿り着けた気分になって、その真ん中に倒れ込んだ。耳を地面に当てると、奥の方で、水が激しく唸っているのが聞き取れた。それがずっと途切れなければ、何時かここは、本当に私の目指した所になってくれるだろうか。いや、水の唸りは悪い兆しだと直ぐに思い直し、仰向けになって、空を見上げた。道に迷ってしまったら、星を読むしかない。しかし、星は出ていなかった。それから、どれ程長い事、闇を見上げたままだったか。遂に光るものを見付け、追って行くと、それは、正方形の地面の真ん中で、光る点になっている私だった。周りが真っ暗なら、星にも見えそうだが、自らを、星として眺めていられる筈もない。私はまた、地面の奥に耳を澄ました。どうやら、そこに溜め込まれた水は、ただ唸ってい

るだけではなさそうだ。水はそこから、八方に均等に流れ出て行くようだった。それが激しく唸るのは、八つに分かれようとするからではないか。川は、八本もあったのだ。道に迷う訳だ。私も、星の形そっくりに八方に向けて輝いた。その八方に、同じように光る八つの点が、私を囲んでいた。私はそれらを、綺麗な正方形になるように並べ直したかった。

　年取った痩せた女が、もっと痩せた小さな女の子の手を引いて、迷い込んできた。二人共、ひどく疲れている様子で、私と同じように、直ぐにも、正方形の真ん中で倒れ込むだろう。私は直ぐに立ち上がって、光りから出た。振り返ると、八方に輝く筈の真ん中の光る点は、他と同じただ光るだけの点になっていた。私は、二人の目に留まらない内に、急いで周りの光る点を正方形に並べた。私の姿は、闇に紛れたままで、二人には気付かれていないようだ。

　九つの光る点は、三列に等間隔に並んで、正方形の地面の中には、その光る点の他には何もないのを、二人に見せた。それなら、私は、そこには居ないのだ。年取った女は、手前の左端の光る点に近付き、その上を、指でゆっくり丁寧に撫でた。種が芽を出すように、光る点は、少しずつ伸び上がり、女の指に導かれなくても、独りでに成長を続けた。ひょろ長い茎の先が震えて丸い実がなると、その光りの粒を摘んで、女は口に入れた。震える茎の先には、次の実はならず、それきり痩せ細って立ち枯れて、光りも失せた。それでも女は、少

しだけ元気を取り戻したようで、女の子に声を掛けた。女の子は、正方形の地面を歩き回って、残る八つの光る点を、そのまま口に入れて、飲み込んだ。それから、正方形の奥の縁で、何もないその先を見通して、キャッキャと笑った。年取った女は、その笑い声を黙って聞きながら、立ち枯れた茎の下を掘って、光る根を毟り取っては、口に入れていった。

　光る点を失って、正方形の地面の中には、また何があるか分からなくなった。それなら、私は、甦っただろうか。いや、正方形の真ん中で、腹を満たした二人が寄り添って横になると、正方形の中には、その二人の他に何もなかった。年取った女の寝息が、微かに光るせいに違いない。女の子の方は、体を小さく丸め、寝息を潜めていた。これから芽を吹いて、いずれは、水の流れに沿って八方に枝を伸ばす、大きな木にでもなる積もりだろうか。それより先に、年取った女の方は、もう地中深く根を下ろし、思う様、水を吸い上げているのかも知れない。（二〇〇二年五月七日）

*　*　*

鱗

　青魚の入った透き通った袋を提げて、濡れた岩肌が剥き出しの坂道を裸足で登っていた。足が冷たいので、坂の所々で燃えている小さな火を見付ける度に、それを踏んだ。それでも、火は少しも熱くなくて、足は冷える一方だった。火に見えるだけで、何か別のものかも知れない。その内に、坂は、上るのを已め、波打ちながらも緩やかに下るようだった。その下りで、火は水に見えた。波打って、また少し上りに掛かる所では、また火に見える。波の山や谷の平坦な所では、火と水が入り交じった。

　手ぶらなのに気付いた。袋を何処かに落として来た。尻のポケットを探ると、クチャクチャに丸められた透き通った袋が出て来た。拡げて匂いを嗅ぐと、魚の匂いがする。底に、焼け焦げたような穴が開いている。その穴を通して、坂の岩肌を見ると、その表面は微かに透き通っていて、その直ぐ下に、肌に血管が浮き出るように、淡い紫色の筋が、クネクネと何本も走っている。一度見えると、それは、袋の穴を通さなくても見えた。今まで気付かなかっただけか。

　しゃがみ込んで、手の届く中で一番太く浮き出た筋を、指で軽く押すと、そこだけ白っぽく脹れて、微かに銀色に輝くようだった。それが剥がれた鱗の形に見えたので、引き返して、魚を取り戻す事にした。立ち上がって歩き出すと、波打つ緩い上り坂は、ひどく暗かった。見上げると、濃い緑の葉をびっしり茂らせた木の枝で、何処までもずっと分厚く覆われていて、空は全く見えない。

しかし、急に暗くなったのは、そのせいではなく、しゃがみ込んでいる間に、目を傷めたからではないか。岩肌の中の、踏まれた薄紫の筋が、踏む足を銀色に縁取って輝いた。周りが暗い分、それを真面に見詰めたりすると、目が眩む。

暫く行くと、道は、上るのも下るのも波打つのも已めて、ただ、左に傾くばかりになった。濡れていて滑り易く、腰を落として右手を付きながらでなければ、進めない。傾斜はどんどん急になり、道幅も狭くなるばかりだ。いや、そこはもう道ではなく、森の中の岩肌を剥き出した斜面でしかない。ゴツゴツした木の根を避けながら、決して後ろを振り返らず、真っ直ぐ前に向かっている積もりで、進むしかなかった。

いきなり、高い崖が立ち塞がった。見上げても、同じように大きな木がびっしりと茂っていて、空は見えない。右か左か、どちらかに回り込むしかない。右は上りで、左は下りだ。どちらに行っても、足に負担が掛かる。暫く休もうと思うが、傾斜が急過ぎて、しゃがみ込めない。そのままじっと突っ立っていると、血の巡りが悪くなって、足を殆ど動かせなくなった。しゃがみ込んで、目を傷めたのも、血が、目に充分巡らなかったからに違いない。しゃがめば目が悪くなり、立ったままでは足を傷める。それなら、歩くしかないが、足は動かない。体を右に倒して、岩肌の傾きに身を預けるしかない。そうしてみたが、そのままでは、滑り落ちそうだ。ゆっくり俯せになり、腕と脚を拡げて、大の

字になった。寝ているより立っているのに近くて、こんな急勾配をよく歩いて来られたものだと、不思議に思えた。

　鼻が岩肌に擦り付けられて、微かに魚の匂いを嗅ぎ取った。それが目を刺激して、涙が、頬から岩へと伝った。その涙で濡れた岩肌に頬が触れると、岩肌は、頬を焼くように熱かった。熱くなるばかりか、岩肌は、そこで爛れだして、その直ぐ下の薄紫の筋が何本も剥き出しにされた。その筋の中も半分透けていて、銀色の鱗が一列になって流れて行くように見える。魚の匂いは愈愈きつく鼻を突いて、涙が止まらなかったので、直に、顔の横に、顔より大きな穴が開いた。

　体をずらして、その穴に顔を埋めた。頭がすっぽり穴に嵌り、無理に大の字になっていなくても、滑り落ちずに済みそうだ。涙は流れ続けて、首筋から胸の方へと溢れた。岩肌がそこでも爛れるようで、少しずつ柔らかくなって沈んで行く。上半身から、体全体が、岩の中に埋もれて行くのが分かる。もう大の字ではなく、気を付けの姿勢で、岩肌はヌルヌルしているのに、体は滑り落ちそうになかった。岩に浮き出た薄紫の筋が、体の中に入り込んで、血管のように張り巡らされてゆくせいかも知れない。それとも、それはもう、血管と繋がって、血と鱗は交ざり合っているだろうか。目を開けると、爛れた岩の奥が広々と見通せた。見通せるなら、そこに潜って行けそうで、揃えた両脚が自ずと

跳ねた。そうして、全身が振り立てられると、岩の奥深くまで張り巡らされた無数の木の根は、炎を立てずに燃える火のようだった。それが火に見えるせいか、体はひどく冷たく感じられる。頬だけは熱いままなので、体を拗らせて、何とかその熱を全身に行き渡らせようとすると、すんなりその通りになったが、そうなってしまっては、その生温かい体は、埋まり込んだ岩の穴から、滑り落ちて行くしかない。

そのまま、ゴツゴツした木の根に跳ね上げられたりしながらも、何とか岩の斜面をクネクネと滑り続けて、森を抜け出ると、切り立つ崖の真下だった。見上げると、崖は、隅々まで岩肌が剥き出しで、手入れでもされているように、艶々している。その上には青白い空が見え、崖の際の空の一番高い所には、微かに星の姿さえ見て取れた。目はすっかり良くなっている。しかし、立ち上がれない。揃えていた両脚が、また少し開いて、そこに根を下ろしてしまったようでもある。

切り立つ崖の表面が少し透き通ってきて、その奥を、何本もの薄紫の筋が、クネクネと上って行く。それに続いて、それらの筋をいっぱい絡ませた青白い二本の脚が、逆様になって昇って行くのが見えた。薄紫だった筋が、一斉に火のように輝いた。脚だけで済む筈がない。このままでは、全身が、崖の中に取り込まれてしまう。直ぐに両脚を切ってしまえば、まだ間に合うだろうか。し

かし、昇って行くのは、脚だけだった。もう切り離されていた。

脚をなくしては立てないが、その代わり、崖の下を動き回れるようになった。思ったより幅があるらしく、幾ら動いても、目の前は崖だった。何処まで崖が続くのか確かめようと、崖に沿ってただ真っ直ぐに進んでみた。少し先に空が低く開けてきて、その手前で断ち切られた崖の縁が、上から下まで輝いている。小さな火が、数え切れず噴き出しているようだ。近付くに連れ、下の方から噴き出す火は、水に見えて来た。ただ真下まで来ても、崖の一番高い所だけは、火のままだった。

そこを回り込むとまた崖だったが、回り込んで直ぐの崖の下は、ゴワゴワした赤い布で囲われていた。見張り役のような男が側に座っていたが、近付くと、立ち上がって赤い布を引き上げた。中を覗くと、地面に丸い穴が開いていて、その底に、腹の破れた青魚が、体のあちこちから血を滲ませてじっとしていた。崖の上から落ちてきて、ここに大きな穴を開けたに違いない。穴の内側に、剥がれた鱗がいっぱい張り付いていて、衝撃の強さを示していた。崖の縁から噴き出した水が、岩肌を伝って穴に流れ込み、穴の内側を艶々に磨いた。鱗は、一斉に浮き上がり、穴の周りをキラキラと縁取った。

その水に押し流されたのか、穴の中に居た。水の中なのに、魚の匂いがする。生きた魚の匂いだ。森の斜面で嗅いだ魚の匂いは、腐った魚の匂いだと、今更

気付かされた。穴の中を探したが、青魚は何処にもいない。体はすっぽり穴に嵌り込んでいて、冷たい火に包まれているようだった。水は愈愈激しく流れ込んできたが、それを全て弾いて、穴の内側に、体がぴったりくっついてビクともしないのは、その火のせいに違いない。それとも、穴を縁取る鱗が、火に見えるだけか。穴の中から見上げても、崖の一番上からだけは、小さくても、確かに火が噴き出すままだった。その火に向かって、真っ直ぐ昇ってゆく事ばかりを考えた。火と水を交わらせる術を、覚えなければならないだろうか。（二〇〇二年五月九日）

*　　　*　　　*

ダンス

背の高い草で覆われた庭の真ん中の、円い小さな池には、まだ厚い氷が張っている。それを、がらんとした板張りの大きな部屋の窓に寄り添って、眺めていた。その部屋で、私は、仲間と一緒にずっとダンスの練習をしていたが、他の者達は皆、食事に行ってしまった。カタカタと窓が音を立てて、外は風があるようだったが、草は殆ど揺れなかった。その庭の草を掻き分けて、男と女が、

互いの腰に腕を回して池に近付いて行く。ダンスの仲間と言っても、その二人の男女だけだ。青い顔をしていて、食事を済ませたようには見えなかった。

　二人は、池の真ん中に置かれた四角い箱の上に、背中合わせに腰を下ろした。二人で腰掛けるには、箱は小さすぎて、窮屈そうだ。私は、その箱について色々知っている事を思い出して、それを二人に伝えようと窓を開けたが、冷たい風が真面に吹き付けてきて、殆ど口も開けられなかった。直ぐに窓を閉めたが、私の言った事は、案外伝わったのかも知れない。二人は、自らの股の間を覗き込むようにして、箱に備え付けの、それぞれの側の小さな抽斗を開けた。昨日の内に、私は、部屋にあった邪魔なものを全て、その箱の、幾つもある抽斗に仕舞い込んでおいたのだ。

　二人共、中から一本ずつ剃刀を取り出した。どちらも錆び掛けていたが、それに唾を付けて指で撫でたり、仕舞いにはそれを舌で舐めたりして、錆を落とし、どちらの剃刀も、青い艶を取り戻した。その代わり、氷の上は、二人が吐いた錆を含んだ唾で汚れた。それから二人は立ち上がり、箱を挟んで向き合った。それで初めて、互いに剃刀を手にしている事に気付いたようで、その刃の艶を見せ合った。しかし、それだけではもの足らないのか、女は、男の腿に切り付けた。男は、お返しに、女の二の腕に切り付けた。どちらの剃刀も素晴らしい切れ味で、傷口は見事に開いて、二人の肉を見せた。

私だけが、練習の途中では食事を取らない主義で、腹も空いてきた。食事が済んだのなら、早く戻って欲しい。私が窓硝子を叩くと、二人は、傷口を押さえながら、慌てて池から出て、腰を屈めて、草の中に姿を隠した。私は、待ち時間がないので、手紙を書こうと思ったが、筆記具は全て、箱の抽斗の中だ。仕方がないので、頭の中で文面を整えていった。そして、部屋に戻った二人の顔を見た瞬間、その手紙の文句が、スラスラと口を衝いて出た。男が慌てて紙を出し、女が慌ててペンを出して、私の言葉を書き付けた。そうして直に手紙は書き上がったが、私は、二人に、どうして紙とペンのような余計なものを部屋に持ち込むのか、問い詰めた。男は少しドギマギした様子で、女からペンを奪って、手紙を出してくると言って、独りで出て行った。私は、男が戻るまでの間、女と二人で、男も加わっている事にして、ダンスの練習を始めた。

女はまだ、手に剃刀を持っていて、それを私に向かって振り回して来るが、その動きはどれも予め見当が付いていて、当たり前のように身を躱せた。女は、それに苛立つように、険しい目付きになって、こめかみに汗を垂らした。男が戻った時には、すっかり息も上がって、ふらついていた。

三人で練習を始めると、女の顔はすっかり穏やかになった。男も剃刀を持ったままで、それをビュンビュン振り回してくる。私は、容易く避けられたが、女は、それを殆ど体で受けた。男の方も、女の振り回す剃刀を受けて、二人だ

けが、みるみる全身傷だらけの血塗れになって行く。それでも、二人共、穏やかな顔付きのままだ。ダンスの練習には何の支障もないのだが、まるで二人は、互いを傷付け合うために練習をしているようではないか。私は、馬鹿馬鹿しくなって、二人から離れた。二人は、私抜きでも、私も一緒であるかのように、練習を続けた。窓から庭を見ると、背の高い草が、池に向かって掻き分けられている。私は、部屋を出て、急いで池に向かった。

池の真ん中の箱を、四人の男が取り囲んでいる。四人は、私を見ると、それぞれ名乗った。どれも知っている名前だ。それもその筈で、私が手紙で四人を池に呼び付けたのだった。私は、四人にその名前を呼び掛けながら握手し、挨拶代わりの短い会話を交わした。それから、足元の、さっき仲間の二人が吐いていった錆混じりの唾を指差し、汚れているのを詫びて、直ぐに綺麗にするからと言って、四つん這いになって、彼らの周りを巡りながら、その唾を袖に擦り付けていった。

四人の内の一人が喋り出し、他の三人は、それを黙って聞いているようだった。私の耳にも届いたが、初めて聞く言葉で、意味は全く分からない。二人目が喋り出すと、残りの二人も直ぐに喋り出した。四人は、全く別の言葉を喋っていて、互いに意味が通じず、険しい顔付きになっていった。汚れを全て拭き取って立ち上がり、彼らの会話に入ろうとすると、四人はいきなり、私の知っ

ている同じ言葉を喋り出した。四人は、どうやって私を除け者にするか、話し合っていた。それを直ぐ横で私が聞いているのに、誰も何とも思わないようだ。

私も何時の間にか、釣られて話しに加わっていた。

　私の提案が通って、私は、箱の上に乗せられた。箱の下の氷が割れ、私だけが、池に落ちた。箱は水に浮いたので、私はそれにしがみついた。四人の言葉が、またバラバラになった。通じないので、仕舞いには、苛立って互いの胸ぐらを掴んで、罵り合いを始めた。水が入って、箱が水に沈み、箱だけが頼りの私も、すっかり水に沈んだ。水の中でも箱を掴んでいようと思うが、箱の表面は、水の中で、ひどくツルツルになって掴み難い。私は、抽斗の取っ手に手を掛けては、次々に、抽斗を箱から引き抜いて行くしかなかった。抽斗はそのまま水底に沈んだが、中のものは、上にも下にも行かず、水中を踊り回るようにして漂った。一つ一つに目を凝らすと、どれも剃刀に見える。私は、それらを、手を少しも傷付けずに、指で掴めた。そして、腰のベルトの内側に順々に差し込んでいったが、それで腹の肉が傷付けられる事もなかった。そうして、その剃刀の浮力でか、私の体は、自ずと、ゆっくり浮き上がっていった。氷の上に上がると、四人の姿はなく、私が女に書き取らせ男が出しに行った手紙が、濡れてクシャクシャになって、氷の上に落ちていた。四枚あって、それぞれ違う文字で書かれていたが、どの文字も、私には読めなかった。私は、それらを持

って、部屋に戻った。風は、乾いて温かく、体は直ぐに乾いた。

　四人は、部屋に居た。窓側の壁に、窓に背を向けて、四人並んでしゃがみ込んでいた。四人とも、向かい側の壁の上の方をじっと睨んだまま、それぞれの言葉を、大きな声でがなり立てている。まるで、少しでも大きな声で沢山喋った者の勝ちであるかのようだ。自分の言い分を、隣に分からせようとする素振りもない。ダンス仲間の二人は、部屋の暗い方の隅に片付けられていた。全身を覆う血糊は黒く変色し、抱き合ったまま蹲って、動かなかった。私が部屋の真ん中に立つと、四人は、私の方にいざって来て、私を取り囲んだ。私は、四人に、クシャクシャの手紙を、改めて渡した。どの顔にどの紙を渡せば良いかは、クシャクシャのままでも直ぐに分かった。その文面を覗き込んで、やっと四人は黙った。それから彼らは、互いに目を合わせて同じ言葉で穏やかに話し合い、私に練習の成果を見せて欲しいと、口を揃えた。

　私は、出来たら、仲間の二人の姿をも、四人の目にありありと浮かばせてやろうと、全く三人一緒であるように踊った。四人の目に、その二人の姿が見えているかは分からないが、四人は、手を叩いて、私の踊りを喜んだ。嬉しそうにする四人の顔の中に皺が寄って、どの顔もそっくり同じに見えた。手を叩く度に、白い二の腕の脂肪がプルプル震えた。四人共、丸々とした体型で、女に違いなかった。私は、踊りながら、何時、女に入れ替わったのか尋ねた。四人の

顔が少しだけ曇って、四人は違う顔になった。それから、一斉に床に水を吐き始めた。四人は、みるみる痩せ細って、またゴツゴツした男の体に戻った。そして、嬉しそうに顔中に皺を寄せると、また同じ顔になった。しかし、そんな風に四人の姿が色々に変わって見えてしまうのは、ただ、私が踊り続けているせいかも知れない。

　私は、足を止めて、部屋の隅を見た。二人の姿が見えなかった。窓越しに庭を見遣ると、二人は、池で、私など初めから一切加わっていない、二人だけの踊りを踊っていた。池中の氷は割れていて、二人は、その上を巧みに渡って、池の中に落ちる事はない。まだ手には剃刀が握られていて、互いに斬り付け合っているようだが、氷から跳ね上がる水飛沫が洗い流してしまうのか、二人の体に、血の色は少しも見えなかった。私は、四人をもっと喜ばせようと思って、腰に差した剃刀を引き抜いては、自らの腕や脚や胸を切って見せた。切っても切っても、踊りで引き締まる筋肉が傷口を塞いでしまうのか、なかなか血は噴いて来ない。四人は、急につまらなそうな顔をして、手を叩くのも已めた。顔中の皺も消えたが、それでも私には、四人が同じ顔に見えた。そして、直ぐにその顔は皆、窓の方に逸らされた。四人は、窓を跨ぎ越え、庭に出て、草を薙ぎ倒して池を囲み、そこにしゃがみ込んで、男と女の踊りを、体を揺らして楽しんだ。彼らの盛んな合いの手が届いて、がらんとした板張りの部屋に響き渡

った。私は、見付からないのを承知で、紙とペンを探し回るしかなかった。（二〇〇二年五月十一日）

＊　　＊　　＊

袋

　聳り立つ大木が道を塞いでいる。幹が道幅より太くて、先は見えない。両脇は、藪が生い茂って踏み込めない。それなら、この大木の幹を道の続きに見立てて、登って行くしかない。藪を見下ろせる所まで登って、幹を回り込んで先を見ようとすると、いきなり突風が吹き付けてきた。それでも何とか、身を乗り出して見ると、先には何もない。大木は、真上に向けて架けられた橋のようなもので、橋を渡ればその先に道が続くように、大木を登り切った所から、また道が続くに違いない。
　実際、見掛けに寄らず登り易い。子供の頃も木登りなど殆どしなかった腕力のない私でも、易易と登れる。恐らく、道が舗装されるように、木の幹にも、何か人の手が入っているのだ。それとも、沢山の人達が登って、自ずと登り易くなったのか。

　幹は、一本だけ真っ直ぐ上に伸びるのではなく、途中、何本にも分かれた。その度に、私は、より傾きの少ない、真上に向かう方を選んだが、少し登ると、選ばなかった方の幹も、結局は隣で、真上に向かって伸びている。しかも、どの幹も、根元と比べて殆ど細くなる事がなく、登れば登る程、同じ太さの何本もの木々に取り囲まれて行き、林の中に居るようになった。枝葉は殆ど見えて来ないが、無数の枝葉が風に激しく揺れる音は、直ぐ側から、絶えず聞こえて来る。恐らく風を受ける側だけに、枝葉はびっしり繋っていて、それが、目にも留まらない速さで、風に揺さぶられているのだ。おかげで、私の居る所までは、風は全く届かず、うるさい音を我慢するだけで済む。

　暫くすると、直ぐ上に、円い大きな木の板が見上げられた。それは、私の登っている幹の横に、少しだけ傾いて据えられていた。見渡しても、そんな板は他に見当たらない。それなら私は、道を誤らないで、分かれる度に常に正しい幹を選んで、ここまで来られたのだ。見上げた裏側は木目が見えたが、表側は、ペンキで真っ白に塗られていた。休憩所に違いない。足を踏み入れると、私の重さで、板はひどく傾いた。私は、慌てて、その傾斜を、円い縁に沿って駆け上った。その白い円盤は、傾いたまま、独楽のように回り出した。私は、足を止められなくなった。止めたら、弾き飛ばされるのは分かり切っている。足は、どんどん速くなる。そこで私はやっと、重い袋を背負っているのに気付いた。

取り敢えず、少しでも身軽になるべきだ。背中から外した袋を、幹の方に投げた。円盤を駆け回りながらなので、それは、全く違う方に飛んでいって見失われた。

足を止めるまでは行かないが、それでも大分楽になり、普通に歩く位の速さでよくなった。そうしながらも、自ずと円盤の内側に傾いてしまう体は、段々と、その円盤の内の方へと引き寄せられて行く。円盤の真ん中には円い穴が開いていて、そこに近付く程、円盤の回る速さも収まり、穴を覗き込めるまでになると、円盤は回るのを已めた。

穴の奥に、枝葉がびっしり茂っているのが見えた。風に吹き付けられている様子は少しもない。その薄暗い中に、さっき私の抛った袋が、枝にぶら下がっている。穴の上から腕を差し延べても、届きそうにない。穴は狭くて、そこを抜けて降りては行けない。私は、見なかった事にして、真っ直ぐに幹の方に戻ろうとした。円盤が回り出し、幹の方へは横を向いて、また円盤の上を駆け回るしかない。幾ら幹の方に体を傾けても、穴の方に押し戻されてしまう。私は、諦めて穴まで戻り、荒い息を整えながら、四つん這いになって、そこをまた覗き込むしかなかった。

袋から、小さな人の頭が出ていた。それなら、私はずっと、子供を背負って来たのか。何も出来ず、ただそれを見下ろすばかりの内に、私の半開きの口か

ら長い涎が垂れて、子供の直ぐ側まで切れないで延びた。子供が手を出せば、届きそうだ。その涎を伝って、こちらへ上って来られるのではないか。私は、声を掛けた。子供は気付いて私を見上げたが、口を動かしたせいで、肝腎の涎が切れてしまった。涎は、垂らそうと思ったら、もう垂らせない。声を掛けたものの、私達は、黙って見詰め合うだけだった。その子供の半開きの口から涎が垂れだした。それは途切れないで、下へ延びた。その下の方に、一組の男女の蹲って震える姿が、小さく見える。子供の涎が届くと、それに飛び移って、スルスルと二人して登り始めた。

　その二人が上を向いて、私と目が合いそうになったので、私は、咄嗟に穴から目を背け、立ち上がって、また幹の方に駆け出した。今度は、円盤は回らなかった。私は、何歩か進んだだけで、直ぐに円盤の縁まで辿り着いた。しかし、何時の間に先回りしたのか、まだ穴のずっと下に居てもよさそうな男女二人が、私の幹に抱き付いていて、飛び移るには二人は邪魔だった。二人がまだ、私に気付いていないのが、せめてもの救いか。私は、身を伏せた。私の体は真っ白で、保護色のように円盤に溶け込んだ。二人は肩を寄せ合っていて、その二つの肩で、一つの袋を背負っていた。二人はそこから、上ろうとも下りようともしない。

　余りにも動かない。私の目を欺くための人形ではないか。私は、腹這いで、

円盤の白に溶けたまま、穴まで戻った。そっと覗き込むと、ずっと奥の遥か下の方に、折り重なって倒れ込んでいる男女二人の姿が見えた。それもまた動かないが、人形には見えない。子供の誕では、二人の重さは持ち堪えられなかったようだ。当たり前と言えば当たり前だ。袋と子供は、消えていた。

　私はまた、這って円盤の縁に引き返した。私の幹に抱き付いているのは、二人ではなく、一人だった。それは真っ白で、そっくり私の姿だった。背中には重そうな袋を背負っている。私は、先程にも増して、平らな円盤の中に身を埋め込むようにした。幹の私の姿の手足が動いた。そこをまた登って行こうとしていた。円盤の私は、袋の中に子供が居るかどうか、確かめたくなった。こちらの私が声を掛けても、そちらの私には聞こえないのではないか。なぜなら恐らくは、どちらかがどちらかの影なのだから。届くとすれば、声は、子供にだけ届く筈だ。私は、思い切って声を掛けた。袋から、子供が顔を出した。それは、子供の私の顔だった。

　円盤の私だけ、置いてきぼりを食う訳には行かない。このまま居たら、白い影になって、円盤の白の中に溶けて消えてしまうだろう。私は、身を跳ね上げて、幹を登る私の背中に躍り掛かった。私は、袋の中に潜り込む事が出来た。子供の私と、頬と頬をくっつけて、袋から顔を出すと、その私も、双子のように、子供の私だった。どちらかが男で、どちらかが女だが、どちらがどちらか

は分からない。三人一塊りの私は、幹を登っていった。背負われた二人の私が見下ろすと、白い円盤に、私の白い影が落ちて回っているのが、はっきりと見て取れた。

登るに連れ、幹の数は、少しずつ減って、間隔も空いてきた。そこを、冷たい風が静かに吹き抜けて行く。枝葉の音は届かない。そして遂に、幹は、登っている一本だけになり、それに風がグルグルと巻き付いてきて、幹に囓る付くのがやっとで、上へも下へも行けなくなった。いや、もう何処へ行く必要もなくい。見渡すとそこは、幹の一番高い所で、脇に白い円盤が据えられていた。

円盤に飛び移っても、傾いたりしなかった。ただ、飛び移ってみて分かったが、それは、先程のものよりずっと狭くて、少しでもよろければ、足を踏み外してしまいそうだ。逆に、真ん中に空いた穴は、先程より大きくて、そちらに足を踏み外せば、穴に落ちてしまうだろう。足を竦ませて、穴を覗き込むと、殆ど何も見えなくて、ただ風に揺さぶられる枝葉の音だけが、噴き上がって来る。それでもよく見ると、揺れる枝葉を掴んでは上ってくる、男女二人の姿が、見え隠れしている。二人をここに乗せる訳には行かない。乗せて乗せられない事はないかも知れないが、ここは、私のための場所ではないか。私は、背中の袋を降ろし、それを、穴の中の二人目掛けて投げ付けた。しかし、穴の中に落ちて行ったのは、袋を投げ込もうとして足を滑らせた私の方だった。残された

袋の中の私は、二人揃って、顔だけ出した。見上げると、崖の縁から、男と女が、こちらを覗き込んでいる。その二人の半開きの口から、涎が二筋、垂れてきた。袋の中の私と私は、腕を伸ばして、その涎を掴んだ。男の涎は女の私が掴み、女の涎は男の私が掴んだ。これでやっと、どちらがどちらか区別が付いた。二人は、袋に入ったまま、涎を伝って、崖の上まで登った。

男と女は、肩を寄せ合って、二人で一つの袋を背負い、そこから続く道を歩き出した。二人の背中の上で、袋の中の私は、一人になった。この先ずっと、自分の足で歩かなくても、先へ進んで行けそうだが、一人になった私が、どのような私か、確かめようがないのが気懸かりだ。（二〇〇二年五月十三日）

＊　　　＊　　　＊

左腕

細い木の枝を大雑把に編んだだけの塀に沿って、神社に向かっていた。その塀にだけ、陽が当たっている。道は凍っていて、何度か足を滑らせそうになった。私は、薄着だったので、出来る限り塀に身を寄せて歩いた。塀の至る所か

ら突き出た、折れた木の枝の尖った先が左腕を傷付けたが、腕の皮膚が裂ける度に、寒気を跳ね返せるようで苦にはならなかった。塀が終わると、ゴツゴツした石の柱が、二本立ち、柱の上半分には、陽が当たっているが、私には届かない。それを見上げながら、腹の底から迫り上がる冷たさに、身を震わせた。
　門であるには違いないが、それにしては柱と柱の間が狭い。一人なら通れるが、二人並んでは無理だ。中を覗くと、白っぽい狭い地面で、その先には、木一本生えていなくて、曇った空しか見えない。その奥の端で、女が一人、筵を敷いた上に、左の膝を立てて座っている。剥き出しの両足は、ひどく汚れているように見えた。その足の前には、萎れ掛けた草花が、寝かされて並べられていた。
　門を一歩入ると、門の直ぐ脇で、三、四人の子供が、砂遊びをしている。砂を高く盛り上げて、片側だけを円い形の急斜面にして、そこに掌を擦り付けて、せっせと磨き上げている。私は、近付いて、神社は何処へ行ってしまったのか、尋ねた。私の直ぐ足元にしゃがみ込んでいる子供が、振り向いて、眩しそうに私を見上げた。私の濃い影が、その子供の体の首筋までを包んでいた。脂の浮いた小さな額が、光りを集めたように、円い点になって輝いた。
　「飴くれたら教える。」と、子供は、高い声を上げた。
　「もう、誰か来たんだ。どんな飴？」と、私は、急き込むように言ったが、

その声に籠もる、硬く高い響きが耳に残って、久しぶりに自分の声を聞いたようだった。

「リンゴ飴。」と、子供は言って、醒めた目付きで、砂山に向き直った。

振り返って見上げると、厚い雲の奥で、灰色の陽の光が、大きな輪を拡げていた。その鈍い光りにしては、私の影は濃すぎないか。額だけが焼けるように熱くなって、私は、陽に掌を翳した。左手だった。手の甲から二の腕まで、横一文字の傷がズラリと並んでいて、血を流していた。その血を見詰める内に、額の熱が巡るのか、全身が微かに火照るようだった。高い陽に顔を向けたまま、手の甲に滴る血を吸うと、背筋がゾッとする程、冷たかった。手の甲も冷え切っていた。「リンゴ飴だよ、知ってる？」と言う子供の声に向き直ると、私の影の中に子供は居なくて、砂山の両側に一人ずつ居るだけだった。砂の円い形のツルツルの急斜面が、陽を受けて輝き、私は、眩しくて目を細めた。

その円い表面いっぱいに、綺麗な八角形の蜘蛛の巣を象った線が、浮かび上がった。その上に乗せられた子供の四枚の手の甲は、陰を帯びて、小さな蜘蛛が糸を伝って動き回っているようだ。私は、その前に跪いて、左手を差し出した。私の上半身の影が、蜘蛛の巣の中に差した。血で濡れた私の手の甲だけが、ギラギラと輝いて、四匹の小さな蜘蛛の陰の色を引き立たせた。私の手の甲は、全身に赤い横縞を引いた毒蜘蛛のようで、その周りをちょこまかと動き回る黒

蜘蛛に、今にも襲い掛かりそうではないか。
「神社を探してるんだよ。」と、私は、ゆっくりと低い声で言った。先程とは大分違うが、聞き慣れた私の声だった。その自分の声の響きを確かめるのに気を取られて、知らぬ間に、私は、子供の手首を一つ掴んでいた。
「他には？」と、私に手首を掴まれていない方が言った。
「四角い箱。薄っぺらな。これは、昨日から探してる。」そう言った途端、私の顔は、筵に座っている女の方に向いた。女の後ろに、その箱が隠されているように思えた。
女の方に行こうとする程、子供の手首を握る左手に、力が籠もってしまう。子供は、そこで踏ん張ったので、私は、一歩も動けなかった。私は、子供に、いっそ私の手首を噛み切ったらどうか、と言った。子供は、それを鼻で笑って、両脚で砂山を蹴り崩した。円い斜面もすっかり崩れた。それを見て、私は、子供の手首を離す事が出来た。自分達で蜘蛛の巣を台無しにしたくせに、二人の子供は、腕を砂の中に突っ込んで、途切れ途切れのか細い泣き声を上げた。私が、女の方に歩き出すと、それが笑い声だと分かった。
別の子供が一人、女の真ん前に膝を崩してしゃがみ込み、俯いている。萎れた草花を、じっと見入っているのだ。女は、その草花について、それらを指でそっと撫でながら、子供に向かって説明している。私は、黙って、女の後ろに

回り込もうとした。しかし、地面はそこでもう終わりだった。女は、地面の一番縁に居て、直ぐ後ろは、乾いた地肌を剥き出した下りの斜面で、急すぎて、とても降りて行けない。

「四角い箱を知りませんか。薄くて掌より少し大きい。」と、私は、横向きの女の姿に向かって、尋ねた。

女は、草花を撫でているのではなかった。筵の上に、左手を拡げて押し付けるようにして、その指の爪を、右手で磨いていた。器具を使う訳でもなく、ただ右手の人差し指の腹で、爪を順々に擦っているだけだ。それでも、五枚の爪は、艶々と磨き上げられていた。それればかりか、その爪の先から、真珠のように丸く輝くものが、ポロポロと零れ出て、女と差し向かいの子供が、それを一粒一粒拾い上げている。子供の膝の上に、四角いものが乗っていた。私の箱に違いない。

「こんな所にあったのか。幾ら探してもない訳だ。」

「何が？」と、子供か女のどちらか一人が、わざと声を震わせて、二人の声であるように言った。

私は、答えられなかった。その箱が何だか思い出せなかった。思い出すには、一度戻るしかない。私は、門に向かった。砂に手を突っ込んでいた子供が、走り寄ってきて、私の両側にぴったり付いて、手を繋いできた。門まで来たが、

三人横に並んだままなので、どうしても門の外には出られない。縦になろうとしても、二人の子供が、先を譲らない。諦めて、女の方を向き直ると、女は、私の方に走り寄ってきて、私に萎れた草花を差し出した。私は、簡単に子供の手を振り切って、それを受け取った。掌で揉み潰して、左腕に塗り込むと、傷口の血がすっかり止まった。その代わり、左腕は、痺れて全く動かせなくなった。女にそれを言おうとすると、唇まで痺れているのが分かった。

「女同士、仲良くしましょう。」と、女は言って、私の左手を取って、門の方に歩き出した。二人横に並んだままでは、やはり門を出られない。女を先に行かせる事も、私が先に行く事も、女は拒んだ。諦めて、向き直ると、女の前に居た子供が走り寄ってきて、赤と黒の薄っぺらな二つの箱をぴったり重ねて、私に差し出した。

「何？」と、私は、痺れた唇から涎を垂らしそうになりながら言った。

「さっき、見てたくせに。」と言って、子供は、私の顔を斜めに見上げた。女も、私の手を離し、子供に同意するように、私の顔を斜めに見た。

私は、その二つの箱を、右手で受け取った。半透明の薄い紙で出来ていて、掴んだだけで潰れ掛けた。その二つを、ずらしながら陽に翳すと、赤い紙の中に黒っぽい真珠が透けて見え、黒い紙の中に赤っぽい真珠が透けて見えた。私の探している箱でないのだけは、確かだ。

「見てたくせに。」と、子供は、今度は少し声を張った。私は、何を見ていたのか。女は、筵の上で、爪を磨いていたのではなく、真珠の汚れを指で取っては、二色の真珠を、選り分けていたのだ。それを子供が、紙の箱に入れていた。

私は、真珠が薬であるのを思い出した。これを飲めば、腕の痺れが治まるに違いない。右手しか使えないので、箱は、破れるより先に、クシャクシャの袋のようになって、やっと破れても、中の真珠がパラパラと地面に落ちるのをどうにも出来なかった。辛うじて、赤と黒と一粒ずつを口に入れる事が出来て、それを、顔を顰めて噛み砕いた。女は、眉を顰め、目が三角になった。私から二色の紙を奪って、ビリビリに破って足元に叩き付け、真珠諸共、踏み付けた。それから、独り早足で、門を出て、私が来たのと反対方向に歩き出した。裸足なのに、足音がコツコツと聞こえた。真珠が効いたらしく、左腕は動かせるようになった。女の後を追おうとすると、今度はしかし、左腕以外の全身が、真珠が効きすぎたその副作用なのか、痺れて動かなくなった。四つん這いになるのが、精一杯だった。

そのまま、私の体は、砂だらけの子供の手で両側から持ち上げられ、砂場まで持って行かれた。手伝えと言われたが、痺れた体で、何をしていいか分からない。見様見真似で、左腕一本で、砂を弄り回した。砂山とその円い急斜面が、

先程と同じように出来上がったが、陽が傾いたのに合わせて、西に向けられていた。その表面に、女が踏んで砕いた真珠を擦り付けると、蜘蛛の巣を象る線が、蜘蛛の糸そっくりの艶を出した。

　左腕の他は、私は、すっかりその砂山に埋まっていた。或いは、目だけは、蜘蛛の巣の中心から、外を覗き見ていたかも知れない。左腕は、蜘蛛の巣の上を這い回った。手の甲は、横縞の瘡蓋が盛り上がり、愈愈蜘蛛そっくりだ。その手で、円い斜面に磨きを掛ける子供の手を、追い回していたのだろうか。その子供達も、皆、家に帰ってしまったらしい。こんな所で、蜘蛛に成り切ってみたところで、寒空に虫が飛んで来るとも思えない。私は、左腕を蜘蛛の巣の端に引っ込めて、見付からないままの四角い箱の事ばかりを考えた。箱の中には、白い小さな皿が入っていなかっただろうか。その皿に二色の真珠を並べて、絵柄でも描いたりすれば、真珠が薬だなどという事は、恐らく思い出さなかった。左腕は、痺れたままかも知れないが、その手を皿に乗せて、皿を揺すれば、蜘蛛のようでも、指は自ずと動き出すように見えて、それだけで、満足出来たのではないか。（二〇〇二年五月十五日）

*　　*　　*

芝居

冷たい風で塀が倒れると、その奥の草ぼうぼうの空き地に、舞台が組まれている。私は、広い道を渡って、倒れた塀をミシミシと踏み越えて、その見慣れない舞台へ近付いて行った。塀を踏み越えるまでは、近付くに連れ、少しずつ大きく見えて来ていたが、塀を踏み越えてからは、近付いても、同じ大きさに見えるままだった。直ぐ側まで来てみると、ミニチュアのようにさえ見えてしまう。地面から、三十センチ位の高さしかない。私は、毎日芝居の稽古に励んできて、愈愈、舞台に上がるのだった。観客は、倒れた塀の上に集まってきている。

その三十センチまで、足が上がらない。舞台の端をコツコツと蹴るだけだ。それだけで、小さな舞台が、ミシミシと揺れた。無理に上がれば、舞台を踏み潰しそうだ。舞台に上がるには、それに合わせて、私が、幾らか小さくならなければならないだろうか。裏手に回って、入口を探した。薄っぺらな壁だけのようだが、必ず何処かに入り口があるに違いない。それを見付ければ、私の体は、自ずと小さくなれそうに思えた。

小雨が降ってきた。作業服を着た三人の男が、舞台の上の庇を見上げている。彼らの大きな声が、嫌でも耳に入る。つい今し方まで掛かって、彼らが、この

舞台を拵えたようだ。庇から雨が漏れたり、舞台に雨が掛からないためにどうしたらいいかを、話し合っているのかも知れない。彼らに入り口を教えて欲しかったが、邪魔してもいけないので、彼らが仕事を済ますのを待つ事にした。

　しかし、雨の心配など要らない事になったようで、彼らは、舞台の真ん前に、胡座を掻いて陣取った。雨は、本降りにはならなかったが、已みそうにもなかった。濡れたまま開演を待つ彼らに、舞台に上がれずにウロウロしている私の姿など、見せられる筈もない。彼らから見えないように、舞台の後ろに身を屈めた。

　すると、入り口が見付かった。壁の左右両脇に、小さな円い穴が開いている。両腕を伸ばし、そこに、両手を突っ込んだ。両手は、熱風を吹き付けられるように熱くなった。舞台の上で、熱い振りなど出来ない。しかし、何とか熱さを紛らすために、人差し指と中指を足に見立て、ちょこまかと動かして、何処かへ逃げて行く振りをした。私からは見えないが、男達や、その後ろの倒れた塀の上の者達には、舞台の私の両手が、見えている筈だ。私は、壁の縁から、そっと三人の男達の顔を覗き見た。空っぽの舞台を、ぼんやり眺めるだけのようだった。熱さを我慢しきれなくなって、素速く両手を引っ込めても、彼らの目には、その動きを追う気配もない。

　幾らミニチュアのようでも、そもそも、両腕を拡げた幅の中に、舞台が収ま

る方がおかしかったのだ。私は、舞台を諦めた。何時まで経っても始まらない舞台を待つのは、彼らの自由だ。その内に、彼らだけで何かを始めるだろう。私は、空き地の一番奥まで後退り、そこから縁をぐるりと回って、舞台など知らぬ風を装って、倒れた塀の方に戻っていった。

「前々から、根元が腐っていたんですかね、この塀は。」と、私は、塀の上に固まって立ち尽くしている連中に、声を掛けた。

「お陰で、助かったけどな。」と、ボサボサ頭の男が言った。広い道は、水浸しだった。確かに水の流れは速いが、膝までもなさそうだ。連中の着ているものが臭くて、一緒に居たくなかったので、私は、水に入っていった。道を渡り切るのは、何でもなかった。振り返ると、連中は皆、裸で、手分けして、倒れた塀を押し立てようとしていた。脱ぎ捨てた服は、襤褸切れ同然のようで、水に流れて行った。押し立てた塀は、私の見たところ、上下逆様だった。そして、連中は皆、塀の向こう側だった。連中の姿も、空き地も、もちろん舞台も、私からは、すっかり塀に隠された。そうしてただ、水の流れだけを見詰めていると、芝居の科白が、次々に口を衝いて出た。折角稽古したのに、それが全て、水に流されて行くようだった。いや、水はもう退いていて、道は濡れているだけだ。

　その道を、水の流れて行った方へと、色とりどりの服を着た何人もの男女が、

傘を差し、連れ立ってゾロゾロと歩いて行く。彼らの後を付いて行くと、道はみるみる狭くなって、両側に、同じような草の土手が迫り上がってきた。左の土手の上から、声が聞こえる。私は、土手を駆け上った。

　空き地が見下ろされるが、水が張っている。その真ん中に浮いた舞台に、役者が一人立っている。ボタボタと雫の滴る襤褸を幾重にも着重ねて、丸っこい姿で、舞台を動き回りながら、私の科白をスラスラと捲し立てている。倒れた塀に居た連中は、その直ぐ前で、腰まで水に浸かり、やはり固まって舞台を見上げていた。裸のままだった。その脱ぎ捨てた服が、役者の衣装になっているのは間違いない。舞台に上がるのに必要なのは、入り口ではなくて、連中の汚い服だったのか。

　湧き上がるような声に振り返ると、道を挟んだもう片方の土手の上で、男女が、私に背中を向けて、肩を揺らして笑っていた。そちらの土手の向こうで、何か面白い演し物をやっているのだ。一方、こちらの舞台は、私が筋を全て知っているからか、少しも面白くない。舞台を見上げる連中も、じっと動かない。私は、ヤジを飛ばした。裸の観客達が、一斉に私の方を向いて、水に潜った。水面は鏡のようで、その姿は直ぐに見失われた。私を掴まえに来るのだ。しかし、彼らの姿が見えなくては、どちらに逃げて良いか分からない。向こうの土手の男女の中に紛れ込むしかない。

私は、土手を駆け下り、直ぐまた、その先の土手を上った。見下ろすと、水の退いた空き地の端に、裸の連中が居た。彼らは、そこで、逆様のボロボロの塀を倒そうとしていた。それに手こずる姿が、可笑しいのだろうか。可笑しい積もりになって笑ってみたが、笑っているのは私だけで、男女の群れはもう土手を下り、また道を先に進んでいた。私は、慌てて後を追った。

道の両側に、襤褸が落ちている。それを初めに見付けるのは、何時も私で、その度に私は、甲高い声を張り上げて、それを指差した。先頭の者から順に、傘を捨て、襤褸を拾っては、それに着替えて行った。それまで着ていたものは、順に後ろへと手渡されて、一番後ろの私に投げ付けられた。私は、前が見えなくなる程、それを一枚残らず抱え込んだ。色々な香水のきつい匂いが混ざり合って鼻を付き、頭がクラクラする。

道の終わりは、また初めの空き地だったが、広い道とは反対の側に出た。空き地の真ん中には、舞台の裏手の壁も見えた。ただ先程より、草の丈が伸びたのか、襤褸に着替えた男女が、その草の中に歓声を上げながら走り込んで行くと、揺れる草の中に、彼らの姿がすっかり隠れたりした。私も、彼らの後を、舞台の方へ向かった。

近付く程、それは大きくなって、直ぐ側まで来てみると、壁は、空高く突き上がるようだった。左右両端に、やはり円い穴が開いていて、草を掻き分けた

者達が、次々にそこへ飛び込んでいった。彼らの服を抱えてフラフラしている私には、とても出来る業ではない。壁を回り込んで、彼らの舞台を見物する事にした。しかし、そこにはもう舞台はなくて、少しばかりの材木を運ぼうとする者達が、居るだけだった。彼らは皆、裸で、ずぶ濡れだった。広い道には、材木が積み上がっている。私は、最後の材木を担ぎ上げようとする者に近付いた。倒れた塀に立ち尽くしていたボサボサ頭に違いなかった。

「なかなか降り止みませんね。」と、私は、空を見上げて声を掛けた。

「芝居はどうだった？」

「そう言えば、あなたは主役でしたね。」と、私は、いい加減な事を言った。

「バカ言え。端役だ。」

　材木が全て運び去られると、空き地の真ん中に聳り立つ筈の壁が、随分、見窄らしく見えて来た。壁の前の草が、すっかり寝ているからかも知れない。材木の積み上げてあった跡が、圧し潰された草の上にくっきりと残っている。

「主役が居なきゃ、始まらんだろう。」と、男の声がした。

　振り返ると、作業服の三人が、胡座を掻いて陣取っている。私は、雨に濡れた、香水の匂いのする服を着重ねていったが、直に体が締め付けられて、身動きが取れなくなった。三人の男達が寄って来て、その着込んだ服を全て剥ぎ取り、それらをビリビリに裂いて、裂いたものをまた結んで繋げて、派手な舞台衣装

を拵えた。着てみると、ぴったりだった。

「これで動けるだろう。」と言う声に押されるように、私は、草の圧し潰されて平らになった所へと、身を躍らせた。寝ていた草が、一斉に起き上がった。襤褸を着た男女だった。草の中を走り回っていたせいで、襤褸全体に草が纏わり付いて、草に扮しているようだ。彼らは、歓声を上げ、私を何度か胴上げしてから、地面に叩き付けた。

　雨が已んで、見る間に切れた雲間から、いきなり強い陽が差し込んだ。私の衣装は、湯気が目に見える程の勢いで乾いた。そこから立ち昇る強烈な香水の匂いに、私は、のたうち回った。笑い声や奇声や、低く押し殺した声やら色々な声が、その私を取り囲むようだった。そこから私の聞き取れた限りでは、どうやら、私の衣装は、炎に包まれているらしかった。水に流した筈の全ての科白が、一斉に口を衝いて出た。或いはそれは、たった一言だったかも知れない。

　それを確かめる積もりで起き上がると、熱風が吹いて、壁が奥に向かって倒れた。壁の向こうは、まだ小雨が降っていて、草の葉は、皆下を向いて、根っこから腐ってゆくしかないようだ。壁をミシミシと踏み越えて、草に扮した者達が、そこへと走り込んで行く。しかし、何処へ逃げられるのか。襤褸を脱がない限り、腐った草の中へ紛れてゆくだけだ。私も、後は燃えるだけで、芝居は大体巧く行ったようだ。作業服の三人は、拍手でもしているだろうか。もう

科白など、どうでもいい。（二〇〇二年五月十七日）

*　　　*　　　*

煙のようなもの

　背中を少し丸くして円い入り口を跨ぐと、天井も両側の壁も扇のように奥に拡がって、中は、何処まで広いか分からなかった。鳥が興奮して一声叫ぶような音がして、後ろの入り口が塞がれると、足元が暗くなった。ずっと奥の高い所からだけ、柔らかい光りと硬い光りが、混じり合って降りて来る。私は、足元の暗さを蹴散らすように、先を急いだ。左の壁に目が行くと、脹れた二つの影が、傾いて揺れている。その内の、先を行く方は、恐らく私の影だ。足を止めて振り返ると、女が、私の直ぐ後を付いて来ていた。女も、立ち止まっている。私は、直ぐに前を向き直り、足を速めた。時折、左の壁に目を遣っては、後ろの影を引き離せたかどうか確かめた。その度に、少しだけ退いていた後ろの影が、私に見せ付けるように、前の影にグングンと近付いた。

　壁は、少しずつ離れて行く。影も益々脹らんで、煙のようにぼやけて、それが一つなのか二つなのかも分からなくなった。足を止めないまま振り返ったが、

女の姿は見えなかった。前を向き直った途端、ザラザラした壁に額を打ち当てた。額は跳ね返って、私は、仰向けに倒れ掛けた。直ぐ真上に、白っぽいのっぺりした太い枝が、真横に延びているのが見えて、それに手を掛けた。足が滑り、私の体はそこで、多分逆上がりでもするように、どのようにか回転して、気が付くと、枝の上に腹這いになっていた。

　見下ろすと、女の頭の天辺が、右に左にクルクルと回っている。見失った私を、探しているようだ。よく見ると、汗の滲んだやや黄味掛かった項に、小さな黒いものが、貼り付いている。気になって仕方ないので、私は、腕を伸ばして、出来れば女に気付かれないように、それをそっと抓み取ろうとした。指先が届きそうになって、女は壁の方に進んだので、伸ばした手は、宙を掻くだけだった。

　壁には小さな窓が一つだけあって、女が、その窓枠を掴んで、二、三度揺さぶると、窓枠は呆気なく外れた。女は、窓枠の置き場に困っているようだった。私は、まだ垂らしたままの片腕の手首を曲げて、鉤のような形にした。そうしておけば、女がもし後ろを振り返った時、そこに引っ掛けようと思うかも知れない。しかし、女は、壁の方を向いたまま、窓枠に嵌った擦り硝子に、木炭の欠片のようなもので、小さな字を書きだした。そうして、擦り硝子が、端から黒くなって行くに連れ、女の首の後ろで揺れている私の腕は、干涸らびて縮ん

で行くようではないか。

　腕を引っ込めようと思ったが、腕は、ジャラジャラと鎖のような音を立てて撓るだけだった。擦り硝子を文字で埋め尽くすと、女は、それを高く掲げて、一つ息を吹き掛けた。擦り硝子の筈が、透き通っているように見える。女が、その文字を声に出して読み始めると、鳥が二羽、舞い降りてきて、窓枠を掴んで羽ばたいた。女の体が、草を敷き詰めた地面から浮いて、その振り上げられた両脚が、窓の中に差し込まれた。それに続いて、撓らせた上体も、窓の中に滑り込んだ。窓枠は、キーンと高い音を響かせて、窓にぴったり嵌り込んだ。鳥の姿は消えていたが、何処か高い所で、幾つか鳥の鳴き声が、ザワザワと湧いて出るように、聞こえてはいた。鳥かどうかは分からない。

　見えるのは傾いた白い床だけだったが、枝の上からでも、窓の中を斜めに覗き見る事は出来た。しかし、それは、擦り硝子が透き通ったからではなくて、擦り硝子の上に書かれた文字が、透き通っているからだった。女は、小さなナイフを持って、その白い床の上に腹這いになっていた。そうして、床に敷き詰められた白いタイルの一枚を剥がした。その下から、文字が一つ浮き出た。擦り硝子の、右の一番上の端に書かれた文字と同じだった。そして、その豆粒大の一文字が、擦り硝子から、鳥の羽の欠片のように、ハラリと剥がれた。私は、鎖のような音を喧しく立てて、腕を振り回し、地面に向けて風を起こした。文

字は、舞い上がって、私の方にやって来た。私は、それを、虫を捕る蜥蜴のように、舌を伸ばして口に取り込んだ。

　文字は、右端から順に、擦り硝子を次々に剥がれ、ほぼ同じ軌道を描いて、私の口を目掛けて昇って来た。文字が全て剥がれると、擦り硝子を通して、窓の中を覗く事が出来なくなった。辺り一面が、少し赤味を帯びて、枝がヌルヌルとし出して、幾ら枝を抱き締めても、私の体は、またどのようにか回転して、枝から地面に落ちた。そこでもまた、ジャラジャラと鎖のような音が喧しかった。見上げると、窓の庇の上に二羽の鳥が留まって、何処か遠い先を見上げている。私は、言葉が通じるような気がして、舌を丸めて、喉を震わせた。口の中から、胃液に塗れた黒い文字が、一列に吐き出された。私は、腹這いのまま、少しずつ後退って、敷き詰められた草の上に、その一列のままに文字を並べていった。

　キーンと高い音がして、窓枠が外れて落ちた。擦り硝子は割れて飛び散ったが、文字列には辛うじて降り掛からなかった。硝子の欠片の殆どは、草の隙間に入り込んだ。窓に女の上半身の姿があって、女が、腹まで垂れる長い髪をしていると、初めて分かった。それともそれは、今着けたばかりの鬘だろうか。女は、赤い三角の目で、私を見下ろした。いや、私ではなく、私の吐いた文字列を、じっと見詰めているようだ。女は、窓を飛び出て、硝子の欠片が潜んで

いる草の上に、裸足で立った。私は、咄嗟に、俯せの姿勢のまま跳ね上がった。弾みで、手が草を掃いて、文字列をバラバラにしてしまった。

　私が再び地面に転がる姿を見て、女は、甲高い笑い声を上げた。それから女は、両脚を激しく振り立てて、草も硝子の欠片も私の胃液でネバネバした黒い文字も、構わず蹴散らした。その内の、硝子か文字かは分からないが、目に飛び込んできて、私は、目を開けていられなくなった。その代わり、やっと真っ直ぐ立ち上がる事が出来た。

　「占いが得意だって、言ってましたよね。」と、女の声が聞こえた。私は、頷くしかなかった。その私をバカにしたような鳥の鳴き声が、立て続けにした。私は、その場で、両腕をいっぱいに伸ばして、太いヌルヌルした枝を掴み、足を浮かせた。痛みを堪えて、目を見開いた。枝は撓って、斜めに降りてきた。ザワザワと無数の鳥の鳴き声が、間近から湧き上がり、地面の草を震わせる程だった。枝にぶら下がったままその草を蹴ると、黒い文字の幾つかが跳ね上がって、女の白い腹の上に飛び乗った。女は、自分の腹を覗き込んで、その文字を読んだ。

　庇の上の鳥が、羽根を畳んだまま、鎖のような音を立てて地面に落ちた。女は、それを、両手に一羽ずつ拾い上げた。もうすっかり冷たくなっているように見えた。私は、痛みに我慢出来なくなって、また目を閉じた。鳥の羽が毟ら

れる音だけが、途切れる事なく聞こえた。

「占いによって、烏は、食われてしまう。」と、女の声が聞こえたような気がした。私は、烏の事など占った覚えはないので、それは間違った解釈だと言おうとして口を開くと、烏の生肉らしき臭くて冷たいものが、口の中いっぱいに押し込まれて来て、口を利くどころではなくなった。目から熱い涙が溢れて、私は、ゆるゆると目を開けた。涙でぼやけた先には、赤味を帯びた壁と、その中の、窓枠がぶち破られて、ただの四角い穴になった窓しか見えなかった。私は、口の中の冷たいものを、石を呑むように呑み込んで、枝を掴んでいる手を離した。枝が、反動で跳ね上がると、壁の上の方が、弾けるような音を立てて、壊れて崩れた。私は、窓を潜って、中に入った。

　床のタイルは全て剥がされていて、そこに縦横に、女の掌くらいの大きさの文字が並んでいた。私は、女の腹の上に飛び乗った文字を憶えていて、それと同じ文字の上にだけ、唾を吐いていった。それは全部で七文字で、声に出しては読めなかったが、その文字の形から、その七つを繋げた意味が、少しは分かる気がした。しかし、何となく腑に落ちない。何かが欠けている。私は、女の項に貼り付いていた黒いものを、思い出した。あれも文字ではないか。文字でないなら、文字の一部ではないか。女の項に貼り付いたものは、後ろにも目がない限り、女には読めない。それならそれは、私が読まなければならなかった

のだ。女が、窓から入って来た。腹には、文字はそのまま残っていた。

「何処に行っていたんですか？」と、私は尋ねた。

女は、無表情で、握っていた拳を、私の方に開いて見せた。両掌から、黒い煙のようなものが上がった。壁の上の方の崩れた所から、白っぽい光りが差していて、左右二つの煙がその光りに晒されると、反対側の壁に、大きな二つの影を映した。二つの影は、何か指示でも待つように、じっと動かずに並んだ。

「烏の残りを焼いてきたんですね。」と、私が言うと、女はまた、甲高い声で笑い、私に背を向けて髪を掻き上げた。項の文字が読み取れた。発音が分からないので、私は女に近付いて、そのままの形を、女の背中に指でなぞった。女は、軽く頷いたようだった。やっと、正しい占いの結果が知れたのだ。女か私のどちらかが、もう片方に食われてしまうしかなさそうだ。もう、影の一つは、鎖のような音を立てて、隣の影を食い始めていた。（二〇〇二年五月十九日）

＊　＊　＊

線路

　机の上の片方しかない小さな靴を取り上げると、重くて冷たかった。中を覗こうにも、すっかり塞がっていた。両手の爪と爪を向き合わせて、指を突っ込んで、左右に裂くようにすると、指先は、血を押し出して、真っ白になった。白いのは指先だけでなくて、靴の方がもっと白かった。それは、靴ではなくて、靴の形をした石に違いなかった。

　そう思うとそれは益々重くなって、私の左の肘に痛みを走らせた。私は、それをまた机の上に置こうとするが、私の腕ごと、それを机の上に放り投げるようにするしかなかった。それでもそれは、机の縁まで届かずに、その手前で、床に向かって放物線を描いた。その途中の何処かで、それは私の手を離れたので、私は、そこに倒れ込むのだけは免れたが、つんのめって、机の右の隅に、左のこめかみをぶつけた。

　机の角は、木でも鉄でもなさそうで、フワフワと柔らかかった。私は、両腕を拡げ、机の左の角と奥の右の角を掴んで体を支え、机にしがみつくようにして、こめかみを、その柔らかい上に押し付けるままにした。そこから部屋の右半分を見て取ると、壁はあっても、柱が見当たらない。柱の立っているべき所は、ただ隙間だけで、その下には、真四角の暗い穴が開いている。

　頭を辛うじて浮かせて、素速く首を左に捻った。直ぐ前は壁だった。机の広さは、新聞の一面くらいで、それが壁際に寄せられている。机の直ぐ先の壁に、

小さな円い窓が一つだけあり、そこに嵌められた硝子は、レンズのように脹らんで、その外の景色を広い角度に収めている。私は、右のこめかみを机に擦り付けて、その窓の方へと頭を近付けていった。

　その行き着いた机の縁から窓を覗くと、外は、所々に枯れた草も生えているが、殆ど乾いた砂の地面が続いて、少し先に、線路が一本、敷かれている。それは、左から来て、窓からの景色のちょうど真ん中辺りで途切れていて、駅舎もプラットホームもなかったが、それでも列車を待っているのか、数人の人影が、その線路の端にたむろしていた。その右の少し離れた所に、細く長い柱が四本、地面に直に立てられている。或いは、彼らは、やって来た列車に乗って何処かに出掛けようとしているのではなく、列車で運ばれてくる資材を待っているのかも知れない。その資材で、四方に立てた柱を基に、建物を建てようとしているのではないか。その柱に囲まれた中で、何か小さなものが、ゴソゴソと動いている。

　それが何なのか見て取るには、もっと窓に近付かなければならない。私は、机の上にのし掛かって、頭を机の縁より前に突き出したが、その頭だけが、重い石のように、床に真っ逆様に落ちてゆくようだった。体も、直ぐ後に付いて来たが、重い頭に比べれば、皺くちゃの紙のように感じられた。天地のひっくり返った窓の景色の中で、小さな動くものが、蛙のように跳ねた。机の脚が一

本折れたのか、机は斜めに傾いている。倒れている私に一番近い側の角の先が、床に突き刺さっていた。

　床の真ん中の辺りにも、レンズのように脹らんだ硝子を嵌めた窓を見付けた。私は、左のこめかみを床に擦り付けながら、紙のような体で、頭を後押ししてその床の窓に近付き、その硝子の縁に頭を斜めに押し上げて、中を覗いた。空洞がずっと奥深く拡がって、ひょっとしてこちらより明るいかも知れなかった。その底にも、線路が敷かれていて、そこを縦に真っ直ぐ貫いていた。その縦一本の上から下に向かって、列車が走り過ぎて行く。窓からは、さっきの数人が頭を突き出して、それを見下ろしている私の方に顔を上げて、髪を靡かせていた。私は、床に腹這いになっている私の体の中に、その列車が、そのまま走り込んで来るような気がした。そしてそれは、行き場をなくして、線路など通っている筈のない私の腹の中を、クネクネとデタラメに走り回っているようではないか。擽ったくなって、腰を交互に浮かせたりした。

　床の窓から手を突っ込んで、列車の最後尾を掴まえて、腹の中から引っ張り出すしかない。皺くちゃの紙のような拳で窓硝子を叩いても埒が明かないので、窓硝子に軽く頭突きを喰らわした。硝子は粉々に砕け、また頭から落ちそうになったが、ギリギリ持ち堪えて、そこから、縦一本の線路の下の方に、片腕を差し込んでいった。列車はもう、遠くへ走り過ぎて行ってしまったようだった

が、何か柔らかいものを掴んだ。恐らくそれは、私のハラワタだろう。そんなものを引っ張り出しても仕方ない。手を離そうとすると、却ってそれは、纏わり付いて来る。

　腕を振った弾みで、重い頭が、窓の縁から滑り落ちた。窓の上からは、深くて広い空洞に見えていたが、そこに落ちてみると、私の頭がすっぽり嵌り込んで、それでもう、殆ど隙間はなかった。列車は模型だったのか。見上げると、皺くちゃの紙のような体が、逆さになって、順々に窓からノロノロと降りてきて、狭い穴の奥の方へと詰め込まれて行く。しかし、そうして全て穴の中に収まると、何処からか力が湧いてきて、筋骨隆々のガッシリした体付きをしているように思えるのだった。その体で、私は、床の直ぐ下に埋まって、仰向けに大の字になっていた。

　その床を踏む音が幾つか重なり合い、話し声も聞こえた。彼らは、部屋が荒らされた事に憤っているらしく、先ずは、机の脚を直したようだ。それから、一人が、硝子の割れた床の窓を覗き込んだので、私は、その者と顔を間近に突き合わせる事になった。しかし、その顔は無表情で、急に幾らか遠ざかるようだった。二人目三人目が覗き込むと、その度に、彼らの顔は、窓ごと遠ざかり、四人目の顔が覗いた時には、私は、地下の大きな空洞の底の線路の上に、大の字になって横たわっていた。

　その窓に、レンズ状の硝子が嵌められると、窓は、その上を広い角度に収めて、ずっと下からでも、そこに映った部屋の様子を覗き見る事が出来た。彼らは、それぞれ一本ずつ長い鉄の柱を運び込んでいた。そしてそれを、壁と壁の隙間の穴に差し込んだ。それを済ますと、一人が、机の下に白い靴を見付けた。四人が四人共、片方しか靴を履いていなくて、彼らは、その白い靴を奪い合った。

　私は、線路の上に横たわりながらも、両腕と両脚を突っ張って、空洞を四方で支える四本の柱を押さえ付けていた。その力を緩めれば、上の建物が崩れ落ちてきて、空洞は埋まってしまうに違いない。

　拡げた股の方から、列車の走る音が近付いてくる。このままでは轢かれてしまうと思う間にも、列車はどんどん近付いていた。列車の先頭が見えた。円い窓が二つ並んで、レンズ状の硝子が嵌っていて、目のようだった。運転手の姿は見えない。列車の中で、白い靴を奪い合う四人の姿が、グラグラと揺れているだけだった。列車は、私の股に達し、腹の中を通り過ぎていった。私の片方の白い靴だけが飛んで、線路の敷石の中に転がって紛れた。空洞の中を、私の笑い声が響いたが、それは、腹を踏み潰される蛙の最後の鳴き声が何度でも繰り返されるようで、それがまた可笑しかった。（二〇〇二年六月十一日）

*　*　*

目の錯覚

　とても狭い部屋で、両腕を拡げて指をピンと伸ばすと、左右の中指の先が、向かい合う壁に同時に触れた。いや、一瞬、掠っただけだ。右の中指だけを、更に先へ突き立てた。しかし、何の手応えも返ってこない。それならと、上体の重心を素速く左へ移し、左の中指を振り立てた。弾みで、左によろけたが、壁はなかった。そのまま私は、左へ左へと、横向きに走った。足は、少しも縺れずに横へ横へと交互に差し出されて、止めようにも止められなくなった。無理に止まれば、両脚がおかしな具合に絡んで、間違いなく骨を折るだろう。

　向きを間違えているのかも知れない。横ではなく、前にでも後ろにでも進めるなら、直ぐに壁に行く当たるのではないか。そうして、その前か後ろの壁に触れられれば、左右の壁も元通りになって、また狭い部屋に戻れるのではないか。気が付くと、その考えを譫言のように繰り返していた。誰に聞かれているか分からない。その口を両手で塞ごうとして、私は、バランスを崩して倒れ込んだ。

　見渡すと、壁も天井も、ずっと遠くに暗く薄ぼんやりとしか見えなかった。

その大きな部屋の真ん中辺りまで、急な上りの坂道が入り込んでいた。道の両脇には草も生えていた。それは、更に私の方に迫って、そのまま横になっていたら、その下敷きになりそうで、慌てて立ち上がった。倒れた時に擦り剥いた手を見ると、掌の大きさはそのままなのに、指だけが、十本とも、半分くらいに短くなっている。曲げてみると、関節はそのままなので、切断された訳ではない。

　その左右の短い指を誰かに掴まれて、私は、坂を登り始めた。二人かと思ったら、私を引っ張って行くのは一人だけで、私に背中を向け、両腕を後ろに回して、その小さな手で、片方ずつ私の手を握っていた。早足で坂を登っているにしては、目の前のやや前屈みの、細くて小さな背中は、殆ど動かなかった。私の体も同じように揺れるので、止まって見えてしまうのかも知れない。その背中から目を離せなくて、周りが揺れて見えるかどうかは、確かめようがない。それでも、坂がどんどん急になって行くのは分かった。一人でだったら、とても早足で登ったり出来なくて、恐らくは四つん這いになって、攀じ登っているところだ。

　「恐くないんですか？」と、尋ねた。私を導く者の二枚の耳朶の裏側が、浮き出るように見えて来た。透き通るように白くて、柔らかそうにヒラヒラと動く。殆ど真ん丸の坊主頭は、硬そうで、まるで石ころが蝶の羽根でも生やした

ようだ。
「指だけ短くさせて貰った。長いままでは、あなたの手を握れないので。私の手は、生まれ付き小さいです。」と、坊主頭が細かく震えて、声になって、私の耳まで伝わった。
「元に戻して貰えるんですか？」
私達は、坂道を登りきっていた。そこは、円い広場の端で、何軒かの小さな木の家が、間を開けて、ポツポツと広場を囲んでいた。私達の前に、大きな丸い石が二つ横に並んでいた。坊主頭は、私の手を離し、その狭い石の間を素速く擦り抜けて、どちらかの石の後ろに身を隠した。私は、そこがまだ部屋の中なのかどうか気になって、後ろを振り返った。登ってきた坂道が見下ろされる筈が、そこにまた上り坂が見上げられた。それは、別の坂道に違いない。私は、登ってきた坂道を見付けようと、広場の縁を、ウロウロと歩き回ったが、その一本の上りの坂道の他に何もなかった。私は、そちらに向けて、両手を差し出した。坂は余りに急で、上体を前に出して腕を伸ばせば、手が届きそうにも思えた。
「そっちじゃない。」と、後ろから坊主頭の声がした。振り返ると、左の石の後ろから顔を出して手招きしている。私は、構わずに、一人で坂を登ろうとした。しかし、一歩踏み出しただけで、危うく転げ落ちそうになった。足元だ

けが、恐ろしく急な下り坂だった。その直ぐ先に、上りの坂道が見えてはいたが、足元の裂け目を跨げるかどうかは迷うところだ。或いは飛べば、何とか行けそうだが、その上り坂が、本物の道ではなく、絵に描いた道にも見えてくるのだった。それとも、色褪せた細長い薄い紙が、上の方から、斜めに垂れているだけか。草に見えるのは、その紙の両縁の染みが、緑掛かっているだけか。いや、そうであっても、私がそこを登ってしまえば、そこは道になるのだ。それにはまた、坊主頭に手を引いて貰うしかなさそうだ。私は、二つの石の方に向かった。

　二つの石の周りをグルグル回ったが、坊主頭の姿はなかった。そこで私は、その石を、絵にも紙にも見える上り坂に放り投げる事を思い付いた。石が、その上に乗っかれば、たとえそれが絵に描いた坂道であっても、私はそこを登って行ける筈だ。

　片方の石を抱えて踏ん張ったが、ビクともしなかった。指が短くなっている事を、忘れていた。力を入れ過ぎたせいか、指は、強張って、曲がったまま動かなくなってしまった。石の冷たさが胸に伝わって来るのが心地良くて、暫くそのまま、石に抱き付いた恰好で休んでいると、石の中で音がしているのが分かった。片方の耳を石に押し当てると、それは音楽のようでもあった。そのままで、もう片方の耳に、もう片方の石から出てくる音が、同じように聞こえて

くる。それも、また少し違った音楽のようだった。

「それを、頭の中に入れておいて下さい。」と、後ろから声がした。振り返ると、ヨレヨレの服を着た、何処となく悲しそうな目をした痩せた女が立っていた。石から耳を離すと、頭の中で、左右二つだった音楽が、一つになって鳴り出した。止めようと思っても止められず、何度でも繰り返されて行くようだった。女は、私を置いて、真っ直ぐ、一軒の木の家の方に向かっていた。私の頭の中の音楽を止められるのは女しか居ないように思えて、私は、後を追った。

どの家も似たような造りなのに、なぜその家でなければならないのか。その私の疑問を見透かすように、女は、手にしている新聞を私に渡した。広告欄に、その家の写真が載っていたが、説明文は、辺りが暗くて読めなかった。標札の代わりに、大きな温度計が掛かっていて、直ぐ上に、その目盛りを照らす小さな灯りが点っている。私は、新聞を温度計に近付けた。浮かび上がった文字は、大きくなったり小さくなったりして読み難い。灯りが、強くなったり弱くなったりするせいだ。しかし、幾つか読み取れた文字からすると、その家の中に、何かが展示してあるらしい。黒い幕を引き上げて、女が中に入っていったので、私も続いた。

外からは見えなかったが、小さな木の家の奥に、大きな建物が繋がっているに違いない。その薄暗いがらんどうの中を、私は一人で、奥へ奥へと走ってい

た。目に付くものもなく、ただ頭の中の音楽だけが、全身を押さえ付けて来るようだ。段々と体が重くなってきて、走れなくなった。膝を折って、手を付くと、そこはひどく傾いていた。一人で坂道を登っていたに違いない。しかし、一人では、重い体がそこをずり落ちて行くのを、どうにも出来なかった。それを止めたのは、膝に絡み付いた布切れだった。手に取ってみると、女の着ていたヨレヨレの服のようで、私はそれを真っ二つに裂いて、左右の耳の穴に、突っ込めるだけ突っ込んだ。

　頭の中で鳴っている音楽が、テンポの速い所に差し掛かり、周りの壁と天井が一斉に私の方に迫って来て、そこは、狭い部屋になった。両腕を拡げると、指をピンと伸ばせなくても、左右の中指の先が、向かい合う壁に、一瞬、同時に掠った。片方の中指だけを更に先へ突き立てたが、何の手応えもなかった。音楽のテンポが緩くなって、壁と天井は、今度は私から離れていった。結局、耳に詰めた女の服は、何の役にも立たなかった。音楽は止まらなかったし、耳から生えた羽根になって、羽ばたいてもくれなかった。抜き取ろうとすると、それは、硬くて丸くて大きくて冷たかった。丸い大きな石が、私の両耳を塞いでいた。その石の間に頭が挟まっているせいで、そこからずり落ちずに済んでいるらしい。女の服は、何処へ行ってしまったのか。

「目の錯覚を利用しています。」と、女の声が聞こえた。

「でも、壁に触れましたよ。」と、私は答えた。
その二人の声を切っ掛けに、頭の中の音楽は速くなる一方で、抑えが利かなくなった。広くなり掛けた部屋は、みるみる狭くなり、壁に触れる間もなく、私は、部屋から弾き出された。
私は、一人で、広場を、元来た方に歩いていた。振り返ろうにも、ボロボロの女の服が、私の頭を両側からきつく押さえ付けていた。引っ張ると、耳の穴の奥までが引っ張られるようで、ズキズキと痛んだ。音楽は已んでいた。広場の縁まで来てみると、絵のような紙のような上りの坂道は、そのままだった。ただ、ビクともしなかった二つの大きな石が、その坂道の一番下の端辺りに、横に二つ並んでいた。その直ぐ奥で、坊主頭が手招きしている。石を置いて何ともないなら、たとえそれが絵に描いた道であっても、歩いて登って行ける筈だ。私は、思い切って飛んで、足元の下り坂を跨ぎ越えた。
薄い紙を踏み破る感触しかなかった。その下には何もない。辛うじて、その踏み破った辺りを、両手で掴んだ。両手の指は、自由が利いて、幾らでも長くなったので、紙の縁を握り締めるには、何の差し障りもなかった。下を見ると、二つに裂けた女の服が、ハラハラと何処までも落ちて行くようだった。（二〇〇二年六月十五日）

＊

＊

＊

泉

　舗装された三日月型の青い空き地を通り抜けて、濡れた短い石段を登ると、少し明るくなって、道はそこから緩やかな上りになった。明るくなったのは、道の左側に切り立つ白茶けた乾いた崖が、柔らかな陽の光りを照り返すからだ。

　女は、人に頼まれて、手紙を届けようとしていた。道は、曲がりも分かれもせず、だらだらと上ってゆき、少しずつ細くなって、遂にはなくなってしまった。崖は、疾っくに終わっていて、そこは、土手の斜面のような所で、その先には暗い空しかなかった。滑らかな斜面は、一面、短い若草に覆われていて、その中に、小さな細身のナイフが一本、突き立てられてキラキラしている。その斜面に穴を開けて通り抜ければ、その先に、手紙を待っている人が居るのではないか。そのナイフを握って、女は、そこを掘った。

　地面は柔らかくて、石ころ一つ出てこないので、どんどんと掘り進めた。掘った土も、掻き出していたのは初めの内だけで、ナイフを突き刺す度に、穴はジリジリと陥没するようだった。しかしいきなり、ナイフが、唸るような音を立てた。硬い岩盤に行き当たったようだ。それでも、人一人がすっぽり収まる

くらいの穴は掘れたので、女は暫くその中で休む事にして、体を丸めた。眠気も襲ってきたが、それ以上に、岩盤の冷たさに体の芯まで冷やされて、眠れはしなかった。

穴を出ると、直ぐ脇に、小屋がある。本当に小さな小屋で、斜面とは逆向きに傾いていて、女が穴を掘っている間に、上からそっと転がされて来たようにさえ見えた。戸もなくて、中は丸見えで、その板張りの中に、女は倒れ込んでいった。それでも、体は冷えたままで、隙間風の音に、却って目が冴えた。

男の声がした。女が上体を起こすと、男はもう小屋の中で、狭い中では、肩を寄せ合うしかない。男は、手紙を届けに来たと言った。それを聞いて女は、自分は、手紙を届けるように頼まれたのではなく、届けられる手紙を待っているように頼まれたのではなかったか、という気がした。それでも、懐を探ると、指先に封筒の角が当たった。男は、返事を持って帰りたいと言った。それなら、懐の封筒がその返事だろうか。女は、それを取り出したが、男は、それに目を落とす事もせず、ただ黙って待っているようだった。

遠くで、話し声が響いた。男は、隠れなければならないと言った。女の掘った穴しかない。男をそこに押し込めて、はみ出た丸い背中の上に、掻き集めた土を乗せ、女は、また一人で小屋に入った。今度は横にはならず、壁の方を向いて、居住まいを正して座った。二人連れがやって来て、自分達は見張り番だ

が、さっき人影がこっちに来るのを見た、知らないかと、女に尋ねた。女は、ゆっくり振り返って、自分が土を被せたばかりの、盛り上がった所を指差した。二人はそちらを見たが、女にからかわれているとでも思ったのか、薄笑いを浮かべて、直ぐに何処かに行ってしまった。

　女は、小屋を出て、土を除けようとしたが、そこは、凍り付いたようにカチカチに固まっていた。草の上に投げ出されていたナイフを取って、そこに突き立てるしかなかった。暫くそうしている内に、段々と穴は掘れていったが、男の体は出て来なかった。先程と同じ、人一人が収まるくらいになって、穴の底に触れると、ヌルリと濡れていた。それは、そこに膝を突いている自分の下半身も同じだった。硬い土にナイフを振り下ろす度に、それが逸れて、自分の腿や腹を刺していたのだ。そこから流れた血に塗れているに違いなかった。

　穴から出ようとして、小屋の方を向くと、中で女が横になっているのが見えた。穏やかな寝顔だった。そこに女が寝ているなら、穴の中に居る自分は、男であるしかない。見張りの二人が戻って来ないとも限らない。その穴にまた身を隠すべきだが、独りでは、はみ出た背中に土を被せる事も叶わないので、もう少し深く掘る事にした。穴の底は、血が染み込んで、硬い筈の岩盤がすっかり脆くなっていた。男は、ナイフを投げ捨てて、穴の底を指で掻いた。脆くなっているのは意外に狭い範囲だったが、少し掘り進むと、奥が急に広くなった。

そうして、掻き出せる限りのものを掻き出してみると、初めの穴の底に、口の小さいもう一つの丸い穴が開く形になって、その下の穴の中に、丸めた男の体は、すっぽり収まった。穴の小さな口は、手だけ出して、その上の土を掻き寄せれば隠せた。

　音も光りも遮断された狭い中で、頭をどちらに向けるのが一番楽かと、丸い体をグルグル動かしていると、頭の中で、チャポンチャポンと水の跳ねる音が聞こえた。暫く前から、頭の中に水が溜まっていたのだ。どうしたらその水を取り出せるか、井戸掘りの名人なら、知っているかも知れない。それを問い合わせる手紙を、届けようとしていたのだ。しかしここで、自分でその方法を見付けられたのではないか。穴の中は、どちらを向いても、硬く冷たい岩盤なのだ。そこに頭を擦り付けていれば、頭の中の水は、地下水になって、岩盤へ染み出て行くのではないか。そうして暫くじっとしていると、あちこちから水が染み出して、穴の中は水浸しのようで、男の体は、そのまま岩盤の中の水脈へ流されて行くようだ。

　気が付くと、男は、砂利道に大の字に投げ出されていて、側で泉が湧き出ていた。上体を起こすと、さっきの見張り番と、その仲間らしい十人程の者達に囲まれていた。皆、険悪な目付きで、男を見下ろしている。泉の水は、まだ霞んでいる男の目にも、赤く濁っているのが見て取れた。男が頭を振ると、頭は、

チャポンチャポンと鳴った。一人が、その頭を鷲掴みして押さえ付け、こめかみに細身のナイフを突き刺した。こめかみがヒンヤリして、そこに開いた穴から、澄んだ水が湧き出した。

周りの者達は、男を乱暴に引っ立てて、順にそのこめかみの穴を吸って、湧き水を飲み回した。水は、何とか全員に行き渡ったが、頭の中の水は、それで大方飲み干されたようだった。それでも彼らは、男の体を掴んで、その頭を振り回した。もう水の音はしなくて、彼らの喚き声だけが飛び交った。男は、殺されるのだと観念した。

側の泉から、女の体が押し上げられてきて、濡れたまま砂利道に投げ出されて、大の字になった。小屋で見たのと同じ寝顔をしている。すっかり水で洗われて、血は出ていなかったが、女の下半身には、ナイフを突き立てたらしい傷が、幾つも幾つも口を開けていた。女の体が飛び出た後の泉は、赤味が抜けて綺麗に澄んだ。周りの者達は、歓声を上げた。男の体は、道に放られた。もう男など、どうでもいいようだった。泉の周りに駆け寄る者達の姿を見ながら、男は、突き落とされるように眠り込んでいった。

女は、男が、血相を変えた大勢に取り囲まれて、その頭を振り回されているのを見た。彼らの砂利を踏んだり蹴ったりする音が、横になっている女の後頭部に響いてきて、うるさかった。女が上体を起こすと、それを見付けた見張り

番の二人が、女の方にやって来て、泉が涸れたのはどういう訳だ、お前か、あの男のせいじゃないのか、と迫った。女が、知らないと答えると、二人は、女の右手に細身のナイフを握らせた。女は、ゆっくり腰を浮かせて四つん這いになり、道に敷かれた玉砂利に、次々にナイフを突き立てた。カチカチと鈍い籠もった音がして、ナイフは跳ね返されるだけだった。埒が明かないので、最後の積もりで、白くて大きな石に狙いを定め、腰を落として思い切り振り下ろすと、ナイフの刃は折れ、思いも掛けず左に大きく跳ねて、女の左腕に刺さった。それを抜いても、そこに菱形の傷が口を開けて、白っぽい肉が覗くだけで、血は出なかった。

「もう、ナイフは役に立たないらしいです。」と、女は言った。

二人はそれならと、女に、男の頭を持たせた。他の者達は、もう疲れたのか項垂れて、砂利道にしゃがみ込んだりしていた。女が男の頭を振ると、チャポンチャポンと水の音がした。もう辺りはすっかり暗くて、その音だけが、静かな砂利道に跳ね返って響いた。他の者達が集まってくると、男のこめかみの穴から、水が溢れて止まらなくなった。彼らは、女から男を取り上げ、先ず一人がその水を啜った。直ぐにそのこめかみから口を離し、苦くて飲めたもんじゃないと言った。他の者達は、それでも、それがどんな苦さか味わってみたいらしく、次々に男のこめかみにかぶりついては、苦い苦いと言い立てて、渋面を

並べていった。

　暫くして、彼らはバタバタと倒れ、折り重なって動かなくなった。水は毒だったらしい。女は、彼らの中から、独り穏やかな寝息を立てている、男の体を引っ張り出した。こめかみからは、まだチョロチョロと水が出ていた。その頭を持って振ると、また、中でチャポンチャポンと音がして、こめかみから勢い良く水が湧き出てきた。そのこめかみの穴に、折れたナイフの刃先を差すと、それでしっかり栓がされて、水はぴたりと止まった。男の頭は段々と重くなって、振っても音がしなくなった。

　女は立ち上がると、砂利道の脇から、透き通った水が、滾々と湧き出ているのを、見付けた。そこに突き上がる水の塊は、星明かりを受けて暗い色に輝き、その勢いは見ていて恐くなる程だった。女は、水の掛からない方にゆっくりと回り込んで、それを掬って一口飲むと、まだ手紙を届ける事を忘れていなかったので、緩やかな上りの寂しい夜道を、山の方に歩いて行った。（二〇〇二年六月十九日）

*　　*　　*

縫いぐるみ

板張りの狭い廊下を、何度も右に左に折れて、窓のない奥まった部屋に案内された。それとも、私は、独りで部屋まで辿り着いただろうか。ただ、折れ曲がるだけの一本の廊下なら、迷う事もない。途中、何人もと擦れ違った。彼らは皆、廊下の角から小走りに現れて、私の姿を見ると直ぐに立ち止まり、壁際に身を縮めて道を譲る素振りをする。私は、急かされるように、その脇をすり抜けて、先に進んだ。迷いたくても、迷う間もなかった。急に人気がなくなったかと思うと、廊下はそれきり曲がる事もなくなって、その突き当たりまで行き着くしかない。その先の部屋と廊下の間の戸は、全て外されていた。そこに来るまでは、そんな部屋など一つも見掛けなかった。

部屋は、狭くて薄暗かった。どうやらただ一つ、その部屋を照らすのは、私が両手に持っている、人の頭くらいの大きさの、紙の白い箱のようだ。その中には蝋燭が一本だけ灯っていて、私の掌を暖めている。その箱の中の火がずっと消えなかったので、私は、ここまで来られたに違いない。

漆喰の壁に囲まれた部屋の真ん中には、大きな白い犬の縫いぐるみが、俯せに大の字になっていた。角張った顔だけは、こちらを向いていて、私を待っていたかのように、その前脚が、ノロノロと尻の上まで動いていて、自分で尻のファスナーを降ろした。その開いた尻から、白い小さな尖った尻が出て、次に

曲がった棒のような背中が出て、頭が出て、最後に手と足が出た。真っ白な薄い生地の服を、首から下の全身にぴったりと纏っていて、立ち上がって体の線が全て露わになっても、男か女か分からなかった。私より、幾らか背が低かった。

私は、脱け殻となった縫いぐるみの側に座り込んだ。箱の蓋を開けると、箱の側面も四方に拡がって、蝋燭の火が剥き出しになった。縫いぐるみの左の前脚の先を、火に翳したが、その白い毛の一本すら焦がす事は出来なかった。風通しの悪い部屋で、ずっと人が中に入っていては、湿ってしまうのも当たり前だ。

「外で乾かしてからでないと、無理ですね。」と、私が言うと、その白尽くめの者は、

「じゃあ、首をちょん切ってしまおう。」と言って、小さな鋏で、幾つも幾つもジョキジョキと切り口を入れて、大きな頭を、切り離した。私は、箱を元通りに畳んで立ち上がり、片手で縫いぐるみの脚を引っ張ったが、それは、中に肉も骨もたっぷり詰まっているかのように重くて、まるで動かせなかった。余り役に立たなかったが、白尽くめの者にも手伝って貰って、やっとの事で、それをおんぶした。首を切り離して正解だった。縫いぐるみの頭は、私の頭の何倍もあるのだ。そんな物が、私の頭の上にのし掛かってきたら、一歩進もう

としただけで、よろけて、そのまま倒れてしまうだろう。傾ける事も出来ない箱のために、両手は塞がっている。私は、ずっしり重いその毛皮の塊がずり落ちないように、出来るだけ背中を丸めて、ノロノロと部屋を出た。五、六歩も進むと、廊下の壁の戸が大きく開いていて、外に出られた。

　小さな葉をびっしりと繁らせた背の低い木で覆われていて分かり難いが、そこからは池だった。もう踝の上の辺りまで、水に浸っていた。戻ろうにも、後ろを向き掛けただけで、縫いぐるみは、背中からずり落ちるだろう。そこが何であろうと、真っ直ぐ前に進むしかない。水は腰までは来なかったが、私の背中からダラリと垂れた、縫いぐるみの四本の脚は、水に浸かった。池の中に浮かぶ小さな島が見えたので、そこを目指した。

　水から上がり掛けた途端、縫いぐるみの重さに耐え切れず、倒れ込むしかなかった。それでも、両腕を前にいっぱいに伸ばして、蝋燭の入った箱だけは水に濡らさないようにした積もりだが、覚束ない。水際の泥の中に顔が埋まり掛けて、先がよく見えない。しかし、そうして体が泥に沈み込むと、却って縫いぐるみの重さから解き放たれたようで、私は、縫いぐるみの下から這い出す事が出来た。泥の先の乾いた地面に箱だけ置いて、水際から縫いぐるみを引っ張り上げようとすると、褐色に日焼けした小柄で小太りの素っ裸の男が、小躍りしながら現れた。

「手伝ってくれるんですか。」と私が言っても、男はただ、口を尖らせて私の周りを跳ね回るだけだった。縫いぐるみは、泥の上を滑り、引き上げるのは、それ程厄介ではなかった。ただ、乾いた地面まで持ってくると、もう動かせなかった。男は、飛び跳ねるのを已めた。

島の真ん中は、お椀を伏せた形に大きく盛り上がっていて、その一番高い所に一本だけ生えた太い木が、濃い色の分厚い葉を茂らせた枝を八方に拡げて、笠のように島の上に被さっていた。その木の根元辺りから、白尽くめの者が、辿々しい足取りで駆け下りてきた。体は濡れていないし、足に泥は着いていない。

部屋の中に居るままだった。

「どうやって来たんですか。」と、私は尋ねた。

「気が付かなかったんですか。池を一回り半してしまった。池の水もグルグル回っているらしい。」

「独りで、舟を漕いできたんですか。」と、また私が尋ねると、白尽くめの者は、細い体を揺すり、ゴボゴボと咳をしながら、縫いぐるみの方を指差した。男の上半身はもう、縫いぐるみの尻の中に埋まっていて、短い脚をバタバタさせていた。咳は止まらなくなった。

私は、縫いぐるみは二人に任せて、暖かい箱を持って、木の根元に向かって登り始めた。そこに近付く程、辺りは暗くなって、蝋燭の炎の揺れるのが、箱

を通して見透かせるようになった。そして、一番高い辺りまで登ると、そこは全くの闇で、木の幹が何処なのかも、それに触って初めて分かるのだった。箱を近付けて木の幹を照らすと、脂が滲み出て、何処もかもヌルヌルと濡れていた。そこから下を見下ろすと、水際の泥が一面に光って、目が眩んだ。明るさに目が慣れると、縫いぐるみが、四つん這いになって、犬そっくりに体をブルブルと震わせ、全身の水気を振り払っているのが見えた。首の切り取られた所には、男の小さな頭が半分くらい食み出していた。雫が周りに激しく飛び散って、それを嫌ったのか、白尽くめの者の姿はなかった。

　私は、箱の蓋を開け、蝋燭の炎を木の幹に直に当てた。火はあっさりと脂の塊に伝わり、青白く透き通った炎が、幹の表面を流れるように走り上って行った。幹全体が輝いた。幹は、三メートルくらいしかなくて、そこからは、太い枝が捩れながら幾つにも分かれて、真横に拡がってゆく。その枝の表面も、青い火に包まれていった。その光りは、水際の方をも照らしたが、それでも明暗は逆転し、私の居る木の根元の辺りが、一番明るいように私には見えた。或いは、脂は、木の根元の地面にも染み込んでいて、そこにも火が回って、自ら輝いているようでもある。ただ、熱さは全く感じられなかった。

　熱さは、下から吹き上がってくる湿っぽい風が頬を撫でて、初めて感じられた。水際の辺りは、そこから湧き上がる白く輝く蒸気に包まれて、直に見えな

くなった。その蒸気を運ぶ熱風は、あらゆる方向から、一斉にこちらに向かって昇ってくる。私は、立っていられなくなった。直ぐ側まで蒸気に覆われて、視界も利かなくなった。その蒸気の中から、白尽くめの者の姿が、影のように浮かび上がった。表情は、嬉しさに光り輝くようで、今にも私に抱き付いて来そうだった。すると、蒸気はみるみる晴れて、その後からは、乾き切ったヒンヤリとさえ感じられる風が、昇ってきた。晴れた視界の先の水際は、心なしか、遠ざかったようでもある。泥だった表面は、乾き果てて、ひび割れて、白っぽかった。青白い炎は、枝の先まで延びていたが、少しずつ幹の方へと退いて来るようだった。

　白尽くめの者が、私の手を取った。私達は、手を繋いだまま、水際に降りて行った。縫いぐるみが、部屋で見たのと同じに、俯せに大の字になっていた。私は、白尽くめの者に促されて、それに蝋燭の炎を近付けた。パチパチと弾ける音に続いて、焦げ臭い匂いが立ち上り、縫いぐるみの背中から、赤く熱い炎が、尖った形に噴き上がった。すると、いきなり、縫いぐるみは立ち上がり、私達の方に躍り掛かってきた。まだ、裸の男が中に居るのだ。私は避けたが、白尽くめの者は掴まって、縫いぐるみと抱き合ったまま、火達磨になって地面を転げ回った。私は、箱に蓋をして、水に浮かべた。なるほど池の水は回っているらしく、箱は、時計回りと反対方向に、島を巡って行くようだった。

私は、舟を見付けようと、箱と二人に背を向けて、水際に沿って歩いた。島を半周した所に、橋が架かっていた。白尽くめの者が追い付いてきたが、体の何処にも焦げた跡は見当たらなかった。

「さて、頭はどうするんですか。」と、私は尋ねた。

「池の底に沈めた。」と、女の声が返ってきた。逆向きに島を回ってきた紙の箱が、暗い池の水の上で、赤く輝いて揺れた。（二〇〇二年六月二十三日）

*　　*　　*

支度

女が、丸い白い石を拾おうとすると、そこで道は途絶えていた。その石を拾おうとしたのは、そこが往来の真ん中で、誰かがそれに躓くかも知れないと思ったからだが、道が途絶えているなら、その石は、道のない所に誤って踏み出さないための、目印になっているようでもある。しかし、女の周りでは、道がそこで途絶えている事など知らぬげに、人の流れは淀みない。それとも、道の途絶えているのは、誰もかも疾っくに分かり切っていて、それで立ち止まる者もいないのだろうか。

女は、道が真っ直ぐ続くものと思って、軽い気持ちで、傷みのひどい木の反り橋を渡って、そこまで来たのだ。その幅の狭い橋にも、次から次に人が流れていて、しかも一方通行だった。道がないと分かっていたら、橋の手前で引き返していた。その橋に辿り着くまでは、ずっと道のない所を通ってきた訳だが、地図と磁石を使っていた。橋の袂まで来て、そこから人の流れが出来ているなら、道があるに違いない。そう思って、橋の袂で眠り込んで、独りだけ橋を渡ろうとしない男が居たので、その男を揺り起こして、地図と磁石を渡してしまった。男は、不機嫌そうに、寝ぼけまなこのまま、「余り待たせるもんじゃない。」と言って、その地図と磁石を持って、女のやって来た方に行ってしまった。

　橋を渡った連中は皆、何処に向かうのか。その進む先を見上げると、白い砂の地面が、扇形に拡がりながら盛り上がり、その急な傾斜の上の方に人が犇めいていて、彼らの前に、しっかり閉じた大きな門が、立ちはだかっている。門の裏側に朝日が差して、門の輪郭を金色に縁取っている。橋を渡った者ばかりではなく、橋よりもっと低い西の方からも、人はゾロゾロと登って来て、その門を目指すらしかった。しかし、門が開かない事には、門の前の人集りは脹れて行くばかりで、このままでは、彼らの重みに耐え切れず、砂の斜面が丸ごと崩れ落ちて来そうではないか。大量の土砂と、バラバラになった門の破片と、

そこに巻き込まれた大勢の人とが、一斉に、雪崩のように迫って来る様子が目に浮かんで、足が竦んだ。

　女は、ゆるゆるとそれに背を向け、白い石の直ぐ前にしゃがみ込んだ。石は、子供の頭くらいの大きさだった。それを手に取って立ち上がれば、ひょっとして、人の流れを、道の途絶えた先へと向けられないだろうか。白い石は、水槽の底の栓のような役目を果たしていないだろうか。栓を抜けば、彼らは一斉に、水が落ちるように、女の方に押し寄せるだろうが、石を持っている限り、女は踏み倒されたりはしない筈だ。そうして人が流れて行くなら、その先に、道も開けるかも知れない。

「では支度をして下さい。」と、やや強い調子の女の声が、直ぐ後ろから聞こえた。振り仰ぐと、中年に差し掛かるくらいの、顔を白く塗った、目の細く尖った女だった。彼女は、蓋のない白い木の箱の中に座っていて、すらりと細い上半身がその箱から伸び上がり、四方を、肉付きのいい、がっしりした体格の者達が囲んでいた。支度を促された女は、白い石の直ぐ脇の地面に唾を吐き、それを白い砂と混ぜて捏ね、顔に塗った。砂の肌理が細かかったので、それは、本物の白粉のように肌によく乗った。

　立ち上がると、両側から抱え上げられて、箱の中に入れられた。細い目の中年の女の直ぐ後ろで、二人入れば、箱は一杯だった。屈強な四人は、それぞれ

片腕一本で、そっとその箱を持ち上げ、白い石を跨いで、道の途絶えた先に踏み出した。途端に、四人の足はふらついて、箱はひっくり返った。女二人は投げ出され、中年の女は、事もなげに身を翻して地面に立ったが、箱に乗せられたばかりの女は、地面を転がった。倒れた四人は、それきり立てなくなって、四つん這いになって、中年の女の周りに集まった。彼女が指を振り下ろすと、四人は犬が前脚を掻くように、そこに穴を掘り始めた。地面は柔らかくて、みるみる深く掘り進まれ、中年の女がその中に横たわると、四人は、その上に土を被せていった。

　それを見ていた女は、逃げようとしたが、足がふらついて、碌に立つ事も出来ない。すっかり穴を埋めた四人が四つん這いで近付いて来て、中腰になって女を取り囲み、女を支えて、真っ直ぐ立たせた。そうして、前を見ると、ちょっとした仮小屋のようでもある、何の飾りもない四角い大きな箱が、後ろから朝日を受けていた。四人に支えられたまま、そこに近付こうとするが、四人のバランスが悪いらしく、真っ直ぐ前には進めずに、箱の右側を半周してしまった。そこはひどい泥濘で、四人は、自らの重みで、腿の上の辺りまで埋まった。女だけは、余程軽いのか、少しも泥に足を取られない。まどろっこしくなって、彼らを押し退け、更に纏わり付いてくる手を解こうと、一人を足蹴にした。弾みで、女の体は、泥濘の上に仰向けに倒れ、そのままツルツルの泥の上

を、頭が前になったり爪先が前になったりしながら、クルクルと滑っていった。
　止まった所は、ちょうど中年の女が埋められた辺りではないか。起き上がりたいが、背中が地面に張り付いてしまったかのようだ。少し先で、ピチャピチャと泥の撥ねる音がする。また四人が、四つん這いで近付いて来るのだ。しかし、女の顔を覗き込んだのは、橋の袂で居眠りしていた男だった。
「どうした。門は見付かったか。」と、男は尋ねてきた。
「石なら見付かった。」と、女は答えたが、別に石を見付けようとしていた訳ではないので、男にそれを誤解されないように、言葉を足そうとすると、
「いや、門じゃない。道だ。道は見付かったか。」と、男は、言い間違えたにしては、噛んで含めるような調子で行った。
「石を見付けたかったんじゃない。」と、女は言ったが、それは、自分の耳にも自信なげに聞こえた。
「どんな石だ。」と、男は声を張り上げた。
「子供の頭くらいの白い石。」
「そうか、それは残念だったな。」と言って、男は、女の体を引き起こし、その腕を取ったまま大きな箱にスタスタと歩み寄った。男は箱を蹴破り、その破れ目に女を押し込んだ。中は暗かったが、直ぐに小さな電球が点った。女の後ろから泥だらけの腕が伸びて、その手がスイッチに触れていた。そこはやは

り、物置小屋のようで、何段かの細い棚に細々とした道具類が並んでいた。破れ目が外から塞がれると、その伸びた腕は下りた。後ろに居るのは誰なのか。振り返ると、その者もまた、素速く女の後ろに回り込むようだった。

「急がないと時間がないぞ。」と、外で怒鳴っている男の声が聞こえると、女は、汚れた床の真ん中に、古い井戸のような穴が開いているのを、見付けた。もうちょっと見付けるのが遅ければ、そこに落ちているところだと思った瞬間、後ろから押された。棚を掴もうとしたが、小さな斧のようなものを掴めただけだった。

穴は、下に行く程、円錐形に拡がってゆく。それを冷静に見て取れる程、女はゆっくりと落ちてゆくようだ。その底に降り立つと、びっしりと白い石が敷き詰めてある。女は直ぐに、足元の石を一つ取り上げようとした。道の途絶えた所で、さっさと石を拾っておけば、こんな所まで来なくて済んだのだ。同じ過ちは繰り返すまい。

「拾う石が違う。」と、甲高い声がした。見ると、何処までも石が敷かれている中に、ポツンと男が一人、小さな机に向かっている。埋められたがらんとした中年の女と、そっくり同じ顔をしていた。それとも、同じように白く塗っているから、そう見えてしまうのか。男は、手招きした。

机の上には、地図と磁石が乗っていて、女は、それを渡され、男の指差す方

に歩き出した。地図を拡げると真っ白だった。尤も、どちらを向いても白い石ばかりで、地図に何が描かれてあっても、役に立ちそうにない。戻って、男にどうしたらいいか聞くのも面白くないので、女は、地図を読むような振りをして、ただ磁石の指す方向に進んだ。「そこだ。」と、遠くの後ろから、男の甲高い声がユラユラと響いてきた。女は、足を止めてしまった。そこへ、中年の女が、後ろから身を躍らせて出て来た。その泥だらけの両肩が、縁取られるように白く輝いた。そこに落ちる光りは、殆ど真上から来るようだ。机の男と別れた時より、辺りはずっと明るくなっている。少しずつ明るさが増していたので、気が付かなかった。見上げると、高い所に真ん丸の強い光りの塊が、暈を作っていた。

「背中合わせだったんだ。薄々気付いてたけど。」と言って、女は、その中年の女の顔を見た。白く塗っていた化粧がすっかり落ちて、見開かれた大きな目は、濡れているようで、男のような浅黒い唇を、硬そうに尖らせていた。

「何処へ行く積もりだったんだ。」と、中年の女は、男のような低い声で言って、女がずっと握り締めていた斧を奪い取り、足元の白い石に向けて振り下ろした。その石は、真っ二つに割れた。そうして彼女は、次々に石を打ち割っていった。女は、その中に自分が拾うべき石があるように思えて、已めさせたかったが、下手に近付けば、その斧で足を断ち切られる。割られた石にもまた

斧が打ち下ろされ、中年の女の周りの石だけが細かく砕かれてゆき、遂には、その粉が、煙のように舞い上がって、泥だらけの中年の女の全身に塗され、彼女は真っ白になった。「そこだ。」と、また、遠くの後ろから、男の甲高い声がユラユラと響いてきた。或いはそれはもう、女の声かも知れなかった。「そこ」が何処なのか、女は、目を皿のようにした。中年の女の足元に、一つだけ、割られずに残っている白い石を見付けた。

「何処にも行きませんよ。」と、女が言うと、真っ白な中年の女は、石の真似でもするように動きを止めた。女は、地図と磁石を捨て、そこへ駆け寄って、目当ての石を素速く拾い上げた。

　地上の真昼のように辺りは明るくなり、刃物のように尖った真っ黒な影が真下に落ちて、真っ白な中年の女の体を、幾つかに断ち切るようだ。轟音と共に、大量の土砂と、バラバラになった門の破片と、そこに巻き込まれた大勢の人とが、高い所から、雪崩のように迫って来る。女は、足が竦んで、ただ見上げるだけだった。真ん丸だった光りの塊が、脹れながら、その形を忙しく変えていた。濛々と砂煙が立ち、それでも強い光りは、女の足元までそれまで通りの明るさで届き、白く輝く煙で、全く視界が利かなくなった。

　全てが収まると、真っ白な土砂は、女の足元まであと少しの所まで来ていた。中年の女は、その下に埋まってしまっただろうか。女は、拾った石を持ったま

ま、その出来たばかりの急な斜面を、何度も足を滑らせては、登っていった。穴から出ると、真っ直ぐな道の先に、反り橋が架かっていて、男が居眠りしていた。女が近付くと、男は直ぐに目を覚ました。女は、「これでどう？」と言って、男に石を差し出した。男は、替わりに、女に地図と磁石を渡した。地図を拡げると真っ白だったが、女にはそれが読めた。それでも迷いそうになると、地面に唾を吐いて、そこの土と混ぜて捏ねたものを顔に塗れば、迷いは消えた。そうしている内に、細い糸のような金色で輪郭を縁取った、黒々とした大きな門の裏側が近付いて来て、そこに独りで向かった。（二〇〇二年六月二十五日）

＊　　　＊　　　＊

半島

　部屋の窓は、南側に二つ並んでいるだけで、どちらも円く、分厚い硝子が嵌っていて開けられない。一回り大きい右の窓の方は、綺麗な円で、左の窓は、ほんの少し横に長い楕円のようだ。窓からは、赤っぽい内海と黒っぽい外海が望めて、二つの海を、白い砂ばかりの平べったい半島が真横に細く延びて隔て

ていた。私は、ずっと、部屋に籠もって、私の影を、窓の外に向かって延ばそうとしていた。もちろん、夜、部屋を明るくして窓辺に立てば、自ずと影は、窓の外へ延びるが、そうではなくて、灯りを使わず、陽が昇っている間に、私の濃い影を、陽の差してくる方に向けたい。

　陽の光りに逆らう影を作るには、陽の光りに逆らう光りを作るしかない。そのためには、部屋の形を変えるべきと考えた。壁の四隅に漆喰を塗り重ねたり、それをまた、あちこち削り取ったり、床や天井を波打たせたりして、窓からの光りを、色々にねじ曲げて、それを一つに集めて窓に向ける。そうして、その光りを背に窓辺に立てば、窓枠を乗り越えてゆく影を、目する事が出来る筈だ。

　窓の直ぐ外は、左から右に少しだけ傾く鏡張りのバルコニーで、その上には、薄っぺらな紫掛かった葉を疎らに茂らせた細い枝が、何本も撓垂れ掛かり、絶えず風に揺れている。　落ち葉は、バルコニーの右側に寄り集まって、下の方から腐ってゆくようだ。

　助手が一人付いていて、一日中、一緒に部屋に居る。まだ骨が細くて、体の柔らかいひょろりとした子供だ。体を丸めたり伸ばしたり、四角くしたり三角にしたり、かなり融通が利く。その子の体を真っ白に塗って、実際に部屋の形を変える前に、その体を色々に置いてみる。初めは見えなかったが、やっている内に、それで、部屋を巡っている光りの濃淡の動くのが、見えるようになっ

た。ただ、ここをこうすれば、光りはこうなるだろうと見当を付けても、必ずと言っていい程、外れる。だから、私とその子は、デタラメに、色々な姿勢を取りながら、部屋の中をあちこち動き回り、それによって光りが動くのを観察する。そして、光りが集まって際立つのが何処かに見えたりすると、そこで体を止め、どうしてそうなるのか、考える。

　ただ、太陽は回り続ける。幾ら雨の少ない、天候の変わり難い土地でも、雲は動くし、雲一つないにしても、空の青は瞬く間に深くも浅くもなる。折角見付け出した光りの塊も、直に、氷が溶けるように消えてしまう。しかし、その時の、二人の位置と姿勢、窓から差し込む光の向きと色と強さ、空の色、日付と時刻、それらを全て頭に叩き込む。もし、一年後の同じ日の同じ時刻に、全く同じ光りが同じ色の空から差して、二人が同じ位置と姿勢を取れば、光りの塊は再現出来る。ただ残念ながら、同じ光りは、今のところ二度とやって来ない。一つ一つ全て違う、光りと二人の恰好が、私の頭の中には、数えきれず詰まっているが、一度も役に立っていない。

　尤も、役に立ったところで、再現された光りの塊が、直にまた儚く失われるなら、ただそれきりだ。私が思うのは、その頭に収めた光りを、全て一度に頭から出して、部屋中を満たせないかと言う事だ。その全ての光りが甦る部屋の形こそ、求めて已まないものだ。今や私は、目を閉じていてさえ、部屋の中の

光りの様子が、刻々変わってゆくのを、隅々まで読み取れる。目を開けていては、窓からの陽差しが、却って邪魔だ。そうして読み取った光りの気配の中へ、頭の中の光りが、順々に静かに流れ出てゆくのを、ありありと思い浮かべる事も出来る。そうして、それが一つになって部屋の北側に回り込み、窓の前に立つ私に、後ろから襲い掛かり、くっきりとした影を引っ張り出す。その影は、どれ程、陽が高く強くても、円い窓枠の端を難なく過ぎ、空と枝葉を映すバルコニーの鏡の上を、延びて滑って行く。目を閉じたままなら、もう私の仕事は成し遂げられていた。

　私は、子供にも目をつむらせて、私と同じものが見えるか、聞いてみる。その子の頭にも、私と同じ光りの記憶が詰まっているらしいのだ。その子も、頭の中の光りが、部屋を満たすところまでは、瞼の裏に浮かぶらしい。しかしそれから、首が弱々しく横に振られるだけだ。その子は、目を開けて、何も言わずに私を見る。私は、もう一度目をつむらせて、私も目をつむり、二人で、頭の中の光りを部屋のあちこちに交互に置いていって、陣取りゲームのような事をやって、子供を慰めたりする。

　こうした事を続けていても、頭の中に詰め込む光りの種類が、増えて行くだけだ。何かが足らないようだが、何だろう。影を作るための秘密の鍵を、私は見付けられなくて、ただ部屋の形ばかりをこねくり回しているのではないか。

ひょっとして、光りを集めるだけでは、影を作れないのではないか。私は、それについて、ずっと独りで考えてきて、まだ一度も子供と話し合ってはいない。自分では気付かずにヒントを与えてしまって、助手の方が先に、その鍵になるものを見付けてしまうのを恐れるからだ。しかしもう、他に出来そうな事も残っていない。賭けに出るべきかも知れない。

「私も君も、目をつむれば、頭の中の光りで、部屋中を満たす事が出来るのに、どうして私だけが、そこから私の影を思い浮かべられるんだろう。」と、私は、聞いた。

「あなたの影だからでしょう。」と、子供は、二つの中心をレンズのように窪ませた、北側の壁の、瓢箪を傾けたような形を見詰めながら、答えた。

「もちろん、その影も、目を開ければ何処にもないんだが。じゃあ、君の影なら？」

「私の影など、知りません。」

私は、鍵を手に入れたような気がしたが、それが何なのかは、さっぱり分からなかった。ただ、急に、子供が部屋に居るのが、ひどく鬱陶しくなった。一度として、何の役にも立っていないように思えてきた。それを察知したのか、子供は、微笑みながら、床の茄子の形の窪みに身を隠すような振りをした。子供を追い払うのに手間が掛かりそうなら、直ぐにも、私が部屋から出るべきだ。

しかし、どうやって？　私は、右の窓を見た。何時もと変わらぬ海と空が眺められ、一筋、斜めの陽が白っぽく差して、ひん曲がったちっぽけな日向を、波打つ床に這わせている。

　左の窓に目を移すと、陽が差し込んでいない。隣り合う窓なら、差し込む光りも同じ筈だ。今までも、こんな事があっただろうか。いや、陽差しは何時も一筋で、それも、右の窓からばかりだったかも知れない。それを、気に留める必要もなかった。壁と床と天井を巡っている光りを、どう操るかだけが問題だったのだから。改めて見比べると、殆ど右からだけが、窓の光りのようなものだ。私の影を延ばそうとしていたのも、専ら右の窓に向けてだったに違いなく、それなら何時も、右の窓の前に立っていたのだ。

　左の窓に近付くだけでも、踏み慣れない床の凹凸のせいで、足取りが怪しくなる。眺めも、右とは違った。半島は、横にではなく、殆ど縦に伸びて、その途切れた先端の向こうで、内海と外海が繋がっていた。二つの海は、同じように暗い色をして、半島の形を見なければ、どちらが内海か外海か分からない程だ。それよりも、雨でもないのに、窓硝子が、一面に濡れている。水を弾く様子もなく、べったりと水をこびり付かせている。その硝子に顔を近付けて、バルコニーを見下ろすと、空の青を映す鏡面に、先の尖ったくっきりとした影が、こちらから縦に延びて、そこだけ青の輝きが抜け落ちている。求めていたもの

なのか。知らずにいただけで、私の影はもう疾っくに、窓を乗り越えられるものだったのだろうか。

私は、子供を窓際に引っ張ってきて、何が見えるか尋ねた。子供は、黙って両腕を拡げて、楕円の窓枠にしがみついて腰を捻った。窓硝子が呆気なく外れ、びしょ濡れになった子供は、その硝子を抱えたまま、バルコニーへ転げ出た。冷たい風が入って来て、蝋燭の炎が吹き消されるように、右の窓からの陽差しが途絶えた。私も、直ぐに窓を跨いでバルコニーに出た。

その鏡の表面は、ヌルヌルした水をぶちまけたようになっていた。割れた硝子が、水に戻ったとも見える。子供は、転げ出た勢いで、バルコニーの向こうまで滑って行ったようだ。バルコニーは楕円形で、磨かれたレンズのように窪んでいる。滑らないように恐る恐る進むと、何時の間にか、その縁に沿って楕円を描いて、同じ所を左回りにグルグルと回るしかなくなっていた。その楕円軌道から外で出ようとしても、足が滑って巧く行かない。そして、右の掌を、壁に擦り寄せていた。

見上げると、壁から天井へと、暗く輝く銀色の球面が窄まりながら続く。そこは、屋外ではなく、楕円にぴったり継ぎ合わされた半球面ですっぽり覆われた、小さな部屋だった。バルコニーだった筈の床だけが、空を映すままに艶々と青い。その鏡面の輝きで、部屋は照らされているに違いない。銀色の側面に、

硝子の外れた楕円の窓だけが、ポツンと浮き上がるように暗い穴を開けている。私はまた、楕円軌道を巡った。楕円の床面は、少し傾いていて、その一番低い、銀色の球面との継ぎ目に、バラバラになった子供の濡れた体が、一纏まりに寄せ集められて、下の方から腐って行くようだった。その直ぐ脇を通り過ぎて、窓に近付いてみると、それは、覗き窓と言った方が良さそうな程に、縮んでしまっていた。

　両方の掌を、銀色の側面に吸盤のように張り付けて、左目でその窓を覗き込むと、雨雲が低く垂れ込める暗い海に突き出す、白い砂ばかりの半島が、奥に向かって縦に延びて行くのが、眺められた。その形は、私の体の輪郭にそっくりに見えた。それが私の影でないとしたら、砂地に延びる私の影の輪郭に沿って、砂地を切り取ったものだろう。左側が赤っぽい内海で、右側が黒っぽい外海だった。外海が荒れ始めると、その風と波の力に屈するように、半島の白い先端が、傾くように、左の赤い内海の方に曲がった。それは、ただ曲がるだけは済まず、そこで左回りの楕円を描き、段々と半島の根元の方までも巻き込んで、半島は、内海だった所に、すっかり楕円の渦の形になって収まった。

　私は、覗き窓をこじ開けて、半島の付け根に立った。後ろから、縦に長い楕円の青い光に照らされて、私の影が、半島の渦に向かって、長く延びた。私は、その影に引っ張れるように、砂地に踏み出した。影の先が、半島の形に沿

って左に曲がって、渦に巻き込まれて行く。私も、それに導かれるままに続いた。やがて、半島の先端だったその渦の中心に、吸い取られるように、影が消えると、私は、その後を追う事も戻る事も出来ず、そこに立ち尽くすだけだった。（二〇〇二年六月二十七日）

＊　　＊　　＊

爪

　真四角な部屋が横に三つ並んでいて、真ん中の部屋が、両隣より少しだけ明るかった。明るいのが嫌な私は、左右どちらかの部屋に入りたかった。右に逸れるようとすると、地面は急角度で左に傾き、私の足を左に向けた。そのまま左に向かおうとすると、地面は右に傾く。部屋が三つとも目の前に迫り、入り口を何処にも見付けられずにいる内に、私は、真ん中の部屋に入っていた。

　女が、真っ直ぐ私の方を向いて椅子に掛け、膝に両手を乗せている。私は、その直ぐ前の木の円椅子に掛けた。円椅子は、とても低く、折れた膝が斜め上を向いて、しゃがみ込むのと余り変わらない。それでも、私の膝頭と女と膝頭は大体同じ高さで、女の顔が正面に来た。なぜこの部屋は明るいのか、そして

ずっと明るい部屋に居て苦痛ではないのかを、尋ねようとすると、私が口を開くより先に、女は、私の目を覗き込むような顔付きのまま、両手を自らの顔に当て、長い爪を伸ばした指で、頬をゆっくりと引っ掻いた。爪の先は鋭く尖っているようで、赤い傷が、縦に十本、女の頬に細い筋になって引かれた。私は、已めさせようと、女の手首を切り取った。私の手の指の股は、鋏の刃のようだった。

　女の手首を両手に一つずつ持って、私は、部屋の奥に進んだ。女の陰に隠れていた小さなドアを潜ると、左右二つの部屋に入った。私の体は、二つに分かれた。どちらの私も、持っていた筈の女の手首をなくしてしまって、辺りをキョロキョロと探し回った。その内に、二つの部屋が透明な硝子の壁で隔てられていて、互いの姿が見える事に気付いた。左の部屋の私は、右の部屋の私の左の手首から先が、女のものであるのを見て取った。鳥の嘴のように曲がった、細い五本の爪も見えた。右の私も、左の私の右手に、同じように女の手首を見て取った。

　二人の私は、間にある硝子の壁に、同じように近付いた。左の私は、そこには壁などないように見えて来て、分かれてしまった私の体に、早く触れたくなった。右の私は、もう一人の私が、鏡に映る自らの姿に過ぎないように見えて来て、それを余り、側で細かい所まで見たくなかったので、急に奥の壁の方に

足を向けた。

　奥の壁こそ、間違いなく全面鏡張りだった。私は、真っ先に、左手を前に差し出した。鏡に映る左手は、女の手ではなく、私の手だった。その手が、そのまま持ち上がって、私の頬を撫でた。その頬には細い引っ掻き傷が並んでいて、その顔は、真ん中の部屋の女の顔だった。鏡が歪んでいて、その女の顔のように映ってしまうのかも知れない。微かに望みを繋いで、その場にしゃがみ込み、床に額を打ち付けた。床は、磨かれた石のようで冷たかったが、コツンと虚ろな軽い音がするだけだった。もし私の頭だったら、もっと重い音がするだろう。頭の中まで、脳みそが空っぽな、あの女のものになってしまったのか。

　一方、左の私は、ないと見えた硝子の壁に打ち当たり、その見えない壁を両手で引っ掻くと、その手は左右とも、爪を伸ばした女の手だった。まるで歯が立ちそうにないが、それでも硝子の表面を、力を込めて引っ掻き続ける内に、その硝子に押し付けたままの自らの顔を引っ掻いていた。痛くないので、気付くのが遅れた。頬だけでなく、目も鼻も耳も、顔中至る所が傷口で埋まって、ただ赤いだけで、もう顔にも見えなくなっていた。それでも、爪が磨り減って指先が丸くなり、もう引っ掻けなくなって、やっと手が止まった。その手で顔に触れると、それは粘土のようで、今度は、それを捏ねる手が止まらなくなった。そうして、顔いっぱいを使って、大きな唇を拵えていた。

その唇が、硝子の壁を吸うと、壁は、痩せ衰えるようにみるみる薄くなって、最後はシャボン玉が弾けるように消えた。左の私は、そのまま右の部屋に入り、一口に、右の私の女の頭を銜え込み、食いちぎって呑み込んだ。胴体だけの右の私は、消えた硝子の壁と反対側に後退った。そちらの壁に半開きのドアが見えたようだったので、そこに向かって飛び跳ねた。そうして、部屋の外には出られたようだったが、そのドアは、左の私の大口が、ドアを装って四角い唇の形で待ち構えていたものだった。そうして、その胴体も、私の腹に収まった。

部屋の上には、透明な硝子の三角屋根が乗っていて、その尖った天辺に、女がしがみついている。女は、部屋の外の私を見下ろして、コツコツと屋根を叩いて、私に合図を送るようだった。私は、係わりたくなくて、部屋に戻るのを已めた。女は、その叩いていた辺りに小さな穴を開け、そこから赤く丸いものを、ポツポツと落とした。私は、部屋の直ぐ外で、それらが、部屋の真ん中に積み上がってゆくのを眺めていた。顔いっぱいが大きな唇でも、ものは見えてしまう。

鏡張りの壁に映る赤く丸いものは、どう見ても林檎だった。私は、誘い込まれるように部屋に入り、山積みの林檎に近寄っていた。それはもう、私の背より高く積み上がっていて、どれか一つでも取ったら、林檎の山が、私の方に崩れ掛かってくるようで、手が出せなかった。それでも、どうしても林檎が食べ

たくなって、私は、腹を割いて、中から女の頭を取り出し、林檎の山に投げ付けた。腹からは、続いて、胴体だけの私が転げ出て、反対側の壁に打ち当たって、壁をグラグラと揺らした。林檎の山は崩れる事なく、女の頭は、林檎の山の中に埋もれた。

　壁の揺れは、屋根にも伝わった。見上げると、屋根の上の女も胴体だけで、頭のない首から、赤く丸いものが吐き出されていた。そこでは、林檎には見えなかった。揺れは収まらず、とうとう屋根の天辺が壊れて、女が、落ちてきた。胴体だけの私が、直ぐに女に飛び掛かり、頭のないもの同士は、激しく取っ組み合った。

　顔いっぱい大きな唇の私は、林檎の山にそのままかぶりつこうと、それに飛び掛かった。しかし、かぶりついたのは、上の口ではなく、割かれたままの腹で、その大きな割け口は、唇そっくりに動いた。そうして、腹で直に食うと、それらはどうやら林檎ではなく、芯まで真っ赤で、腹に収まると直ぐに溶けた。直に、腹一杯で動けなくなって、横になると、直ぐ側で、女も横になっていた。取っ組み合いは、女の負けで、体中の骨を折られて、身動きが取れないようだった。胴体だけの私は、赤く丸いものの中から、女の頭を探し出そうとするが、手が滑って全く埒が明かない。もう一人の私は、女の手をしている。爪が磨り減っていても、女の手なら、赤く丸いものを巧く扱えるのではないか。手首か

ら先を交換出来ないか。

　そのもう一人は、大きな口を開けて、女の体を呑み込もうとしていた。腹一杯で苦しかったが、女の体を呑み込めば、女の肌が、先に腹の中に詰め込まれている赤い液体を吸い取って、膨れていた腹が、却って萎むように思えた。女を呑み込むと、腹の唇が大きく開いて、赤い液体が、勢い良く飛び出た。それきり、腹の口は、綺麗に塞がり、顔いっぱい唇だった顔が、女の顔になった。手を見ると、女の手だったものが、私の手に戻っていた。それに替わって、望み通り、胴体だけの私の手が、女のものになった。その手で、赤く丸いものを引っ掻いて、山を全て崩したが、女の頭は出て来なかった。

　それは、三角屋根の天辺に突き刺さっていた。胴体だけの私は、大いに満足し、安らかな気分で、その場に横になった。逆に、女の顔の私が、心穏やかでなくなった。屋根の上で、女の頭が次に何を始めるか、気が気でない。私は、壁に何度も体当たりし、また屋根を揺すって、女の頭を振り落とそうとした。しかし、壁はビクともせず、その内に、体中の骨が折れて砕けて、肉も潰れていった。そうして、頭も胴体も手足もなくなってしまうと、その骨と肉の塊の中から、頭のない女の体が、綺麗なまま出て来た。その女の体は、部屋を出て、屋根を攀じ登り、自らの頭を取って、首の上に乗せた。その女の重みで、下の部屋はペチャンコに潰れて、屋根だけになった。屋根の中は、真っ赤になった

が、女が屋根を引っ掻く内に、また透き通っていった。その中に、頭も胴体も手足も全て揃った、私だけの私が見付かった。

　その私は、屋根の下から這い出した。女が、屋根からずり落ちていて、直ぐ脇に、俯せになっている。背中が細かく震えていたが、笑っているのか泣いているのかは分からない。屋根だけをこのままにしておく訳にはいかないので、私は、屋根の端に穴を開け、太い縄を通して引っ張った。屋根はノロノロと動いて、女の体は、その下に磨り潰されるようにして見えなくなった。

　縄を引っ張る私は、二人になっていて、互いの笑い声を聞いた。自らの笑い声は聞こえなかったが、笑っているのは、間違いない。その聞こえる笑い声よりも、もっと大きな声で笑おうとする内に、どちらも喉が破れた。その互いの喉を覗き込もうとすると、私と私は、互いの私を呑み下して、姿を消した。

　三角屋根の下から這い出した女は、爪の伸び掛けた指を、喉の奥に突っ込んで、私を吐き出した。この体を二つに裂いて、それを材料にして、そっくり同じ部屋を二つ拵え、その部屋と部屋の間に女を磨り潰して挟み込み、その上に三角屋根を乗せるのが、私の仕事だと思った。（二〇〇二年六月二十九日）

*　*　*

徽章

ひどく細長い部屋で、両側の壁は何処もかしこも波打っていた。部屋の端からは、人の姿は見えないが、壁際に張り付けば、その波打つ中に幾らでも隠れられる。その隠れている連中が、一斉に壁際から離れるだけで、部屋中、人でごった返す事にもなる。陽の差し込む向かい側の窓までは、かなり隔たっていて、行き着くまで、左右から何が飛び出すか、ずっとビクビクしていなければならないようで、そちらへ向かう気にならない。窓を乗り越えて来た憶えもないので、壁の何処かに、ドアが隠れている筈だ。いや、波打つ壁の間に身を置いた憶えもないのだから、ほんの今ドアを開けて、部屋に入ったばかりに違いない。それとも、夜の内に、ここへ来て、眠り込んでいたのか。

　後ろを振り返ると、すぐ目の前が、真四角の暗く狭い壁だった。それから、もっと暗い足元に、壁に据え付けの幅の狭いベッドがある。天井は、見上げるせいか、意外と高い。見掛けがどうあろうと、必ず壁の四角の中に、ドアはなければならない。ベッドは低すぎて、その下に穴が開いていても、出入りは出来そうにない。

　クシャクシャの毛布の上に、小さな紙が乗っている。手に取ると名刺で、目をそれに擦り付けるようにして、やっと読み取れたのは、知らない名前と肩書

きだった。住所が印刷されている所は、字が細かすぎて、そこの暗さでは無理だった。名前の左上の角が、名前に掠るくらいまで、斜めに千切れている。薄っぺらな毛布を持ち上げようとすると、手が滑って、毛布はベッドからずり落ちた。その毛布一枚の下は、板張りだった。その真ん中辺りに、小さな窪みが出来ていて、その内側が、水でも溜まっているように艶々と光っている。千切れた名刺の角は、見付からない。

　そこに、本当に水が溜まっているのかも知れない。その丸い底を指でなぞってもいいが、ただの水ではなく、指先を爛れさせる恐ろしい液体かも知れない。ポケットから、角張った小さな硬いものを抓み出し、窪みの中へ転がした。覗き込もうと顔を近付けたが、窪みの辺りは、そこに覆い被さる私の影で殆ど真っ暗になって、ただ目が慣れるのを待つしかなかった。

　左の頬に、冷たいものがそっと触れるようだった。そちらを向くと、真っ黒な目が上下に二つ、極間近で、真ん丸く見開かれていた。その目を真っ直ぐ覗き込むために、首を横に捻った。その黒い目の中に、私の瞳が映り込んで、忙しく動き回っている。じっと見詰めている筈なのに、どうしてそんなに動き回るのか。相手の目に秘密があるのかも知れないと、睫毛が交じり合うまで、目を近付けた。相手の目の底の透き通った血管の中の、血が細かく揺れるのが見て取れて、私の目は、それを追って、忙しく動き出した。

「クネクネと、川が流れてるみたいだ。」と、私は呟いた。

「蜘蛛の巣が張ってるみたいだ。」と、私を真似る調子で、相手も低く呟いた。

「君の目の底だよ。川底の小石が運ばれて行くみたいだ。」と、私は言って、ゆっくりと、相手の唇が見えるまで顔を離した。舌の先が覗いて、唇を湿した。その唇が大きく開く。

「誰も戻って来ないね。ねぇ、紅茶は？」と、少し高い声になって、黒い目が近付いて来た。

「蜘蛛の巣？　名刺なら。」と言って、私は、首を真っ直ぐにしながら、体の向きを変え、ベッドの端に腰を下ろした。相手も、反対側の端に腰を下ろし、二人の間の艶々した窪みに気付いて、恐る恐るのように、上から覗き込んだ。私は、手にしていた筈の名刺をなくした事に気付いて、「毛布なら」と、言い直した。相手は、毛布にくるまり、大きな息を、立て続けに吐いた。

　それから、長い時間が経ったに違いない。窪みだった所からは、木が生えて、天井に届き掛けていた。人の首くらいの太さの幹が一本、真っ直ぐに伸び、天井付近で急に、短く細い枝が何本か拡がり出して、若葉をびっしりと茂らせている。若葉は明るく透けていた。下からは見えないが、壁の上の方の何処かに、小さな窓が開いているに違いない。

私は、同じ所に腰を下ろしていた。その私と向き合って、真っ黒な目をクリクリさせた者が、しゃがみ込んで私を見上げている。手にした茶碗の中の薄い色の紅茶を、丸っこい唇で、時々啜る。その足元の暗い色の中に、小さな三角形の名刺の切れ端が、白く際立っている。しゃがんでいる者が、気紛れに体の向きを変えるだけで、それは、踏み付けられてしまいそうだ。

「毛布は？」と尋ねて、私は、前屈みになりながら、ゆっくりと右腕を垂らした。指先が、白い三角形に触れそうになって、右肩に痛みが走り、それきり、腕を降ろす事も、肩を上げる事も出来なくなった。三角形の真ん中に、黄色っぽい徽章らしきものが、シミのように浮いて出た。右肩の痛みは、首筋を突っ張らせて、首を回す事も出来なくなり、ただそれに目を凝らす内、ぼんやりした黄色の中から、細く青い線が細かく波打って、一度も重ならずに、中心に向かって渦を巻いているのが見えて来た。それに触れそうな指先で、その形を一通りなぞってみた。

「どうかな、蜘蛛の巣の形でもありそうな。」と、私は、呟いた。

「どうかな、川が流れているような。」と、相手は、低く抑えながらも、少し戯けた調子で言った。

私は、指先に憶えさせた形を、何度も何度もなぞって、その指の動きを、少しずつ大振りにしていった。相手も、その指の動きに目を落とし、

「向きが逆だね。」と言って、さも已めて欲しいように口を尖らせた。指の動きはずっと、外から始まって、渦の中心に向かっていた。それを、渦の中心から始めてみた。すると相手は、

「それなら、蜘蛛の巣でもありそうな。」と言って、立ち上がった。背が低くて小太りの、男のようだった。彼は、名刺を差し出した。同じ名刺だが、今度は何処も欠けていない。動けないので、私は、相手の目を見ながら唇を少しだけ開いた。その唇に名刺が宛われ、私は、更に唇を開いて、それを濡れた舌の先で受けた。甘味が感じられ、口の中に唾が湧いた。涎が垂れて、それが、私の右足の甲を濡らし、段々と足の裏の方へ伝って行くと、肩の痛みが退いてゆくようだ。前のめりの体をゆっくり起こすと、独りだった。

　木の根元が見たくなって、ベッドからずり落ちるように、床に屈み込んだ。覗き込むと、ベッドの下には何もなく、その奥には壁もなく、その向こうに、こちらより幾らか明るそうな床が見えた。木は、余所で切り出したものを持って来て、ここに置いただけか。それとも、ベッドの薄い板張りの中に、根を張るのか。幹を揺すると、葉が落ちてきた。厚味のある深い緑で、縁から色が変わり始めていた。葉だけでなく、床には、角張った黒い粒が、ポツポツと散らばっていた。私は、それらを集めて、ポケットに入れた。声が聞こえたような気がして、振り返った。相変わらず、左右の壁が波打って、向こうの窓まで続

いている。その波の谷間の何処かで、私に隠れて、紅茶を啜っているのだ。それが見付かる所までは、何が飛び出すかビクビクしなくても良さそうに思えて、私は、二、三歩踏み出した。

　また声がしたが、後ろからだった。足を止めて振り返ると、ベッドの下から顔を覗かせている。小さな体なら、ベッドの下から、壁の向こうに擦り抜けられるのだ。そこを這い出て、ベッドの上の木の根元に、水でも遣るように、茶碗の中の紅茶を垂らし始めた。その横向きの体は、小太りどころか、薄っぺらで、女のようだった。私は、口の中に名刺を入れたままであるのを思い出し、その唾だらけのふやけた紙を、口から出した。唾でインクが流れてしまったらしく、肩書きも徽章も住所も消えていて、名前だけが残っていた。その文字の形に見覚えがある。よく知っている名前だ。真っ先にそれを、真っ黒な目をクリクリさせた顔と結び付けようとしたが、結び付かなかった。その顔の持ち主は、紅茶を垂らし終わると、茶碗をベッドの上に置いて、ベッドの下を潜って、向こうへ行ってしまった。

　私は、ベッドに戻って、また、波打つ壁の方を向いて腰を下ろした。茶碗を手に取ると、それは全く別のもののように、小さかった。さっきまで、大きな紅茶茶碗に見えていたのに、誰が持つかで、こうも大きさは違って見えるものか。それでも、その空の茶碗を眺めるだけで、涎が出る。仕方なく、垂れた涎

を茶碗で受けると、その底が艶々と輝いた。そこに、ポケットの中の黒い粒を一つ落とすと、それは直ぐに芽を出した。壁が波打っているのは、その波の谷間谷間に、種を蒔くためではないか。そうでないとしても、そうしたくなった。ポケットは、種で膨らんでいる。私は、立ち上がった。暗くて、壁の向こうの窓まで見通せなかった。窓が塞がれたのか、窓の外が真っ暗になってしまったのか、何の光りも、そちらからは届かなかった。

　名刺の名前は、この木のものだろうか。それを確かめられるならと、仰向けになって、ベッドの下に、顔だけ突っ込んだ。板張りの裏側の、木の幹の底が、間近に見て取れた。殆ど真っ暗だったが、目を凝らす内、木の幹の中が、幾らか透き通っているのが、分かってきた。私の視線は、その透き通っている中を少しずつ上って行く。幹に吸い上げられる水のようだ。それが、やっと行き止まると、そこは大分明るくて、細く青い線が細かく波打ちながら、渦を巻いていた。私自体が、私の視線に導かれて、そこまで上って来ていたに違いない。渦に巻き込まれると、私は、川底の水の流れに運ばれる石のようだ。蜘蛛が巣を張ろうとしている。それで枝の先が揺れて、種が落ちた。名前は、私のものであるらしい。（二〇〇二年七月三日）

＊

＊

＊

吊り橋

　細い真っ直ぐな木のびっしり生えた暗い森の手前の、小さな港を、窓から見下ろしていた。森の影が映って、港の水面は、真っ暗だった。何度か、小さな船が、傾いた船腹を露わにしては、その影に呑まれて、消えてしまうように見えた。それを見たくないからなのか、背の低い男が、目を閉じたまま、壁伝いに窓辺に近付いて来て、向こうの部屋に来て欲しいと言う。私は、男の後を付いて、ピカピカに磨かれた板張りの廊下に出た。左側は壁だが、右側には何もなくて、幅の狭い濡れた草地と接していた。背の高い尖った草が競うように茂る先には、真っ白な空しか見えない。男は、相変わらず目を閉じたままで、壁に手を這わせている。建物を囲うように、廊下が左に折れると、そこはもう、部屋のようだった。

　部屋の真ん中には、そう太くもない白木の円い柱が一本、立っていたが、ただそれだけで、壁も天井も見えない。私は独りで、その白い柱に近付いていた。柱の周りには、横倒しになったまま動かない人の姿が散らばっていて、何か、起こらない方がいいような事が、起こってしまったようでもある。私は、人を跨いだりはせず、それとなく避けて、回り込むように柱の側まで辿り着いた。

　音がして振り返ると、直ぐ目の前に鉄格子が迫った。私は、狭い檻に閉じ込められていた。柱にばかり目が行って、そこに檻が口を開けているのに気付かずに、その中へ入ってしまったようだ。その場で体をグルグル回して辺りを見渡したが、鉄格子の扉を閉めた者の姿は見付けられなかった。ずっと遠くで、背の低い男が、物陰に隠れるようにして、私の方に小さな顔を向けている。目を開けているか閉じているかは、遠すぎて分からない。

　白い柱の陰から、その柱の太さと同じくらいに胸の薄い女が、斜めにすっと出て来て、私にナイフを差し入れた。女は直ぐまた、柱に身を隠した。私はそれを、檻の中でダラダラ飢え死にするよりは、直ぐに死を選べ、という意味に受け取った。すんなりと女の意に添ってもいいが、何か別の遣り方も探ってみたい。ただ、それを露骨に態度に表すのは、危うい。折角のナイフを、取り上げられてしまうかも知れない。ナイフは鞘に収まっていたので、先ずは刃を抜き出し、必ず女の目に届くようにと、鞘だけを柱の向こう側に放ったが、檻が狭すぎた。放った弾みで、ナイフは胸に刺さり、抜けなくなった。刺さってみて分かったが、私の胸は、鍛え上げたように硬くて分厚かった。鉄格子を捩じ曲げて、外に出た。

「胸が分厚くていられるのは、檻の中だけ」と、女が、私の耳元で囁くようだった。柱を一回りすると、女が、檻の中に入っていた。私が捩じ曲げた鉄格

子を、背の低い男が、金梃のような道具を使って元に戻している。私は、女の胸の厚さを見て取ろうとしたが、女は後ろを向いて背中を丸めてしまった。その背中も、柱の太さと同じくらいの幅しかなさそうではないか。背の低い男は、檻を直す間も、目を開けなかった。試しに、私も目を閉じてみた。

　何人かの男達の、囁き合う声が聞こえてきた。床に転がっている者達をどう始末するかを、話し合っていた。目を開けると、その声は途絶えた。私は、また目を閉じて、ナイフの刺さっている左の胸を下にして、そこにゆっくりと横になった。話しは、一人ずつ槍で突いてトドメを刺してゆく事に決まったようだが、肝腎の槍がないのだった。はっきり見た訳ではないが、槍は、港を見下ろす部屋の壁に掛かっていたようでもある。私は、目を閉じたまま、話しに加わろうと、声のする方にいざって行った。上半身だけが、急に軽くなったようで、目を開けると、逆様の私の体が、穴の底に向かっていた。その穴の底が迫って来ないなら、体は、宙吊りにされているのかも知れないが、穴の底と私の体とが、同じ速さで落ちて行くようでもある。穴は少しずつ明るくなって、穴の底に、もう一つ穴が開いているのを見付けた。私の体は、宙吊りから解き放たれたように、その穴の中の穴へ、真っ直ぐに落ちて込んで行く。閉じたくても、目は閉じなかった。

　穴の中の穴の中で、やっと目を閉じる事が出来たと思えた瞬間に、私は目を

開けていた。私は、床の上に横になっていて、胸板の厚い四人の男達に囲まれていた。目を開けて見て取った積もりの穴の中の様子は、全て、目を閉じていて見えたものだったのだ。

「槍のある部屋は何処だ？」と、一人の男が私に尋ねてきた。

「ナイフでもいいだろう。」と、別の一人が言って、私の胸のナイフを引き抜こうとした。他の者達が私の体を押さえ付けても、ナイフは抜けなかった。

「部屋に行く近道がある。」と言って、私は、目を閉じた。すると、床に穴が開いているのが見えて、私はそこを指差した。男達が、そちらに向かうと、床が抜けた。落とし穴のようだ。四人はそれでも、何とか穴の縁に手を掛けて、そこから這い出したが、私に恐れを抱いたらしく、何処かに逃げて行ってしまった。

横になったまま死んだように動かずにいた柱の周りの者達が、嬉しそうに立ち上がり、私の方に寄って来て、口々に、男達を追っ払ってくれた礼を述べた。私も何か応えたが、彼らは私の言葉など聞こえないかのように、互いの無事を喜び合った。それから、全員で力を合わせ、鉄格子を曲げて、女を檻から出した。背の低い男の姿は見えなかった。女は相変わらず細かったが、衰弱した様子もなく、全員を導くようにして、先頭に立って歩き出した。私も、一番後ろから付いていった。女は、吊り橋を渡り始めた。

「吊り橋のある部屋は初めてだ。」と、私が言うと、側の一人が、「さっきの男共が、勝手に架けたんだ。」と答えたが、「男共は、頼まれて仕事をしただけだ。」と別の者が言った。他の者達も、女に続いて、次々に揺れる吊り橋に足を踏み入れていった。残るは私だけになって、「何処までが部屋なんですか。」と尋ねながら、始めの一歩を吊り橋に乗せた。「ずっと檻だ。」と言う答えが返ってきて、吊り橋は落ちた。女だけが、渡り切っていて、橋の上の他の者達は、一人残らず、私の目の前で、深い崖の下に消えた。

　吊り橋の架かっていた先は、切り立つ断崖の側面で、上にも下にも横にも、まるで足場はなさそうだ。女はもう、何処へも動けない。そこに居たくないなら、飛び降りるしかない。その遥か下から、競い合うような獣の雄叫びが聞こえてくる。その牙や歯茎が、噛み切られた肉で汚れているのが目に浮かぶようだ。その場でダラダラ飢え死にするのは耐え難い。飛び降りて獣の餌食になるのも嫌だろう。女にこそ、ナイフが必要なのだ。そう思うと、胸のナイフは、簡単に抜けた。血も出なかった。私は、その刃の綺麗なナイフを、思い切り女に向けて投げた。しかしそれは、空中をヒラヒラと舞って、断崖の下の獣達の縄張りの中へ落ちて行った。私は、引き返すしかなかった。

　こじ開けられた小さな檻が、横倒しになっているだけで、柱は見当たらなかった。私は、その檻に腰を下ろして、目を閉じて、ゆっくりと周りを眺め回し

た。床の一ヶ所に、円い穴が開いているのが見付かった。柱の抜き取られた跡にも見える。目を閉じたままそこに近付いて、中を覗き込んだ。穴の底で、背の低い男が、卵のように体を丸めていて、気配を察したのか、顔を上げた。見開かれた目が、私を睨んで、ギラギラと光った。腕を突っ込めば、何とか首根っこを掴んで、引っ張り出せるかも知れない。しかし、男は決して、この穴を諦めないだろう。私が穴に収まるには、どれ程の労力を、男との争いに費やさなければならないだろうか。もう自分が落ちて行ける穴などないに等しいと悟って、私は目を開けて、何処へともなく走り出すしかなかった。

　結局また、落ちた吊り橋の袂に戻って来た。そこから急な崖を下って、ナイフを探す事にした。崖を下り切った所で、ナイフは直ぐに見付かったが、その側に、先程の胸板の厚い四人の男が、倒れていた。四人とも、首根っこを噛み切られている。他にも、体のあちこちが食い千切られて、赤い肉が剥き出しされていた。しゃがみ込んでそれを確かめていると、私は、唸りを上げる獣達に取り巻かれていた。いや、それは、唸り声だけは獣だが、吊り橋から落ちた連中だった。

　「ナイフを置いて行け。」と、側の一人が凄味を利かせた。

　「では、四人を殺したのは、あなた達なんですね。」と、私が言うと、囲みがグッと狭まって、彼らの臭い息を、一斉に吐き掛けられた。私は、挑むよう

に胸を張り、その胸に思い切りナイフを突き立てた。それから、俯せに倒れて、息を止め、死んだ振りをした。彼らは、屍肉を貪ったりはしない。ナイフを抜き取れない事も分かっているようで、暫く私の周りを回ってから、立ち去った。

ゆっくりと仰向けになると、遥か上で、背の低い男が、たった独りで、せっせと吊り橋を元通りに直していた。目は閉じているに違いない。私は、それきり動けなくなって、森の影に呑まれて消えた船が何処へ行くのか、考え続けた。

（二〇〇二年七月五日）

*　　　*　　　*

潮

強い風の吹く日に限って、女は、浜辺に出て行く。濁った高い波が打ち寄せる直ぐ前で、髪を逆立てて、ヴァイオリンを弾く。気分を高揚させるのに、今にも彼女を攫って行きそうな逆巻く風と波の音が必要なのか。初めは独りだったが、その内に、それを聴きに行く者達が何人か現れた。彼らは、女から少し離れた所に、身じろぎもせずに突っ立って、体を寄せ合い、黒い一塊になる。それを、私は何時も、暗い部屋の小さな窓から眺めるのだが、時々跳ね上がる

ように体を揺らす女より、その少人数の聴衆の一塊の、細かく風に震える輪郭に、目を凝らす時間の方がずっと長い。私の耳までは届かない弦の響きを、彼らの姿が伝えてくれるようでもあるからだろう。

その日に限って、その黒い塊が、グラグラと動く。余程風が強いのか、それとも、何時もとまるきり違う演奏を聴かされているのか。私は初めて、女がどんな音を出しているのか、聴いてみたくなった。外に出てみると、風だけでなく、横殴りの雨が、痛い程に頬を叩く。真っ直ぐ歩く事も出来ず、彼らの姿は、益々揺れて見えた。幾ら砂に足を取られて蹌踉めいても、見間違えてはいない。ヴァイオリンを弾く女は、二人居た。何時もの若い女と、その女の倍くらいの歳の女が、向き合って合奏している。

風は回っているのだが、私が近付いた時には、聴衆の塊は、女達の風上だった。私は、独り離れて風下に立った。風下の方が、真っ直ぐ風に飛ばされて来る弦の音を、巧く耳に拾えるように思えた。風と波の音が凄い。掌を耳に当てて、風の音だけ避けようとした。二人の女の動きはバラバラで、それぞれが別のパートを弾くらしい。弦の音がギシギシと尖って、途切れがちに鳴るのは聞こえるが、音楽としては聴こえて来ない。

私は、一番聞き取り易い所を見付けようと、二人の周りを一回りしようとした。すると、一人増えている。三人とも同じくらいの歳に見える。倍くらいの

歳の女が、その歳を等しく分けて、二人の若い女になったのか。三人が内向きの三角形を作ってしまうと、何処に立っても、一番側の者の音しか聞こえない。私は、しゃがみ込んで、何とか三角形の内側に入り込んだ。頭の直ぐ上で、三つのヴァイオリンと弓と女の細い腕が、殆ど触れ合わんばかりに跳ね踊るようで、立ち上がる事は出来ない。風の音は低く籠もったが、その分、海全体を轟かせるような波の音が、砂地を伝って、体の中まで響いて来る。弦の音は、その波の響きに丸く削られたように、揃って遠ざかるしかない。

　無理な姿勢で見上げると、後から加わった二人の楽器がおかしい。縦に真っ二つにしたものを、片方ずつ顎に挟んでいる。巧く角度を付けて、ちゃんとしたものに見せ掛けていただけだ。下から覗き上げれば、丸見えだ。一人の女が、自分の歳を二つに分けて若い二人になるくらいの事なら、ありそうにも思えるが、古い楽器を割って、二つの新しい楽器になど出来る筈もない。私は、二人の間に割り込んで立ち上がり、

「ヴァイオリンは、幾つあるんですか？」と尋ねた。片方の女に顔を向けると、彼女は、私をきつく睨み付け、私に半欠けの楽器を押し付け、そっぽを向いて三角形の外に出て、風の中に紛れた。替わりに、私がその一角を占めて、もう片方の女の方を向くと、私とその女は一つになって、その二人合わせた一人が、片方一丁の何処も欠けていないヴァイオリンを、一つの顎に挟んでいた。鏡

を見て確かめた訳ではないが、二人分の歳が、重ね合わされたに違いない。私には音楽の心得はなかったが、そこは、私と一つになった女に任せておけば良さそうだった。その新しい私と、初めの女の二人は、向き合って、暫く演奏を続けた。二人同じパートを弾いているのが、はっきり聞き取れた。

　二人は、同時に手を止めた。私には、まだ曲の途中のような気がした。女が、海の方を振り返ると、荒波の中に小舟が浮かんでいて、私達の聴衆が、恐らくは一人残らず、乗り込んでいるらしかった。舳先には、三角形から出て行った女の姿も見えた。舟の中はいっぱいで、何時ひっくり返ってもおかしくない。それはもう、潮に乗るまでに沖に出ていて、左へ左へ流されて行く。私達は、波打ち際に沿って、後を追った。

「まだ曲の途中ですよね。」と、私が言うと、女は何かを思い出したような顔をして、いきなり海に身を投げた。咄嗟に、私は、その足首を掴んで引き戻そうとしたが、私も波に呑まれた。女と私は、一息の内に沖まで運ばれ、小舟の側まで近付いた。舳先の女が、浮き輪を一つ投げた。女と私は、二人して、その浮き輪を腋に抱え込み、息を合わせて、最終楽章を弾き始めた。息を合わせた筈だったが、女はスラスラと弾いてゆくのに、私は、トチってばかりで、段々と遅れていった。女だけが最後まで弾き終わると、女の腋から浮き輪がスルリと外れて、女は波に呑まれて消えた。女の音がなくなると、私は私のペー

スで弾けたので、トチる事はなくなり、その私の演奏に耳を澄ますかのように、海はゆっくりと鎮まっていった。

　その演奏が、なかなか最後まで辿り着けない。曲は未完成だったかも知れない。だから終われないのか。水の上を響き渡る弦の音のせいか、海はすっかり鎮まっても、それだけでは済まず、更に鏡のようにツルツルに磨かれて、その上を歩く事さえ出来そうだ。何時までも、浮き輪など抱えたままだからダメなのか。浮き輪を放すと、途端に溺れて、伸びてきた白い腕に慌てて掴まるしかなかった。演奏を中断して、何とか小舟に這い上がると、三角形から出て行った女だけだった。聴衆は皆、荒海に投げ出されて、それっきりなのだ。女は、水平線の上に辛うじて乗っている、薄っぺらな浜辺を指差した。見える陸地はそこだけだ。私は、疲れた体で、ヴァイオリンを櫂の替わりにして、漕ぎ出した。高い陽が、海面を輝かす。女は、大きく息を吐いて、横になった。岸に辿り着くと、男が待っていて、

「昨日の晩は凄かった。もうちょっとで、屋根が飛ばされるところだった。」

と言った。私は舟から上がったが、女は寝たきりだった。男は、その女の頬に手を当てて、私の方を振り向いて、

「どうして戻って来たんだ。櫂をよこせ。」と言った。私は、ヴァイオリンを渡した。男は、舟に乗り込んで漕ぎ出した。私は、迷ったが、曲を最後まで

弾いておかなければ、海は永久に鏡のようなままであるように思えて、水に入って、直ぐに舟に追い付いた。女の体は、すっかり冷たくなっていた。男は漕ぐのが下手で、どうしようもなかったので、私が代わった。そしてまた、浜辺が水平線ギリギリに遠ざかった。

「ここでいい。その内また、潮が流れるだろう。」と、男が言った。いや、私が曲を弾き終えなければ、潮は流れないのだ。早速始めたが、弦は水を吸ってブヨブヨで、弓を擦るのさえままならない。

「もうここでいいんだ。早くしよう。」と言って、男は、水に飛び込んだ。鏡の上に、切り取られて置かれたように、首だけが出た。「泳げない」と私が言うと、「足が着く」と男は言った。続きは、陸に上がってからでもいいと思って、私は、楽器を濡らさないように万歳をして、水に入った。男は、浜辺の方に向かって歩き出し、私は後に続いた。気紛れに少し横に逸れると、そこは急な深みで、危うく溺れそうになった。鏡の下には、一本の細い道が通っていて、足が着くのはそこだけで、そこを踏み外したら、海の藻屑と消えた女と聴衆の後を追うしかないのだ。男には、その鏡の下が見通せるのだろうか。私は、慎重に、男の直ぐ後ろを付いて歩いた。

　その道の幅が、どんどん狭くなっている。何度も、滑り落ちそうになって、その縁で辛うじて踏ん張った。その内に、殆ど綱渡りしているのと同じになり、

更には、上を向いた刃物の上を歩くのと同じになった。浜辺はまだ、水平線の上に、薄っぺらなままだ。私は、裸足だった。足の裏の皮膚など、もうすっかり切り裂かれて、跡形もないだろう。堪らず私は、男を呼び止めた。男は、振り返りざま、

「何だ、裸足だったのか。俺なんか、鉄の靴だぞ。」と言って、その場で、その足の下の刃をカチカチと鳴らして、タップダンスのような事をやり出した。その震動が伝って、私の足の裏は、ズキズキと痛んだ。何もしないよりはマシだと思って、私は、頭の上でヴァイオリンを弾き始めた。音は鳴って、男は蹌踉けた。咄嗟に、弓を持ったままの手を差し出すと、男は、倒れながら私の手首を掴んだが、男の手首を掴み返したのは、私と一つになっている女だけだった。女はそこで、私と分かれて、男と手を繋いだまま、二人一緒に、深みに沈んでいった。また半分の歳になって、私だけに戻った私は、後にも先にも進めなくなったが、男が刃を潰していってくれた辺りに乗っていれば、それ以上、足の裏の肉が切り裂かれる事はない。半欠けのヴァイオリンをどうしたらいいかは、何時まで経っても分からなかった。（二〇〇二年七月九日）

＊

＊

＊

足跡

　一面泥ばかりで、草一本生えていない真四角な庭を、底の厚い靴を履いて横切ろうとしていた。私は、人ではない。いや、幾らかは人かも知れないが、人でないものの血が大分混じっている。そうでなければ、こんな所に来ていない。

　建物の石の壁の奥から、女達の笑い声が聞こえてくるが、ドアも窓もない。見上げると壁も真四角だった。空の鈍い光りは、ただ真下に向かって流れ落ちるようで、泥の表面を少しは輝かせても、石の表面は暗く沈ませて、ただ四角い暗がりが聳り立つ。倒れてくれれば、真四角な庭の泥の上に、ぴったり嵌まり込むに違いない。壁の脇を抜けて、向こうへ回り込めるかも知れないが、そんな事をして女達の目に留まれば、動く泥の塊か、泥塗れのケダモノにでも見られて、気味悪がられるだけだろう。立ち止まると泥に足を取られるので、私は、四角い中を円く歩き回った。

　男が二人、やって来た。彼らも壁を見上げて庭の真ん中で立ち尽くしたが、膝まで埋まった足を抜くと、二人ぴったりくっついて、庭の縁に沿って、狭い歩幅でノロノロと歩き続けた。どうしてそんな風に縁ばかり歩くのか気になって、出来ればそれを、側に近付いてこっそり尋ねたかった。しかし私も彼らも、決まった軌道を、決まった方向に、決まった速さで歩くしかないので、なかな

か近付けない。少し背の高い方だけが、壁の向かい側で止まった。小刻みに足踏みをして、泥に埋まるのを最小限に留める積もりらしい。私は、軌道を半周して、彼に近付いた。するとそちらにも、そっくり同じ、暗い真四角の石の壁があるのが分かった。男は、私に背を向けてその壁に張り付き、片方の耳を壁に押し付けていた。私は、もう片方の耳に息が掛かるくらいまで近付いて、

「私にも、壁の見付け方を教えて下さい。」と囁いたが、庭の縁に沿って四角く歩くだけだと、直ぐに自ら答えを出した。それから、男の頭の直ぐ脇の壁に、手を触れた。指先に細かな震動が伝わって、壁の向こうで音が鳴っているのが分かった。その手を直ぐに引っ込めたが、もう指先の皮が剥がれている。もう片方の手で、男の背中に触れると、そこも同じように震えている。その震えが已まない限り、男の体は、壁から剥がせないに違いない。庭の縁に沿って歩けば、男と同じ目に遭うしかないだろう。

　男の顔が見える側に回り込み、真っ赤に充血した男の目を覗き込む内に、私の肩は、壁に触れていた。震動は少しも感じられなかったが、念のため肩に手を置いてみると、まるで電気が走っているようだ。どうしたらいいか、男に尋ねようとしても、開き掛ける唇が震えるだけだった。私は、肩を壁に擦り付けたまま、少しずつ後退って、男から離れた。そして、ほぼ真横から、その四角い壁の全体を見上げられる所まで来た。それなら私は、何とか壁から離れられ

たのだ。私は、ちょうど庭の角にいる。更にその後ろに何があるか振り返ろうとすると、そこにもう一面の壁があるにはあって、ただその壁が、どのようにか捩れて、私は、壁の向こうへ攫われて行くようだった。

　それから私は、後ろに投げ落とされたようで、尻餅を搗いていた。庭の角より少し外から、真四角な泥の平面を、斜めに隅々まで見渡していた。後ろから、女達の話し声が聞こえる。庭に面した女の居る部屋の端っこで、私は、庭を眺めているに違いない。取り止めのない話しのようで、私はまだ、女達に気付かれていないようだが、人でないかも知れない自らの姿がどのようであるか、確かめるまでは、迂闊に振り向くべきではない。

　庭の色は真っ青で、男二人の姿はない。彼らも、どのようにか壁を擦り抜けて、その奥の部屋に転げ込んだか。庭の隅に、赤っぽい厚底の靴が脱げて、泥に埋もれ掛けている。それなら、私は素足なのだ。それは、人の足の形をしていない筈だ。靴の底を厚く見せ掛けた中に、足は、ややこしく折り畳まれていた。私は、そっと尻を上げ、出来る限り体を小さく丸めた。

　部屋の壁全体が、ほぼ真横に見上げられた。薄暗くて、何の飾り気もなく、家具も寄せられていない。やはり真四角で、石で出来ているようだ。窓どころか、小さな穴一つてない。それならどうして、庭が見晴らせるのか。壁は、幾らかでも、透き通っているのか。そうして壁を見回す内に、私の直ぐ側に、拳大

の石英の塊が少しだけ浮き出ているのが、目に留まった。見ようによっては、耳朶の形をしているようでもある。それに手を触れると、私の体は、全身が細かく震え出し、遂にはジリジリと焼け焦げて、消えてなくなるようだった。庭の眺めは、壁ですっかり塞がれた。

　ぴったり体を寄せ合った二人の男が、そこにしゃがみ込み、こめかみとこめかみをグリグリ擦り合わせて、直ぐ目の前の壁の中の石英の塊を、見詰めている。まだ私がそこに居られたなら、私は、その男二人の目の中に映り込むだろう。二人は更に、額を壁に擦り付け、剥き出した目の玉を、石英の表面に擦り付けんばかりにした。それから、後ろの女の声に促されて立ち上がり、今度は、互いの目の中を覗き込んだ。そのように、目と目が見交わされている限り、私は、それに挟まれた狭い中に居るようだった。

　男二人は、ぴったりくっついて、目と目を見交わすまま、部屋の真ん中の円テーブルに着いた。しゃがみ込んだ痩せた女が、両手の指の爪を立てて、壁から石英の塊を引き剥がし、それを持ってきて、円テーブルの上に置いた。その女が席に着いて、席は全て埋まった。男二人の他は、全て女だった。ずっと瞬き一つしない二人の男の目から涙が零れて、テーブルの上に何粒か落ちた。男達から三、四人隔たった一人の女が、腕を伸ばして、その涙を指で掬い取っては、石英の表面になすり付けた。その女が、私に違いなかった。涙は、石の表

面の小さな窪みの上に、一纏まりに真ん丸く固まってから、刳り抜かれた目玉が萎むように、蒸発した。
「この石の形は、何かに似てますね。」と、私は言った。他の女達が一斉に笑った。私が、庭で、壁の奥に聞いた笑い声と同じものだった。
「何でしょうね。よく分かるように、壁に描き写して下さいな。」と、一人の女が高い声を張り上げると、男二人が、石英の塊を手に取って立ち上がり、その場でそれを奪い合った。石が二つに割れて、テーブルの上に転がると、誰かが、それを素速く手に取って隠した。男二人は、目を大きく見開いて、暫くテーブルの上を見詰めていたが、素手のまま、黙って壁に向かった。
「どうすると思いますか。」と言って、私の隣の女が、手の中の二つに石を、私に見せた。私は、それを奪い取って、立ち上がった。女達の目が私に集まり、私は、自らの姿を不用意に晒してしまったのを悔いた。切れ味の良さそうな石英を手にしているのが、せめてもの救いだ。私は、片手に一つずつそれを持って、手当たり次第に、石の先で、女達の目を突こうとした。外す方がずっと多かったが、それでも何回かは、女の目を突けたのではないか。それでも女達は、私の攻撃を避けながら、嬉しくて仕方ないように、笑い続けた。私は、笑い声のかまびすしさに耐えられなくなって席を立ち、飛ぶように壁の方に走った。
壁は、真ん中に縦に大きな裂け目が出来ていて、男二人が、そこから庭に出

て行った。彼らは、庭の泥の上に私が付けた円い足跡を、調べ始めた。部屋からでも、その足跡が、人のものでないのが分かった。靴は、私が庭から部屋に転げ込んだ時に脱げたのではなく、庭に足を踏み入れて直ぐに、もう脱げていて、私はずっと、素足で庭を歩き回っていたのだ。その足跡を、テーブルの女達に見られたくなかったので、私は、大の字になって裂け目の前に立ち塞がってから、男達に向かって、

「何に似てると思いますか。」と、大声を張り上げた。男達は、二人揃って、私の方を向いた。

「今、言おうとしてたところだ。ただの円じゃない。南極大陸にでも似てないか。」と、少し背の高い方が言ったが、

「いや、ただ円いだけだ。」と、もう一人が言って、背の高い方を殴り倒して、泥の中に沈めた。

「南極ですよ。」と言って、私は、女達の方を振り返った。女達は、テーブルの側には居たが、皆立ち上がっていた。笑う者は一人もなかった。私は、テーブルに走って、両手の尖った石英で、テーブルの上を削って、そこに南極の地図を描こうとした。女達は、入れ替わりに、テーブルから身を遠ざけた。地図は直ぐに仕上がり、その出来映えには惚れ惚れした。それから私は、部屋中見回して女達を探したが、見当たらなかった。

　女達は、一人残らず庭へ出て、勝ち残った一人の男を、コロコロ転がして、泥塗れにして弄んでいた。庭を響き渡る笑い声が、壁の裂け目の中の空気を、鋭く震わせて、硝子を、何人かで一斉に爪で擦るような音を鳴らした。私はまた、裂け目へと飛ぶように走り、石英を持った両手を振り回して、その嫌な音を細切れにしようとした。しかし逆に、裂け目の中にびっしり詰まったその音に弾き返されて、二つの石は、尖った先が欠け、みるみる磨り減って、手の中から消えて行った。裂け目は、その音によって塞がれたも同じで、部屋は、凍るように冷えていった。人でないなら、私は何なのか。人としての声を突き破るまでに、思い切り叫んだ。それが鳥のようなら私は鳥だし、何かの獣のようなら、私はその獣だろう。立て続けに叫んでも、それらは悉く、私の耳に届く前に、裂け目の鳴らす尖った音に砕かれて、掻き消されるばかりだった。（二○○二年七月十三日）

*　　　*　　　*

香水

　長い梯子を登ってきたと思ったが、見下ろすと、舗装された汚れた地面は、

直ぐ下に見えた。そこで、女は、目をつむって、数を幾つか数えてから、また目を開けて見下ろした。梯子がずっと下まで続いて、地面などは、幾重もの風の色に遮られて、遥か下の方に沈んでまるで見えなかった。梯子を登りきると、そこは、大分前に舗装された切りのような汚れた地面が、四角く切り取られていて、周りには何もない。見下ろしながら、縁に沿って一回りしたが、何の色も形も見て取れなかった。梯子もなくなっていて、どちらから登ってきたかも、キョロキョロしている内に、分からなくなってしまった。そんな事はもう分からなくていいのだと思って、女は、目をつむって、両腕を水平に伸ばし、その場でクルクルと回った。

　目が回ったりはしない代わりに、脚がひどく重くなって、立っていられなくなった。しゃがみ込んで目を開けると、足の下の四角い狭い地面だけが、自分を中心に、大きな独楽のように回っている。もう四角かどうかも分からない。円いかも知れない。女は、着ている服の胸の辺りを乱暴に裂いて、その回る地面に投げた。布切れは、女と同じで、地面と一緒には回らなかった。腕を伸ばしてそれを拾おうとすると、しゃがんだまますっかり固まってしまった女の体は、ゆっくりと傾いて倒れた。

　女の体は、回る地面の外へ弾き出された。回る地面の隣は、また回る地面で、女は、その真ん中辺りに倒れ込んでいた。上体だけ起こして、じっとその表面

を見詰めると、暗い水の底を覗いているように見えて来て、地面はゆるゆると止まった。四隅の角が取れて、丸みを帯びてはいたが、まだ四角くは見えた。その四隅に、裸の男が一人ずつ立っている。四人とも、小柄で、贅肉のない筋肉質の体付きで、女に対して横を向いている。女にはそれが、今にも女の方を向きそうに見えた。それを已めさせようと、或いは、それへの備えとして、女は、手に掴んでいる布切れを、口いっぱいに含んで、歯を食い縛った。甲斐あって、四人の体はどれもピタリと止まって見えた。

口の中に、香水の匂いが溢れた。女は、顔を上に向け、布切れを含んだままの口を、裂けそうな程に大きく開けて、立て続けに激しく息を吐いた。香水の匂いが、地面の上を覆うまでに撒き散らされると、四人の男は、真っ直ぐ女の方を向き、目を丸くして女をジッと見詰め、一歩地面の中に踏み込んだが、それきり動けなくなった。それから、その体は、段々と萎れて、地面の外側へ滑り落ちて見えなくなった。

女は、口の中に手を突っ込んで、布切れを取り出そうとした。それは、喉の奥まで入り込んで、そこに張り付いているようだった。力を込めて引っ張ると、布は出て来たが、なかなか途切れなかった。最後に喉の奥が裏返るような感じがして、やっと全部吐き出せた。布切れは、一本の赤っぽい帯になっていた。その片方の端を、左腕にしっかりと縛り付け、もう片方の端を地面の外に放った。

女は踏ん張ったが、帯の引っ張る力に勝てずに、地面の外に放り出された。
　その転がり込んだ所がまた、角の取れた四角い地面だったが、その中心には、ピクピクと動く穴があって、女が放った帯を、きつく銜え込んでいるようだった。帯は更に、ジリジリと穴の中に取り込まれてゆく。縛った左腕の結び目は、締まり過ぎて解けそうにない。仕舞いには、女の体もその穴の餌食になってしまう。女は、帯を引っ張りながら、地面をグルグルと走り回り、遠心力で穴の力に対抗した。力が釣り合って、形勢はどちらへも傾かない。遂に、穴の側で、帯が捩切れると、女の体はまた、地面の外へ飛び出た。
　今度は、地面の上でなく、女の体は、一塊りになった四人の男の、下から突き上げられる腕で、受け止められた。それから、男達の指が、先を争うように女の口の中に入り込んできた。そうして、女の喉の奥まで覗き込んだが、何も見付けられないまま、手を口から放した。その隙に、女が、着ている服の腹の辺りを裂いて口に含み、歯を食い縛ると、さっきよりずっと強い香水の匂いが、直ぐに辺りに漂った。男達は、女を放り投げた。
　そこは、すっかり円くなった地面だった。布切れを取り出そうと、口の中に手を突っ込むと、女は、急に咳き込んで、手足を波打たせて転げ回るしかなかった。咳をする度に、切れ切れの布切れが、口の中から次々に飛び出し、辺りは、布切れだらけになった。やっと咳が収まると、四人の男が、その積み重な

った布切れを拾い集めながら、女の周りを歩き回った。男達は、それを拾っては、裸の肌の上に張り付けて行く。布切れはネバネバしていて、一度肌にくっつければ剥がれない。四人はそれで、全身を覆い、一塊りになって談合を始めた。

「女一人に、男四人じゃ釣り合いが取れん。」「じゃ、お前が女になれ。」「女二に、男三か。それでも釣り合ってないぞ。」「女三に、男二ならどうだ。」「いっそ、全員女か。」「それでどうなる？」結局、女一、男四のままで落ち着くようだったが、女にはその様子が、布切れの塊が、互いに凭れ合って、口を利いているように見えた。首根っこを一つ掴まえて引っ張ると、その首から肩にかけて、ビリリと音を立てて、大きく斜めに破れた。破れた中には、肉も骨もなく、布切れだけが詰まっている。次のもその次のも、簡単に破れて、中は布切れだった。そうして、四つ目に目を遣ると、それは小さな裸の男で、丸く見開いた目で、女を睨み付けている。女は、左腕に縛り付けたままの帯を、鞭のように振るった。男は、円い地面から飛び降りた。

　走り寄って見下ろすと、少し低い所に、そっくり同じような円い地面があり、筋張った筋肉を体中に浮き立たせた男が、女を見上げて立っている。梯子がなければ下りられない。それで女は、布切れの塊を解いては繋いで、縄梯子のようなものを拵えたが、地面の何処にも、それを括り付ける所がない。男の居る

地面は少しずつ沈んで行き、男が、恨めそうな顔で見上げる。女は焦って、拳で地面を叩いて回った。何処かに裂け目が出来れば、そこに縄梯子の端を押し詰める積もりが、ただ握り拳がボロボロになっていくだけか。そうしている内に、縄梯子の筈が、また元のバラバラな布切れに戻って、それが辺り一面に散らばっていた。特に、地面の真ん中に、山になって積み上がっていて、どうにも目障りで、女は、それを蹴飛ばした。

円い地面は、そこから真っ二つに裂け、女は、裂け目の中に転げ落ちたが、そこにもまた円い地面があった。ただ、両腕を伸ばせば端から端まで届きそうな程に狭い。上から、次々に布切れが落ちてきた。そこに埋もれてしまうようで恐くなって、女は、片っ端から布を口に入れて、呑み込んでいった。腹が膨れて動けなくなると、その腹を膝で蹴り上げては凹ませて、またそこに布を詰め込んだ。

「回れよ。」と高い所から、一人の男の声がした。

女は回った。布を吐きながら、体が少しずつ浮き上がる。見下ろすと、狭かった地面が、どんどんと広くなりながらも、下へ遠ざかって行く。その地面に向かって、裸の男が飛び降りた。その姿も、みるみる遠ざかり、直ぐに豆粒程になった。女が回るのを已めると、女の体も、男の後を追うように落ちて行く。しかし、幾ら落ちても、却って、地面は遠ざかるようだ。やがて地面は、男の

姿を吸い込んで、小さくなって見失われた。女の体は、何処へ落ちて行く事も出来なくなった。
　見上げると、直ぐ手の届く所に梯子がある。布を吐きながら、その梯子を登り切ると、四角い地面の真ん中で、しゃがみ込んだ三人の男が、額を突き合わせて、足元の何かを覗き込んでいるようだ。女も、男の肩越しにそれを覗き込もうとするが、どちらに回り込んでも、男の裸の肩が邪魔だった。その肩に手を触れると、女は、自分の体が、指先に至るまで、布切れだけで出来ているのを見て取った。その布切れの塊である自分を、男達にビリビリに引き裂いて欲しい。女は、男達の肩の上にのし掛かって、それをねだったが、男達はびくともしなかった。仕方なく自分で引き裂こうとすると、男達に取り押さえられた。
「お前は、布切れじゃない。」
「じゃあ、何？」
「口答えするな。」と、声こそ威勢が良かったが、男達の表情は歪んでいた。
男達は、四角い地面の真ん中に開いた穴の中に、次々に転げ落ちた。二人目まては、すんなり穴の中に埋まり込んだが、三人目は、そうも行かなかった。その男は、女を振り返り、
　「お前のせいだ。踏め。」と、声を震わせて、手足を穴の中に無理に突っ込んで、背中を丸めた。女は、その背中を何度も踏み付け、穴など開いていなか

ったように、そこを真っ平らにした。

　荒い息が収まらない。胸と腹に大きな穴が開いている。吸っても吸っても息が吐けず、それで息は荒いままなのか。胸と腹の穴から、吸った息がスースーと漏れて、辺りに強い匂いが立ち込めた。それでもそれは、まだ何とか香水の匂いのようではあった。多分その匂いに耐えられずに、穴に押し詰められたままの男達が、平らに均された下で、激しく身震いしているようだった。地面の真ん中が爆ぜて、男達が飛び出した。女は、左腕に結び付けた帯をまた鞭のように振るって、男達を、四角い地面から飛び降りさせた。

　男達の埋まっていた穴を覗き込むと、底に少しだけ水が溜まっている。女は、腕を差し延べて、その水を掬っては飲み続けた。それで、胸と腹の穴は大体塞がったが、そこから染み出る水が止まらない。ただ、殆ど滴り落ちる事はなく、そこからまた女の体に染み込んだ。その水浸しの重い体なら、ずっと下の地面まで、落ちて行けそうだ。男達が飛んだ辺りの地面の縁から、女は身を投げた。宙に舞った体は仰向けになり、いっぱいに開いた口から水が激しく吐き出された。それは、真上に向かって、真っ直ぐな細い棒のようになって噴き上がった。それを見上げながら、女は、落ちて行くのは自分ではないのではないか、と思った。（二〇〇二年七月十七日）

*　*　*

組み紐

　喉は渇いてなかったが、水の味を舌で転がして、その香りを鼻いっぱいに吸い上げたくて、コップを手に取ろうとした。細く白い腕の伸びてゆく先に、水の入った硝子のコップは見えたが、手が届き掛けたところで、それは見えなくなって、代わりに、真四角に切り取られた青い空が見上げられた。女は、天井も屋根もない狭い部屋に仰向けに寝ていた。額に垂れ掛かってくる赤い組み紐を、払い除けると、四角い空は、呆気なく塞がった。低い天井は、そっと薄い紙でも乗せたように、静かで軽そうだった。女は、もう一度空を見たくなって、手探りで組み紐を掴もうとした。

　何か、別のものに触れたようだ。首を反らしてそちらを見ると、ただ白い壁があるだけだが、その上を這い回っている自分の手が、別の生き物のように見えた。その自分の手の動く感じが、別の何かに触れているようだったのか。女は、そのままで、部屋の壁をぐるりと見渡した。仰け反って、半分逆様に見ているせいか、どの壁も歪で、しかも四面の内の一面が欠けて、三面しかないようではないか。部屋が三角である筈もないと思って、もう一面の壁が隠れてい

そうな方に、首を起こした。

　そこに壁はなかったが、その左右の壁が傾き掛かる間に、何かがあるようだった。上体を起こすと、部屋一杯がベッドで占められているのが分かった。そこから降りるには、その何かある方に行くしかない。身を乗り出すと、いきなりベッドが傾いたかのように、女の体は、そちらに向かって滑った。

　そうして、どうやら左右の壁の間に挟まってみると、そこには、歪な隙間しかなさそうだ。歪なので、何かがあるように見えてしまっただけだ。ただ、自分がどんな恰好でいるのかが、まるで見えて来ない。頭に血が上るようでもないので、逆立ちはしていないだろう、くらいの事しか分からない。腕を伸ばそうとしてみるが、却って縮めているのかも知れない。声を上げてみるが、それまでずっと声を出していて、却ってその口を閉じたのかも知れない。何もせずに、ジッと動かず、ただ周りに神経を集中させると、無闇にジタバタしているばかりのようでもあった。

　それでも、耳を澄ましてみると、間違いなく耳を澄ましていた。いや、ずっと耳を澄ましたままだったらしい。耳を塞ごうにも、塞ぎようがない。そうして耳を澄ましていて、一体、何が聞き取れただろう。何も聞き取れなかったばかりに、こうして、歪な壁の隙間に挟まってしまったのではないか。

　そこから部屋の方を振り返ろうとして、体の向きを変えるような変えないよ

うな事をしている内に、いきなり真四角の青空が見えた。そのように切り取られた中に押し詰められると、空が青い事は、ひどく間違っているように思える。空が青いばかりに、何処かで、失われてはならないものが、次から次に失われているのではないか。そうして失われたものが、おしなべて粉々に砕かれ、砂が流れ込むようにして、女を取り囲んでゆくようだった。それを止めるには、空の色を変えるしかない。それには、その切り取られた真四角を、捩るか捻るかして、その中から青を絞り出すしかない。そして、ちょうどそれが出来る所に、今、自分は居るのではないか。コップに手が届いた。

　コップの中は、真っ白で、溢れんばかりだった。それは、粉のようでも、水のようでも、水と粉を混ぜたもののようでもある。その表面に、青い粒がポツンと一つ乗っているかのように、真四角な空が、小さく映り込んでいる。その小さな青は、細かく震えていて、そこから、ものが擦れ合うような音が聞き取れる。それは、本当に青い粒なのかも知れない。そして、その音さえ聞いていれば、もう意味もなく耳を澄ましていなくても良さそうだ。そう思うと、それまでずっと、耳の中に流れ込んでいた無数の音が、爆ぜるように一斉に辺りに溢れ返った。凭れ合っているだけのような歪な壁は、グラグラと揺れて、ひっくり返りそうだ。掴まる事が出来るのは、コップだけで、女は、しっかりとそれを握った。そのコップが、握り潰されて砕けたようで、中のものが飛び散り、

女の体も弾き飛ばされて、目の前は真っ白になった。
その白かったのは、ほんの一瞬で、周りは直ぐに真っ青になった。それでも、初めにコップの中に見付けた青い粒のようなものだけは、しっかりと見て取れて、女は、それを抓み取ろうと腕を伸ばした。その自らの白い腕の細さに目を奪われて、その青の欠片は見失われてしまったが、その手は、コップを掴み直していた。握り潰してはいなくて、どうやら、手が滑っただけのようだ。コップの中には、透き通った水が、半分くらい入っている。覗き込むと、コップの底を通して、青い粒が浮き立って見えた。一つだけではなくて、浮き立つ青い粒で、何処もかもが埋まっているようだ。どれも細かく震えていて、互いに擦れ合う音が聞こえて来そうだったが、幾ら耳を澄ましても、音は聞こえなかった。
そして、それらは皆、同じ方向にゆっくりと流れて行く。そちらを見ると、そこは壁と壁の隙間で、隙間いっぱいに、大きな耳の形をしたものが、挟み込まれているようにも見える。擦れ合う音は、全て、その耳の形の中に吸い取られてゆくのかも知れない。女は、自分の耳がなくなって、そこがすっかりツルツルになっているような気がして、慌てて、耳に手を当てた。左右とも、耳朶も耳の穴も、まだちゃんとあった。それでも、何となく安心出来ず、暫く、耳朶と耳の穴を、指で丹念に撫で回した。

　少しだけ、喉が渇いたようだ。コップは何処に置いたのか。探したが見当たらない。耳から手を離すと、女は、手にしたコップを覗いていた。その中にはしかし、水もコップの底も見えて来ない。コップの縁だけは、くっきりと見えたので、ぐるりと一回りそこを見詰め直してから、改めて、その中に、目を凝らした。自分がその中を覗いているのではなくて、コップの中に居る自分が、覗き込まれているのなら、全てが、その通りに見えて来るようだ。見上げると、青い空が、円く切り取られている。その青の縁を、コップの透明な縁が、綺麗に取り囲んでいて、静かに見開かれた目の縁が、ぐるりと涙で濡れて輝いているようではないか。

　女は、その縁に唇を当てて、空の青ごと傾けた。水の味は、ひどく苦かった。

　吐き出した筈が、飲み込んでいた。吐いたのなら、自分の胃の中に向かって吐いてしまったようだ。女は、舌で唇を撫で回しながら、ピチャピチャと音を立てた。しかしその音も、どうやら女の耳には届かない。音は、空っぽのコップの中にでも吸い取られてしまうのか。掲げたコップの裏側から空を見上げた。硝子に閉ざされた小さな青が、ユラユラと揺れる。コップを少し傾けると、青は、耳の形にもなった。空いている方の手で、慌てて、耳朶を抓もうとした。左右とも、耳の穴まですっかりなくなっていて、ただツルツルなだけだった。その失われた耳はもう、コップの裏側の中の、小さな空の果てにしか見付から

ないようで、女は暫く、コップの裏側に目を押し当てて、そのツルツルした青を、奥へ奥へと目で追った。

　その内に、胃の中の水は、胃の壁を溶かして、女の体の中へ流れ込むようだ。それは、更に皮膚を破って、何処か思い掛けない所から噴き出してしまうかも知れない。女は、ゆっくりと、ベッドに横になった。その方が、水を全身に行き渡らせる事が出来そうだ。水は、じわじわとシーツにまで染みて出て、女の周りを暗い色に沈ませた。そこへ、空の青がどす黒く映るようだ。女の手を離れたコップもまた、女の側で、横に倒れていて、その底に僅かに残った水が零れると、その水も、直ぐに空の青に染まって見失われた。

　部屋は、四角い白い壁で囲まれて、低い天井が被さっている。窓もない。空の青が、何処から映り込むのか。青い色が見えるのなら、それは、女の体の中を経巡っている水の色でしかない。女には、細かく震える体の中で、無数の青い粒が、擦れ合って音を鳴らしているのが分かったが、部屋の中の何処にも、それを聞き取ろうとする耳はない。そして、その音も、女の体の震えと共に、今にも止みそうだった。コップから零れた最後の水の後を追うように、女の肌の色も、青く染まって見失われて行く。

　それでも女は、その音の鳴り止んだ瞬間の、体の中に満ちる筈の静けさだけは聞き取りたくて、壁に手を這い回らせ、その手の動きの中に、耳の形を探り

取ろうとした。その指が、組み紐に絡んだようで、動かせなくなった。細い腕は、恐ろしく重かった。薄い紙がそよ風に捲れるように、天井が取り払われて、四角い空が現れた。女は、その何処かへと逆様に落ちて行く自らの姿を、その青いばかりの中に追い続けた。（二〇〇二年七月二十一日）

＊　　＊　　＊

空き箱

下は暗かったので、皆、反り橋の方に移った。その木の橋は、幅が狭くて殆ど人で埋まり、ミシミシと音を立てて揺れた。橋の上は、下より明るいのだろうか。ただ橋の上に居れば、自分がそこに居るとは分かる。下に居たままでは、何処が橋の下なのかもはっきりしないし、暗くて橋を見失うかも知れない。皆とはぐれていないか、何時もキョロキョロしていなければならなかったし、その内に、散り散りになるのも、仕方ないようでもあった。

橋の上では、私達は、却って狭いのを楽しむように動き回った。足音が響いて、それに促されるように自ずと言葉が交わされ、その沢山の声が、足音と混ざり合う。その響きの中に身を浸していれば、橋全体が、高い所から照らされ

ているようだ。私の前を行き交う、その光りを浴びるかのような者達は、腋に抱えたものを、互いに見せ合った。それらは、籠か箱で、蓋を開けた中にはどれも、小さな動物が、何匹かずつ入っているようだった。

　見た限り、手ぶらで歩いている者は、一人も居ない。私だけが手ぶらで、誰とも言葉を交わさずにいて、少し後ろめたかったが、私がここに居られるのは、私がその籠か箱を、持っていないからではないだろうか。もしそれを持っていたら、私は、橋の上には来ないで、それを抱えて、独りで何処かに走り去っただろう。

　その内に彼らは皆、橋の側面の同じ方を向いた。一番前の、欄干に寄り掛かる者達は、そこから下を指差して、そこにゆっくりと水が流れて見えるのを、確かめ合った。その後ろの、橋から下を見下ろせない者達は、見て確かめなくても、その水の流れについては前から知っていると、言い合った。私は、一番後ろに押し出された。彼らの背中のズラリと並んで犇めくのが、端から端まで見渡せたが、その後ろには欄干がない。見た限り、橋の縁には何処も、壊れたり穴が開いたりはしていなくて、ただ綺麗な曲線が、左右に緩やかに下ってゆく。欄干は、初めから片側にしかなかったようだ。背中が並んだ後ろには、人一人通れる位の幅が空いていたので、私は、そこを行ったり来たりした。一歩踏み外せば、橋から落ちる。

彼らは、橋の上から水に放すには、誰の籠か箱の中のどの動物が最適か、言い合っていた。結論が出て、その持ち主の男が、白い籠を抱えて、欄干に飛び乗った。その籠は、椰子の実のような形で、真ん中からパックリと開いた。私の目には、その中に動物は見えなかった。それとも開いた瞬間に、すばしこく飛び出したか。男は、籠を私の方に投げて、自らは、身を翻して水に飛び込んだ。他の者達は、籠には見向きもせず、欄干から身を乗り出して、男の姿を追った。彼らの頭の上を越えた籠が、私の足元に転がった。私だけがその籠に目を留めていて、それが私に向けて投げられたように、思えただけかも知れない。私は、それを拾うべきかどうか、迷った。

その内に、また誰かが、欄干に飛び乗って、籠を放って水に飛び込んだ。同じ事をする者は、間を置かずに現れるが、必ず一人ずつで、しかも、他の者相手に欄干の上で暫く掛け合いをするので、人の数が、みるみる減って行くような事にはならない。籠はどれも、計ったように彼らの頭を越して、その直ぐ後ろに落ちた。腰を屈めた小柄な女が、這い蹲うようにして、それらを拾い集めている。初めの籠を拾わなくて良かった。拾っていたら、その籠の事で、女にいきなり話し掛けられていただろう。それを拾ってどうするのか、などと尋ねられたら、どう答えていいか分からない。籠が足元に転がってきた。やはり、白くて、椰子の実の形をしている。私は、それを拾って、女に近付き、

「拾ったものをどうするんですか。」と、尋ねた。女は、黙って顔を伏せたまま、私から籠を奪い、橋の袂の方に、走って下りて行く。そちらは、私達が上って来たのと反対方向だった。私は、ノロノロと後を追った。掛け合いに熱が入るらしく、他の者達の声が、段々と大きく荒々しくなる。背中の列が波打って、橋が揺れ、私は、何度も足を竦ませて、腰を屈め、欄干のない橋の縁を、力いっぱい掴まなければならなかった。女も見失った。そうして、女が、橋の向こうに走り去ったのか、途中で他の者達に紛れたのか、分からないまま、私は、橋の終わりまで来てしまっていた。暗くて何も見えないその先に、足を踏み入れる勇気はない。

踵を返すと、掛け合いにも、もう飽きてきたのか、大分静かで、背中の列も波打ってはいない。それでも、それまでは右足が外側だったのが、今度は左足が外側になって、ひどく歩き難い。踏み外さないよう、橋の縁だけに目を凝らし、それでも何とか、反り橋の一番高い真ん中まで戻れた。橋の下に、艶々とした泥の表面が見下ろせた。見詰めている内に、それは、脹らみながら緩やかに盛り上がって来るようで、橋の上よりは、幾らか明るいようにも見えて来る。その表面をもっとよく見ようと、しゃがみ込んだ。

「こうするんです。」と、か細い女の声が、横から聞こえた。泥の上に、幾つもの椰子の実の形をした籠がばらまかれ、白く点々と浮かんだ。それらは、

ゆっくりと動いて段々と拡がって行く。それから、私の直ぐ隣の女は、立ち上がって、その泥の表面の一番高く膨れている辺りに向かって、飛び降りた。女の小さな体が、泥の表面に沈んだ。泥の上は、水で覆われていたのだ。そうと分かっても、水は全く見えて来なかった。ただ泥の上に、水に沈んでいる女の、ゆっくりと手足を動かす姿が、浮き立って見えるだけだ。その周りの籠は、水に浮いているのか、泥の表面まで沈んでいるのか、まるで分からなかった。

　私は、顔を上げて、後ろを振り返った。一ヶ所に固まって欄干に寄り掛かっている、数人の背中が、見えるだけだった。私は、立ち上がって彼らに近付いた。橋の上には、潰れた箱ばかりが、かなり沢山散らばっていて、私は、その幾つかを踏ん付けた。彼らが一斉に振り返った。知らない顔ばかりで、一緒に橋に上って来た者達ではなかった。暫く私達は、一言も口を利かないまま、身動ぎもせずに向かい合うしかない。そこへ、幾つも混ざり合う声が、遠くから聞こえて来た。橋を渡った先からだった。女の後を追って行った時は、暗くて何も見えなかったのが、随分と明るくなっている。幅の広いかなり急な上り坂で、そこに、私と一緒だった者達が、散らばって辺りを見回しながら、盛んに声を上げていた。私の事が呼ばれているように思えた。

　私と面と向かっていた者達がばらけて、橋の上の潰れた箱を拾い出していた。私は、彼らが寄り掛かっていた欄干に近付いて、下を見下ろした。流れる水の

底から、大きな泥の山が湧き上がってきて、弧を描きながら、また沈んで行く。
そこへ、一人が私の肩を叩いて、
「ほら見てみろ」と言って、私に潰れた箱の中を見せた。箱の底に、干涸びて砕け掛けて、形を失った動物の死骸らしきものがこびり付いていた。
「みんな、こんな風になってしまったんですか。」と、私は尋ねた。
「バカ言え。」と言って、そいつは、その箱を私に押し付けた。
反り橋の上は、すっかり片付いた。彼らは、空き箱を腹の上にどっさり抱え込んで、私達が上って来た暗い方へと、固まって下りて行った。私は、空き箱を一つ持って、橋の上に独り切りのようだ。明るい坂の方に目を遣ると、色も形も大きさも一つとして同じでなさそうな、かなり沢山の小さな動物達が、カタカタと虚ろな音を響かせて、一斉に反り橋を渡り切り、更にその先の坂を駆け上っていた。坂を上りきった所には、私と一緒だった者達がそれを見下ろして、声を上げていた。彼らはさっきから、私ではなく、その動物達の事を呼んでいたのか。
何処も彼処も腐り果てていたかのように、反り橋が丸ごと崩れ落ちた。残骸は、みるみる泥に埋まり、橋など初めからなかったかのようだ。その泥の上を、少しも足を取られずに、私は、水の流れを探し回った。
流れてはいなかったが、窪みに水を見付けた。そこで、小柄な女が、まるで

湯船にでも浸かるようにしていた。幾らか離れていたので、女は、私には気付いていないだろう。私は、女の後ろから近付こうと、女を横目で見ながら、橋のあった所から遠ざかる方へと、回り込んで行った。すると、私だけではなくて、椰子の実の形の白い籠を腋に抱えた男達も、女の周りを回っている。女をすっかり取り巻いて、時計と反対方向に回っていて、私も、その輪に加わっていた。

輪は、段々と小さくなって行き、隣の男となら、小さな声でも言葉を交わせそうだ。私は、独りだけ、潰れ掛けた箱を抱えているのが何とも居心地が悪くなって、箱をそっと捨てた。何時の間にか、私だけが輪の外に出ていた。

輪が止まり、男達が籠を開くと、中からどれも、内臓が透ける程に薄い腹をした、同じ種類の小さな動物が飛び出して、窪みへと走った。水嵩は、やや増しているようでもある。女は、頭まですっかり水の中に沈んでいて、動物達は、その女目掛けて飛び込んで行った。男達は、囲みを解いて、泥を撥ね上げながら、橋のあった方に、歩き難そうに歩き出した。私だけは、少しも泥に足を取られずに、投げ捨てられた籠を集めて回った。全て集めて、屈めていた腰を伸ばすと、小柄な女が、目の前に立っている。動物達が、女の体中に纏わり付いて、女は、それを楽しむように、微笑みを浮かべていた。

「拾ったものをどうするんですか。」と、女に尋ねられたが、私は、答えら

れなくて顔を逸らした。少し離れた所に、男達が、固まって立ち止まっていた。私の捨てた箱を取り囲み、誰がどんな手抜かりをしでかして、箱をこんな所に落として行ったのか、厳しい調子で詮索し合っていた。矛先が私に向けられたら、直ぐに窪みの中に走り込もうと思いながら、彼らの声を聞いている内に、眠くなって来て、その眠気に誘われるように、却って彼らの方にフラフラと近付いた。彼らは、喋るのに夢中で、私に気付かない。蹲って、彼らの脚の間から腕を差し込めば、箱を拾えるかも知れない。しかし、泥に埋もれたのか、箱は見当たらなかった。男達は、立ったまま眠り込んでいた。私は、また女に近付いて、

「一匹、貰えませんか。」と、声を掛けたが、女は、微笑んだまま、橋のあった方に歩いて行くだけだった。その女の先をもう、眠りながらなのかどうか分からないが、男達が歩いていた。

窪みの中に一匹くらい残っているかも知れない。私は、水に飛び込んだ。水はひどく汚れていて臭かった。体を沈めると、腋に抱えていた籠が全て、浮力で水面に向かって飛び跳ねた。水が濁って、何も見えない。底の方なら少しは見通しが利くかも知れない。更に潜って行くと、小さな動物の泳いでいる姿を見付けたように思えたが、どうやらそれは、細かく水を掻く私の姿だった。

息を継ごうと、水の上に首を出した。新しい反り橋が、遠くに架かっている。

幾つもの白い籠が、綺麗に澄んだ水の上に浮いて、私の周りをゆっくりと回り続けた。その輪のせいで、水から上がれないようだ。（二〇〇二年七月二十五日）

魚、その他

著者　u_

© 2002 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published